宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第184集

住吉（すみよし）B遺跡（いせき）
赤石（あかいし）遺跡（いせき）

国営尾鈴農業水利事業大内ファームポンド敷地造成工事及び調整水槽工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009
宮崎県埋蔵文化財センター

遺跡遠景（南東上空から）

遺跡全景（南東上空から）

縄文時代中期の土器群

序　文

宮崎県教育委員会では、2007(平成19)年度に国営尾鈴農業水利事業大内ファームポンド敷地造成工事及び調整水槽工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書です。

本書に掲載した住吉B遺跡では、旧石器時代～縄文時代早期における集石遺構や土坑、土器・石器遺物などが確認され、赤石遺跡では、縄文時代中期～後期の竪穴住居・土坑、土器・石器遺物や弥生時代中期の竪穴住居、土器・石器遺物などが確認されました。

これらは、当該期の地域間交流の様相を考える上で大きな成果となりました。ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で良好な資料の蓄積になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで広く活用され、埋蔵文化財保護に対する認識や理解を深める一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた関係諸機関はじめ、地元の方々に心より厚くお礼申し上げます。

2009年2月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長　福永展幸

例　言

1　本書は、国営尾鈴農業水利事業大内ファームポンド敷地造成工事及び調整水槽工事に伴い宮崎県教育委員会が実施した、宮崎県児湯郡川南町所在の住吉Ｂ遺跡及び赤石遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、農林水産省九州農政局尾鈴農業水利事業所の委託を受け、宮崎県教育委員会を主体に宮崎県埋蔵文化財センターが実施し、住吉Ｂ遺跡は2007（平成19）年11月19日から2008（平成20）年２月15日まで、赤石遺跡は2007（平成19）年11月19日から2008（平成20）年１月21日まで行った。

3　発掘調査は、住吉Ｂ遺跡を調査第二課第四担当主事二宮満夫・同課第三担当主査若松宏一が、赤石遺跡を同課第三担当主査谷口千尋・同課第四担当主事森田利枝が行った。また、現地測量における図面作成及び写真撮影については、それぞれの調査担当者が行った。なお、発掘調査についての組織は以下の通りである。

2007（平成19）年度	所長	清野　勉	調査第二課長	石川　悦雄	
	副所長	加藤　悟郎	調査第二課主幹調査第四担当リーダー	近藤　協	
	総務課長	宮越　尊	調整担当（文化財課主査）	日高　広人	
	総務課主幹総務担当リーダー	高山　正信			

4　整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係わる業務については住吉Ｂ遺跡を二宮が、赤石遺跡を谷口が、それぞれ整理作業員の協力を得て行った。

5　住吉Ｂ遺跡の空中写真撮影業務は、有限会社スカイサーベイ九州に、基準点測量・グリッド杭設置等の測量業務は、有限会社川南技術コンサルタントに委託した。赤石遺跡の空中写真撮影業務は、有限会社ふじたに、基準点測量・グリッド杭設置等の測量業務は、有限会社久保田測量設計に委託した。

6　赤石遺跡の自然科学分析は、株式会社古環境研究所に委託し、分析結果については第Ⅴ章に収録した。

7　本書の執筆は、第Ⅰ・Ⅲ章を二宮、第Ⅱ・Ⅳ章を谷口が行い、全体の編集については、両者が協議のうえ行った。なお、整理作業・報告書作成についての組織は、以下の通りである。

2008（平成20）年度	所長	福永　展幸	調査第二課長	石川　悦雄	
	副所長	加藤　悟郎	調査第二課主幹調査第四担当リーダー	近藤　協	
	副所長兼総務課長	長友　英洞	調整担当（文化財課主査）	日高　広人	
	総務課主幹総務担当リーダー	高山　正信			

8　整理作業にあたっては、当センターの職員から有益な助言を得た。また、住吉Ｂ遺跡の地層の微細観察および赤石遺跡出土の石製品の石材同定については、赤崎広志氏（宮崎県総合博物館）の御教示を得た。

9　調査で出土した遺物、その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡　例

1　本書で使用した地図は、国土地理院発行の２万５千分の１図（川南・石河内）、川南町役場発行の１万分の１図、農林水産省九州農政局尾鈴農業水利事業所提供の千分の１図をもとに作成した。

2　本書で使用した方位は、国土座標第Ⅱ系（世界測地系）の座標北、標高については、海抜絶対高を示す。

3　本書で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編2006『新版　標準土色帖』28版に準じた。

4　本書における遺構名の表記は、竪穴住居をＳＡ、土坑をＳＣ、集石遺構をＳＩ、不明遺構をＳＺで示し、遺構番号については、遺跡毎に整数の通し番号を付した。

5　本書で取り扱う縄文土器のうち、早期については、新東晃一1989、木崎康弘1998、中期については、柬畑光博1997において、それぞれに示された分類と編年に準じた。その他にも、金丸武司2004を参考にした。また、弥生土器については、石川悦雄1984、柬畑光博2000を参考にした。

なお、本書で参考および引用した文献については、p.76に収録しているが、特に本文中において注などで示していない。

本 文 目 次

序

例言

凡例

第Ⅰ章　はじめに
第１節　発掘調査に至る経緯……1
第２節　整理作業および報告書作成の経過……2

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境
第１節　遺跡の立地……3
第２節　既往の調査と歴史的環境……3

第Ⅲ章　住吉B遺跡の調査結果
第１節　発掘調査の経過……6
第２節　発掘調査区の層序……7
第３節　旧石器時代……9
1　石器遺物の出土状況……9
2　石器遺物……9
第４節　縄文時代早期……12
1　遺構の分布と遺物の出土状況……12
2　検出遺構と出土遺物……12
ⅰ）土坑　ⅱ）集石遺構
ⅲ）遺構に伴わない遺物
第５節　まとめ……27

第Ⅳ章　赤石遺跡の調査結果
第１節　発掘調査の経過……28
第２節　発掘調査区の層序……29
第３節　縄文時代中期～後期……32
1　検出遺構と出土遺物……32
ⅰ）竪穴住居　ⅱ）土坑
2　遺物包含層出土の遺物……40
ⅰ）土器　ⅱ）石器遺物
第４節　弥生時代中期……54
1　検出遺構と出土遺物……54

ⅰ）竪穴住居　　ⅱ）不明遺構
ⅲ）弥生土器集中部
2　遺物包含層出土の遺物……68
ⅰ）土器
第5節　その他の時代の遺物……72
第6節　まとめ……73
1　縄文時代……73
2　弥生時代……75

第Ⅴ章　赤石遺跡における自然科学分析
第1節　放射性炭素年代測定……86
1　はじめに……86
2　試料と方法……86
3　測定結果……86
ⅰ）$\delta^{13}C$測定値　　ⅱ）^{14}C年代測定値
ⅲ）暦年代（Calendar Age）
4　所見……87
第2節　樹種同定……88
1　はじめに……88
2　試料……88
3　方法……88
4　結果……88
5　考察……90
第3節　炭化種実同定……90
1　はじめに……90
2　試料……90
3　方法……90
4　結果……90
ⅰ）分類群　　ⅱ）種実群集の特徴
5　考察……91

第4節　植物珪酸体分析……91
1　はじめに……91
2　試料……92
3　分析法……92
4　分析結果……93
ⅰ）分類群　　ⅱ）植物珪酸体の検出状況
5　植物珪酸体分析から推定される植生と環境……93

第5節　花粉分析……95

1　はじめに……96
2　試料……96
3　方法……96
4　結果……95
　　i）分類群　　ii）花粉群集の特徴
5　花粉分析から推定される植生と環境……96

巻頭図版目次

巻頭図版　赤石遺跡
　上　遺跡遠景　　中　遺跡全景　　下　縄文時代中期の土器群

図版目次

1　住吉B遺跡　調査地遠景
　上　遺跡東側上空から住吉B遺跡および上面木山方面を望む
　下　遺跡上空から東側日向灘方面を望む
2　住吉B遺跡　南壁地層断面
　　および縄文時代早期の遺構（一）
　上　南壁地層断面
　下　縄文時代早期遺構面全景
3　住吉B遺跡　縄文時代早期の遺構（二）
　上　南西部礫集中部
　中　ＳＣ２検出状況
　下　ＳＣ２縄文土器出土状況
4　住吉B遺跡　縄文時代早期の遺構（三）
　上　ＳＩ１検出状況
　下　ＳＩ１検出状況
5　住吉B遺跡　旧石器時代の遺物
6　住吉B遺跡　ＳＣ２・ＳＩ１出土
　　および縄文時代早期の遺物（一）
7　住吉B遺跡　縄文時代早期の遺物（二）
8　住吉B遺跡　縄文時代早期の遺物（三）
9　赤石遺跡　調査区
　上　調査地遠景
　中　調査区全景
　下　調査区西壁土層断面
10　赤石遺跡　遺物包含層および縄文時代の遺構（一）
　上　Ⅲ層（Ｂ２区）出土遺物No426
　中　ＳＡ１遺物出土状況
　下　ＳＡ１出土遺物No106
11　赤石遺跡　縄文時代の遺構（二）
　上　ＳＣ１検出状況
　中　ＳＣ１土層観察ベルト断面
　下　ＳＣ２土層観察ベルト断面
12　赤石遺跡　縄文時代の遺構（三）
　上　ＳＣ３検出状況
　中　ＳＣ３遺物出土状況
　下　ＳＣ４検出状況
13　赤石遺跡　縄文時代の遺構（四）
　上　ＳＣ10埋土土層断面
　中　ＳＣ11遺物出土状況
　下　ＳＣ11埋土土層断面
14　赤石遺跡　弥生時代の遺構（一）
　上　ＳＡ２遺物出土状況
　中　ＳＡ２床面検出状況
　下　ＳＡ２完掘状況
15　赤石遺跡　弥生時代の遺構（二）ほか
　上　調査区南東側部の遺構検出状況
　中　ＳＺ１床面検出状況

下　ＳＺ１完掘状況
16　赤石遺跡　縄文時代の遺物（一）
上　ＳＡ１出土遺物①：縄文土器・石器
中　ＳＡ１出土遺物②：縄文土器
下　ＳＣ１～ＳＣ４出土縄文土器
17　赤石遺跡　縄文時代の遺物（二）
上　ＳＣ９～ＳＣ11出土縄文土器
中　ＳＣ５・７・９・10・11出土石器
下　ＳＣ11出土石器
18　赤石遺跡　縄文時代の遺物（三）
上　遺物包含層出土縄文土器①
中　遺物包含層出土縄文土器②
下　遺物包含層出土縄文土器③
19　赤石遺跡　縄文時代の遺物（四）
上　遺物包含層出土縄文土器④
中　遺物包含層出土縄文土器⑤
下　遺物包含層出土縄文土器⑥
20　赤石遺跡　縄文時代の遺物（五）
上　遺物包含層出土縄文土器⑦
中　遺物包含層出土縄文土器⑧
下　遺物包含層出土石器①
21　赤石遺跡　縄文時代の遺物（六）
上　遺物包含層出土石器②
中　遺物包含層出土石器③
下　遺物包含層出土石器④
22　赤石遺跡　縄文時代の遺物（六）・弥生時代の遺構出土の遺物（一）
上　ＳＡ２出土縄文土器
中　ＳＡ２出土弥生土器①
下　ＳＡ２出土弥生土器②
23　赤石遺跡　弥生時代の遺構出土の遺物（二）
ＳＡ２出土弥生土器③
24　赤石遺跡　弥生時代の遺構出土の遺物（三）
上　ＳＡ２出土弥生土器④
中　ＳＡ２出土石器①
下　ＳＡ２出土石器②
25　赤石遺跡　弥生時代の遺構出土の遺物（四）
上　ＳＡ２出土石器③
中　ＳＺ１出土縄文土器
下　ＳＺ１出土弥生土器
26　赤石遺跡　弥生時代の遺構出土の遺物（五）ほか
上　ＳＺ１出土石器①
中　ＳＺ１出土石器②
下　弥生土器集中部出土遺物：弥生土器・石器
27　赤石遺跡　弥生時代の遺物（一）
上　遺物包含層出土弥生土器①
中　遺物包含層出土弥生土器②
下　遺物包含層出土弥生土器③
28　赤石遺跡　弥生時代の遺物（二）
遺物包含層出土弥生土器④
29　赤石遺跡　その他の遺物
上　ＳＡ１・ＳＣ２・ＳＣ４・ＳＡ２・ＳＺ１
・遺物包含層出土石器
下　その他の時代の遺物：石器・土師器

挿図目次

図１　住吉Ｂ遺跡・赤石遺跡の調査地位置図
図２　周辺の遺跡分布
図３　調査地位置図
図４　調査地配置図
図５　西壁地層断面図
図６　各層位出土の旧石器時代石器遺物（１）
図７　各層位出土の旧石器時代石器遺物（２）
図８　ＳＣ１平断面図および
ＳＣ１・２出土縄文土器
図９　縄文土器早期の遺構平面図および出土遺物位置図
図10　ＳＩ１平断面図
図11　ＳＩ１出土の打製石斧
図12　各層位出土の縄文時代早期土器（１）

図13　各層位出土の縄文時代早期
　　土器（2）
図14　各層位出土の縄文時代早期
　　打製石鏃
図15　各層位出土の縄文時代早期削器
図16　各層位出土の縄文時代早期掻器
図17　各層位出土の縄文時代早期
　　細部調整剥片
図18　各層位出土の縄文時代早期敲石
図19　各層位出土の縄文時代早期
　　磨石・凹石
図20　各層位出土の縄文時代早期
　　局部磨製石斧
図21　各層位出土の縄文時代早期
　　打製石斧・接合資料・石核
図22　調査地配置図
図23　地層断面模式図
図24　遺構分布図
図25　土層観察ベルト断面図
図26　ＳＡ１出土遺物実測図
図27　ＳＡ１出土状況図
図28　ＳＣ１平断面図
図29　ＳＣ２・３平断面図
図30　ＳＣ１～４出土遺物実測図
図31　ＳＣ９・10平断面図
図32　ＳＣ11平断面図
図33　ＳＣ９～11出土縄文土器実測図
図34　ＳＣ５～11出土石器実測図
図35　遺物包含層出土遺物実測図（1）
図36　遺物包含層出土遺物実測図（2）
図37　遺物包含層出土遺物実測図（3）
図38　遺物包含層出土遺物実測図（4）
図39　遺物包含層出土遺物実測図（5）
図40　遺物包含層出土遺物実測図（6）
図41　遺物包含層出土遺物実測図（7）
図42　遺物包含層出土遺物実測図（8）
図43　遺物包含層出土遺物実測図（9）
図44　遺物包含層出土遺物実測図（10）
図45　遺物包含層出土遺物実測図（11）
図46　ＳＡ２実測図
図47　ＳＡ２出土遺物実測図（1）
図48　ＳＡ２出土遺物実測図（2）
図49　ＳＡ２出土遺物実測図（3）
図50　ＳＡ２出土遺物実測図（4）
図51　ＳＡ２出土遺物実測図（5）
図52　ＳＺ１実測図
図53　ＳＺ１出土遺物実測図（1）
図54　ＳＺ１出土遺物実測図（2）
図55　ＳＺ１出土遺物実測図（3）
図56　弥生土器集中部出土遺物実測図
図57　遺物包含層出土遺物実測図（12）
図58　遺物包含層出土遺物実測図（13）
図59　その他の時代の出土遺物
　　実測図（1）
図60　その他の時代の出土遺物
　　実測図（2）
図61　石器類器種別出土点数
図62　石器類器石材別出土点数
図63　暦年較正結果
図64　植物珪酸体分析結果

本文写真目次

写真１　調査以前の状況
写真２　西壁北部の地層断面
写真３　打製石鏃65の出土状況
写真４　桑ノ木津留産黒曜石の小剥片
写真５　炭化材
写真６　種実
写真７　植物珪酸体
写真８　花粉・胞子

表目次

表１　旧石器時代石器遺物の属性
　　および計測値
表２　縄文時代早期石器遺物の属性
　　および計測値
表３　基本層序
表４　土坑計測一覧表
表５　縄文土器観察表（1）
表６　縄文土器観察表（2）
表７　縄文土器観察表（3）
表８　弥生土器観察表（1）
表９　弥生土器観察表（2）
表10　弥生土器観察表（3）
表11　弥生土器観察表（4）
表12　土師器観察表
表13　石器観察表（1）
表14　石器観察表（2）
表15　樹種同定結果
表16　種実同定結果
表17　植物珪酸体分析結果
表18　花粉分析結果

第Ⅰ章　はじめに

第１節　発掘調査に至る経緯

農林水産省九州農政局宮崎農業水利事務所尾鈴農業水利事業建設所（現農林水産省九州農政局尾鈴農業水利事業所）では、尾鈴地区の農業生産性の向上と農業経営の安定を目的とする台地上の畑地への水源確保のために、既存の青鹿ダムと新設予定の切原ダムの計画的な利用と併せて、県営畑地帯総合整備事業による末端の灌漑施設の整備を行う「国営尾鈴土地改良事業」を1996（平成８）年度から実施している。

県文化課（現文化財課）では、この事業計画を受けて灌漑施設の建設予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、平成７年度より同事業所と協議を開始し、1999（平成11年）度には尾鈴銀座２号ファームポンド建設工事に伴う蔵座村遺跡、2006（平成18）年度には銀座第１ファームポンド工事に伴う明野遺跡の発掘調査を実施した。

2007（平成19）年度における同事業所の事業として、川南町大字川南字住吉25953－２外の大内ファームポンド、同町大字川南字鵜戸ノ本2984－３の赤石・鵜戸ノ本調整水槽、同町大字川南字丸尾2783－３の大内調圧水槽の３施設についての建設工事計画があがり、同事業所より埋蔵文化財の有無についての照会があった。いずれの建設予定地も周知の埋蔵文化財包蔵地であったが、県文化財課では確認調査による判断を必要とし、同年８月に同課によって確認調査を実施した。この結果、大内調圧水槽建設予定地（大内遺跡）については、遺構・遺物ともに確認されなかったが、大内ファームポンド建設予定地（住吉Ｂ遺跡）で縄文時代早期の遺物包含層などを、赤石・鵜戸ノ本調整水槽建設予定地（赤石遺跡）で縄文時代後晩期及び弥生時代中期の遺構・遺物などを確認した。

遺跡の存在を改めて確認した住吉Ｂ遺跡と赤石遺跡の取り扱いについて、両者間で工事計画変更等の埋蔵文化財保護の方法についての協議を行ったが、尾鈴地区における水利事業の遂行上、工事予定地の全区域において現状保存は困難であるという結論に達したため、発掘調査による記録保存の措置をとることになり、同年11月１日付で「埋蔵文化財発掘調査負担契約書」を締結した。

なお、発掘調査の実施については、宮崎県埋蔵文化財センターが担当し、住吉Ｂ遺跡・赤石遺跡ともに同年11月19日に着手した。

参考　尾鈴農業水利事業所「地域の概要」〈http://www.maff-kyushu-nn.go.jp/new/11/area.htm〉（2008/4/15 アクセス）

第２節　整理作業および報告書作成の経過

両遺跡ともに、現地調査終了後、出土品及び図面・写真などの記録物を宮崎県埋蔵文化財センター本館へ持ち帰り、記録物の整理作業と出土品の一部洗浄作業を行った。本格的な整理作業については、住吉Ｂ遺跡は分館、赤石遺跡は本館にて2008（平成20）年５月１日より開始し、出土品の洗浄・注記作業が終了した後、実測作業に入った。出土品は、住吉Ｂ遺跡で約100点、赤石遺跡で約400点を図化し、写真撮影を行った。加えて、赤石遺跡については、自然科学分析の実施のために、２号竪穴住居の床面付近一部で抽出した埋土のフローテーション作業を行い、炭化物などを選別した。そして、報告書刊行に係る製図及び執筆編集作業のすべてを同年11月までに完了させ、12月から翌年２月にかけて印刷・製本作業を行った。

なお、出土品の一部と成果については、同年８月19日～９月５日の間、宮崎県立図書館特別展示室を会場とした「ミニ巡回展」にて展示を行い、また、同年８月23日には、遺跡発掘速報会「ひむかの歴史2008」において、一般市民向けの成果報告会を行った。

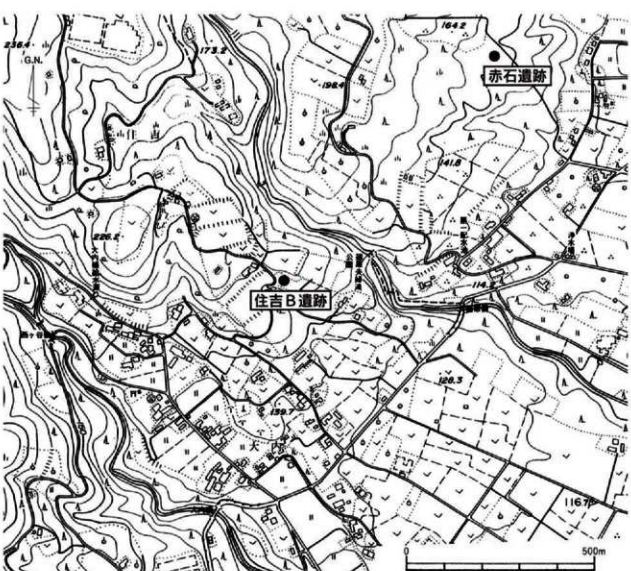


図１　住吉Ｂ遺跡・赤石遺跡の調査地位置図

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

第1節　遺跡の立地

住吉B遺跡は、児湯郡川南町大字川南字住吉に、赤石遺跡は、同字縞戸ノ本に所在する。2つの遺跡が立地する川南町は、宮崎県の中央部にあり、東に黒潮が北進する日向灘を望み、尾鈴山（標高1405m）の南東に位置する。西は上面木山（標高1040m）の稜線によって木城町、南は高鍋町、北は名貫川を境に都農町と接している。また、尾鈴山系から東流する名貫川の南岸域にあたることで、「川南」の由来ともなっている。

川南町の大部分は洪積台地であり、上面木山を中心とした尾鈴酸性岩からなる山地が西部に広がり、中央部から東側には緩やかに傾斜する段丘が扇状地状に展開している。段丘は名貫川や平田川による浸食崖や谷によって14の段丘面に区分される。代表的な段丘面として、町の中央部に川南原、平田川以北の唐瀬原と中須川以南の国光原、その中間に位置する野田原などがある。段丘面には、「原」が付される地名が示すように広い平坦面が広がり、古くから人間の生産活動の場となっている。現代では、果樹や茶の栽培、酪農、野菜作りなどの農業が盛んである。

今回報告する2つの遺跡の立地条件は以下のとおりである。

住吉B遺跡は、川南町の西部、上面木山から派生する丘陵の南東斜面に立地し、丘陵の北側には平田川の支流篠原川が、南側には小丸川の支流切原川が東流する。調査対象地の現状は、戦後に丘陵の緩斜面を大きく階段状に切り開いた畑地となっており、現況標高は、178～182mを測る。

赤石遺跡は、上面木山から派生した丘陵の尾根部縁辺にあたり、標高約155mの南東に向けて下る緩斜面に立地している。遺跡の北側には平田川、南側には篠原川が流れている。

住吉B遺跡と赤石遺跡の位置関係については、篠原川が形成した谷地形を挟んで、直線で約0.8kmの距離にある。近接する遺跡には、平田川を挟んで北に市納上第1～5遺跡や蔵座村遺跡、南に虚空蔵免遺跡や赤石・天神本遺跡が位置する。

第2節　既往の調査と歴史的環境

近年、川南町では東九州自動車の建設や国営尾鈴農業水利事業などに伴う埋蔵文化財発掘調査によって、調査される遺跡が増えてきている。ここでは、おおまかに、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、歴史時代に分けて述べていきたい。

旧石器時代は、多くは大野實男氏の精力的な踏査による部分が大きく、白髭遺跡〔ナイフ形石器・細石核〕、旭ケ丘遺跡〔尖頭器〕などが知られている。また、その後には川南町教育委員会によって住吉B遺跡〔細石核〕などが調査されている。そして、後期の遺跡では、後牟田遺跡〔鋸歯縁石器・礫群〕

が代表例として挙げられるが、発掘調査自体は少ない。

近年の東九州自動車道関連発掘調査では、姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ）下位～上位にわたり多くの成果が出ている。その中には、ＡＴ下位で、中ノ迫第１遺跡〔礫群〕、ＡＴ上位で、虚空蔵免遺跡〔礫群・ナイフ形石器・角錐状石器・細石刃核等〕、赤石・天神本遺跡〔礫群・ナイフ形石器・角錐状石器・細石刃等〕などがある。

縄文時代については、草創期から晩期までの良好な遺跡は確認されていなかったが、近年になって山地及び山麓における発掘調査が増えてきている。具体的には、赤石・天神本遺跡や前ノ田村上第２遺跡〔草創期の隆帯文土器〕、尾花坂上遺跡〔早期の集石遺構〕、中ノ迫第３遺跡〔早期前半の集石遺構・炉穴・局部磨製石斧〕、霧島遺跡・蔵座村遺跡〔早期の集石遺構・貝殻文・円筒形貝殻条痕文・押型文・条痕文等の土器〕、上ノ原遺跡〔集石遺構・早期の押型文土器・貝殻条痕文土器〕、虚空蔵免遺跡〔集石遺構・炉穴・隆帯文・押型文・貝殻条痕文土器〕などが挙げられる。また、赤石・天神本遺跡では縄文時代後期～晩期の竪穴住居と集石遺構が検出されている。

弥生時代の遺跡は、旧石器時代や縄文時代と比べ格段に多く充実した成果をもたらしている。前期の遺跡は確認されていないが、中期・後期から終末期の集落遺跡の調査は多い。中期の遺跡としては、蔵座村遺跡・大内原遺跡・前原Ｂ遺跡・湯牟田遺跡が挙げられる。蔵座村遺跡〔「中溝式土器」・竪穴住居〕、大内原遺跡〔「下城式土器」・逆Ｌ字口縁の甕口縁部〕などの調査例が示すように、中期の集落は山麓（丘陵地）の縁辺部に立地していたと考えられる。後期になると数多くの遺跡が確認されており、把言田遺跡や中ノ迫Ａ遺跡では竪穴住居が検出されている。円形周溝墓については、県内でも検出例が少なく、しかも低地であったことから、赤坂遺跡において丘陵頂部の平場で造営されていたことは特徴的な立地として特筆される。

古墳時代の遺跡としては、古墳時代前期から後期まで営まれた国指定史跡の川南古墳群が代表される。横穴墓や地下式横穴墓が墓制として採用されていない地域である。

古代においては、下垂門の奈良時代後半の蔵骨器を伴う火葬墓が挙げられる。 韓家郷の一部にも比定されており、渡来人との関連が伺える。去飛（都農町）の駅と児湯（木城町高城）の駅を結ぶ古代幹線道路の存在も推測される。

中世においては、1578年の高城・耳川の戦いの大友・島津両軍の戦死者を弔うために島津方の武将山田新助が建立した宗鱗原供養塔が著名である。また、東九州自動車道関連発掘調査において銀座第１遺跡や前ノ田村上第１遺跡で中世～近世の居館及び集村が検出されている。大内原遺跡では配石土坑墓１基が検出され、埋土中から墨書石３点と土師器小皿５点が出土している。さらに、市納上第１遺跡からは溝状遺構１条が検出されている。

近世から現代にかけては大規模な開拓事業が進められた。特に第二次世界大戦前後には、川南町が"川南合衆国"と呼ばれるように多くの入植者が移住を始めた。また、戦争遺跡として陸軍落下傘部隊の給水塔の存在がある。

1	**住吉B遺跡**	**2**	**赤石遺跡**	3	銀座第1遺跡	4	銀座第2遺跡	5	虚空蔵免遺跡
6	赤石・天神本遺跡	7	天神本第2遺跡	8	大内原遺跡	9	中ノ迫第1遺跡		
10	中ノ迫第2遺跡	11	中ノ迫第3遺跡	12	前ノ田村上第1遺跡	13	前ノ田村上第2遺跡		
14	赤坂遺跡	15	湯牟田遺跡	16	藏座村遺跡	17	後牟田遺跡	18	番島遺跡
19	白鬚遺跡	20	旭ヶ丘遺跡	21	番野地C遺跡	22	椎原遺跡	23	大久保遺跡
24	谷ノ口遺跡	25	上ノ原遺跡	26	丸山西原遺跡	27	松ヶ迫遺跡	28	東平下遺跡
29	把言田遺跡	30	中ノ迫A遺跡	31	野稲尾遺跡	32	市納上遺跡	33	住吉A遺跡
34	大内遺跡	35	白鬚原遺跡	36	萱根遺跡				

図2　周辺の遺跡分布

第Ⅲ章　住吉B遺跡の調査結果

第1節　発掘調査の経過

大内ファームボンド建設予定地の現状は、丘陵を大きく改変した階段状の畑地であることから、確認調査では対象地区全域において遺物包含層が確認されることはなかった。そこで、建設予定地における調査対象面積7,490㎡のうち、確認調査の結果にもとづいて、遺物包含層が顕著に残る階段状の畑地の上位2段分2,250㎡を発掘調査対象地としたが、安全面を考慮した作業空間を確保するために、周囲に十分な控えを設けたことから、最終的に約1,250㎡を発掘調査区域とした。

発掘調査は、2007（平成19）年11月19日より開始し、表土の重機掘削から行った。確認調査においてアカホヤ火山灰降下以後の遺構・遺物が確認されなかったことから、アカホヤ火山灰の二次堆積層を若干残して、上位の造成土やクロボクなど0.2～1.6mを重機によって掘り下げた。以後は、人力によって調査を進め、適宜に図面・写真による記録作業を行い、2008（平成20）年1月9日には、縄文時代早期の遺構・遺物を検出したⅣ層上面の空中写真撮影を実施した。なお、平面的な発掘調査は、Ⅶ層直上までとし、以下については、地層堆積状況の観察に努め、同年2月15日に現地調査に係るすべての作業を終了した。

また、図面作成や遺物の取上げなどの記録作業に供するため、世界測地系の正方位に準じた10m四方の地区割を、調査区域すべてを包括するように設定した。地区名については、東西方向にアルファベット、南北方向に算用数字を付して、図4のように組み合わせて示した。

写真1　調査以前の状況（北から）

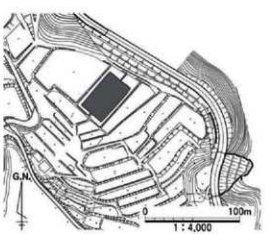


図3　調査地位置図

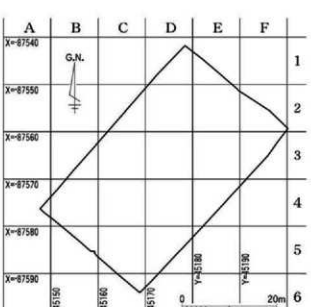


図4　調査地配置図

第２節　発掘調査区の層序

調査対象地の現状は、丘陵の緩斜面を階段状に大きく切り開いた畑地で、発掘調査は、比高差が約２mある上下段の畑地２面について行った。現況の標高は、上段が180.3～180.7m、下段が177.8～178.3mを測る。

上下段の調査区において、平坦面造成のために、旧地形上に造成土を厚く盛り上げた箇所（平坦面の階下側１/３～１/２程度）は、クロボク土（Ⅰ層）以下の地層の堆積を確認できたが、著しく削平された階上側については、地ならしのために薄く盛られた造成土の直下に始良Ｔｎ火山灰の風化層あるいはそれ以下の地層が露出する状況で、旧地形が残ることはなかった。

地層堆積状況の観察と記録は、削平が及んでいない調査区の西側壁で行い、Ⅷ層以下については、Ｄ５区に存在した確認調査トレンチの東側壁で補い、図上で合成した。

現地表下20～90cmは、２回に分けて盛土された近代～現代の造成土（０・０’層）で、以下については、降下火山堆積物由来の土壌と周辺域の基盤層である尾鈴山酸性岩類の風化表層土壌を確認した。

０・０’層は厚さ20～90cmの造成土で、重機による転圧を受けたためか非常に硬くしまる。

Ⅰ層は厚さ20～45cmのクロボク土である。層相は黒色細粒砂質シルトで、わずかに橙色粒が混入する。

Ⅱ層は黒色極細粒砂が混在する明褐色シルト混極細粒砂で、層厚は10～25cmである。土壌化したアカホヤ火山灰の２次堆積層であると考えられる。最下部には橙色粒のみが堆積する所もある。

Ⅲ層は黒色細粒砂混シルトのローム層で、光沢があり硬くしまる。層厚は10～20cmである。縄文時代早期の遺物を包含しており、ＭＢ０に相当する。

Ⅳ層は黒褐色シルトで、非常に硬くしまるローム層である。層厚は約15cmで、ＭＬ１に相当する。本層上面及び本層内で縄文時代早期の遺構を確認した。

Ⅴ層は厚さ15～25cmの暗褐色弱粘土質シルトのローム層である。調査区南側では極細粒砂が混入し、色調はさらに暗くなる。

Ⅵ層は白色粒を含む黒褐色極細砂質粘土質シルトのローム層で、径２cm以下の褐色粘土質シルトのブロックが混入する。層厚は約25cmである。

なお、地層観察の結果、Ⅴ・Ⅵ層は本来同一層であり、Ⅴ層は土壌化が進行した状態と考えることができる。微細観察を行ったところ、Ⅴ層内では石英粒と輝石粒が卓越し、Ⅵ層ではわずかに橙色のスコリアが検出できた。このことから、Ⅴ・Ⅵ層はＫｒ－Ｋｂ相当層と考えられる。

Ⅶ層は始良Ｔｎ火山灰の２次堆積層で風化が著しい。粘性の強度で上部と下部に細分した。上部は粘性が強い灰暗褐色シルト～細粒砂で、白色粒の混入が多い。層厚は10～25cmである。

写真２　西壁北部の地層断面

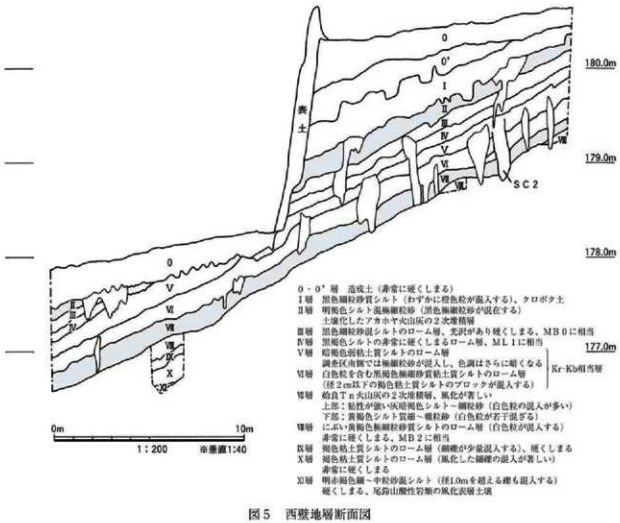


図５　西壁地層断面図

下部は黄褐色シルト質細～粗粒砂で、白色粒は若干混ざる程度であった。

Ⅷ層はにぶい黄褐色極細粒砂質シルトで、白色粒が混入する。ＭＢ２に相当する非常に硬くしまるローム層である。層厚は約20㎝である。

Ⅸ層は細礫が少量混入する褐色粘土質シルトのローム層で、硬くしまる。層厚は約15㎝である。

Ｘ層は風化した細礫の混入が著しい褐色粘土質シルトのローム層で、非常に硬くしまる。層厚は15～25㎝である。

Ⅺ層は基盤層である尾鈴山酸性岩類の風化表層土壌である。径1.0ｍを超える礫も混入する明赤褐色細～中粒砂混シルトで硬くしまる。層厚は10㎝以上である。

※　ＭＢ０・ＭＬ１・ＭＢ２の表記については、宮崎県埋蔵文化財センター2003『平成14年度　東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第76集に準じる。

第3節　旧石器時代

1　石器遺物の出土状況

旧石器時代の調査は、Ｋｒ－Ｋｂ相当層であるⅤ・Ⅵ層において、遺構・遺物の検出を主としたが、残念ながら当該期に属する礫群などの遺構は認められず、かつ、Ⅴ・Ⅵ層中に包含される石器遺物の出土についても顕著ではなかった。しかし、旧石器時代に属する石器遺物は、多くはないが上位層中にも包含されおり、Ⅴ・Ⅵ層中での石器遺物の出土と合わせて考えると、当該地区における旧石器人の活動を想定できたが、当該期の旧地形は最大で約35°に達し、日々の生活には適さないほどの傾斜地であったことから、礫群などの生活痕跡は構築されなかったと思われる。このことから、旧石器人の活動の場は、さらに高位の平場にあったと考えられ、出土の石器遺物も、そこからの混入であったと推察する。以下には、旧石器時代に属すると判断した包含層出土の石器遺物を列挙し、観察所見を記載した。なお、出土石器遺物の属性および計測値は表１に掲載する。

2　石器遺物（図６・７、図版５）

１・２は、ともに縦長剥片を素材とした一側縁加工のナイフ形石器である。**１**は裏面下半部に節理面を残す小型のナイフ形石器で、表面左側縁に整形剥離を施している。**２**は表面左側縁に荒い整形剥離を施すが、刃部が整っていないため、未成品の可能性も残る。

３～６は縦長剥片を素材とする削器である。**３**は表面右側縁と裏面右側縁に微細な剥離を施し刃部とする。**４**は表面左側縁に連続する細部調整を、裏面右側縁の中央に微細な剥離を施し二側縁に刃部を作る。**５**は表面右側縁に丁寧な細部調整を施す。**６**は風化による磨耗が著しいが、表面左側縁に連続する細部調整を確認できる。

７・８は縦長剥片を素材とする細部調整剥片である。**７**は表裏面末端と裏面左側縁に、**８**は裏面末端に微細な剥離痕が認められる。

９・10は細石刃である。**９**は上下端を、**10**は下端を欠損する。

11は扁平な円礫の一端に刃部を形成する礫器である。左側面側からの打撃によって大きく山なりの形を作った後に、中央の剥離を表面側から行う。しかし、礫全体が受ける磨耗を左右側の剥離面が受けているのに対し、中央の剥離面は比較的新しいことから、刃部形成の再加工が行われたと考える。また、左側面にはわずかながら敲打痕が見られる。

12・13は石核である。**12**は横長剥片を素材とする。剥片剥離の作業面を表面に設定し、打点を石核周縁に沿って移動させながら剥片剥離を行う。**13**は主剥離面を厚みのある剥片を素材とし、縦長剥片か石刃の剥離を目的とする。打面を上端に設定し、剥片剥離作業を左側面で行う。左側面と主剥離面以外には、石核整形のための剥離が認められる。

14・15は横長剥片、**16～18**は縦長剥片である。なお、**17**は表面末端を打点にして剥片下部が剥ぎ取られている。

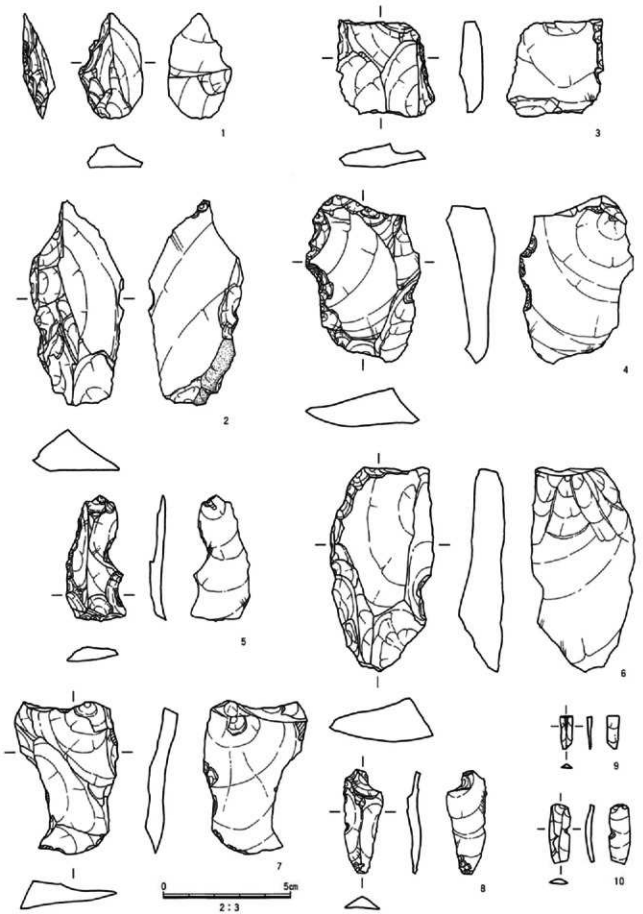


図6　各層位出土の旧石器時代石器遺物（1）

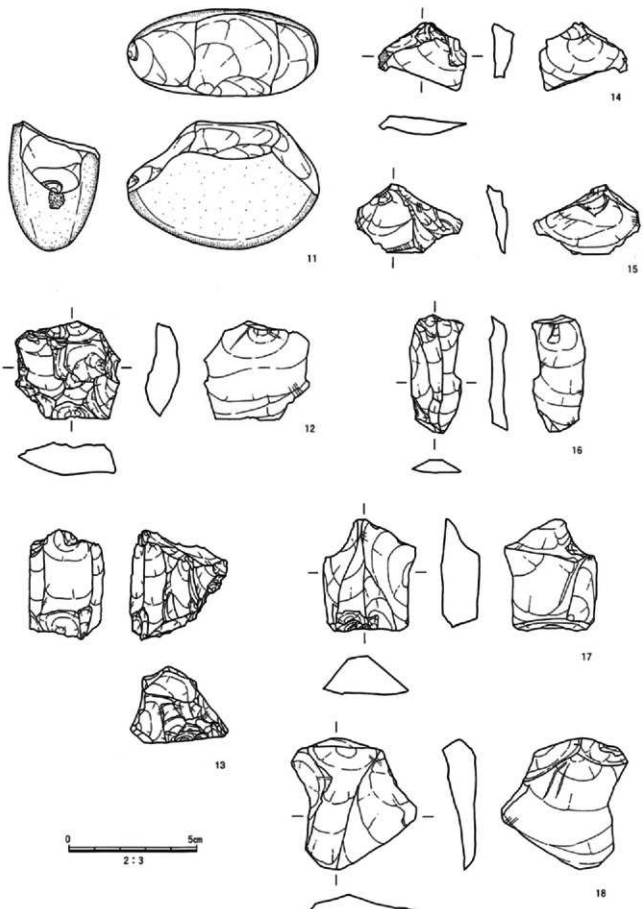


図7　各層位出土の旧石器時代石器遺物（2）

第4節　縄文時代早期

1　遺構の分布と遺物の出土状況

基本層序Ⅳ層上面及びⅣ層内において、縄文時代早期に属する土坑2基と集石遺構1基を検出した。調査地区の旧地形は、旧石器時代と同様に東から南東方向へかけて傾斜する地形を追うことができるが、地形の傾斜はかなり軽減されている。遺構の構築については、調査区西側と南側において比較的傾斜の緩やかな場所が選定されており、こぶし大ほどの尾鈴山酸性岩類などの角礫が、調査区南半分を中心に散在する状況も見て取れる。遺物については、Ⅲ・Ⅳ層中から縄文土器と石器遺物が出土し、散在する礫と同様に、調査区南半分に集中する傾向がある。土器は破砕片が目立ち、完形またはそれに近い形に復元できるものはなかった。

2　検出遺構と出土遺物

i）土坑

SC1（図8、図版3・6）調査区西側でやや南よりのC3区内で検出した不整形な三角形を呈する土坑である。本来は基本層序Ⅳ層上面が遺構構築面であったと考えられるが、遺構の上位と東側の一部が樹木根の撹乱を受けていたため、Ⅳ層中における検出となった。検出面での規模は、東西幅1.5m、南北

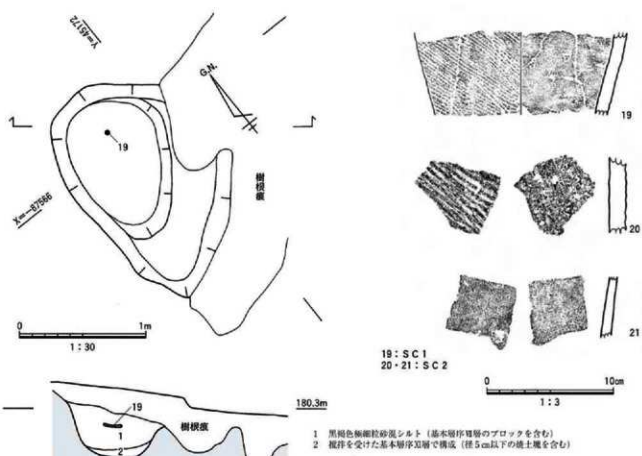


図8　SC1平断面図およびSC1・2出土縄文土器

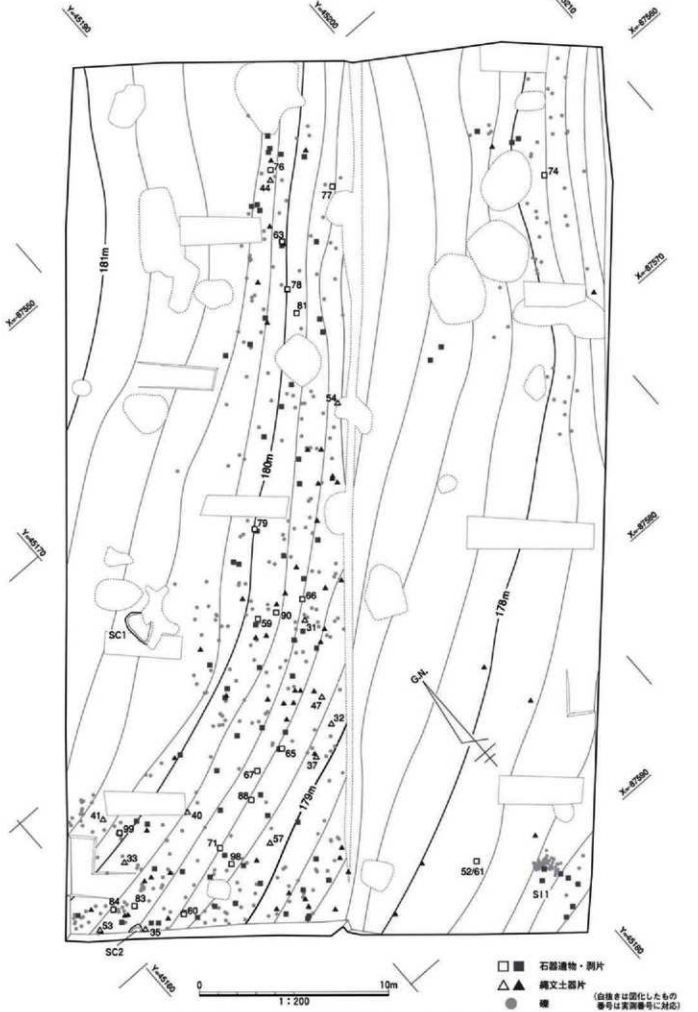


図9　縄文時代早期の遺構平面図および出土遺物位置図

幅1.75m、深さ0.45mを測る。埋土は上下層に分けられ、上層が基本層序Ⅶ層のブロックが混ざる黒褐色極細粒砂混シルトで、下層は攪拌を受けた基本層序ＸⅠ層に径5㎝以下の焼土が混じる。遺物は上層の中位以上から縄文土器19が出土した。

19は前平式土器の胴部で、外面に左上がりの深い条痕文が施されている。

ＳＣ２（図8）調査区南西端Ｂ４区で検出した不整形な円形を呈する土坑である。南側は調査区外に至る。基本層序Ⅳ層内での検出で、規模は東西幅0.75m、南北幅0.45m以上を測り、深さは0.65mであった。埋土は黒褐色粘土質シルトの単一層で、埋土の下位付近で縄文土器20・21が出土した。

20は前平式土器の胴部で、外面に左上がりの深く幅の広い条痕文を施す。21は無文土器の胴部である。

ii）集石遺構

ＳⅠ１（図10・11、図版4・6）調査区南東端のＣ５・６、Ｄ５・６地区にまたがって検出した集石遺構である。基本層序Ⅲ層内において、東西幅1.5m、南北幅1.1mの楕円形をなす範囲の中で、尾鈴山酸性岩類や砂岩の角礫のまとまりを検出した。縄文土器の細片と打製石斧22・23が出土した。

22は厚みのある砂岩製の礫を素材とする。表面両側縁と裏面左側縁の加工を行い、敲打によって側面を整える。刃部を大きく欠損する。23は扁平な長方形の礫を素材とする。主として一側縁の加工を表裏両面から行い、敲打によって側面を整える。刃部と基部を欠損し、中央部分だけが残る。

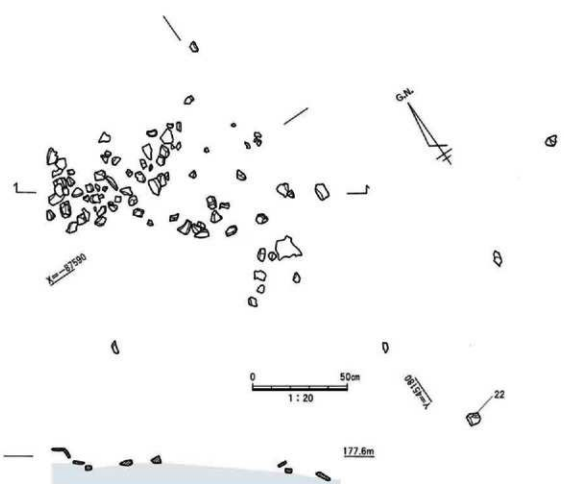


図10　ＳⅠ１平断面図

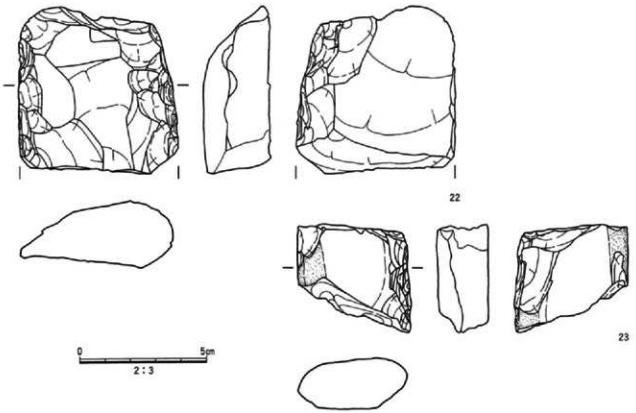


図11　ＳＩ１出土の打製石斧

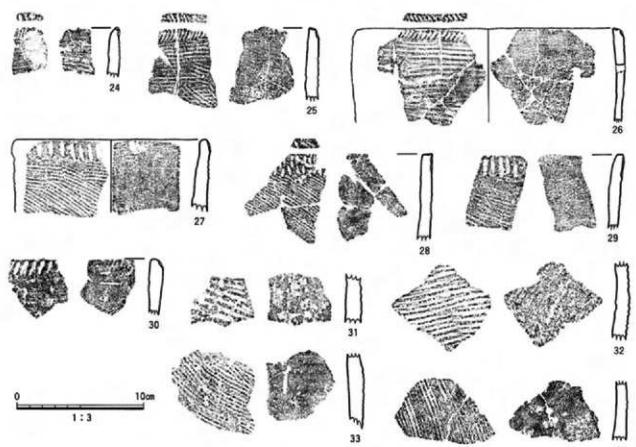


図12　各層位出土の縄文時代早期土器（１）

iii）遺構に伴わない遺物

当該地区は、縄文時代早期以後、近代に畑地として造成が行われるまで人間の手が入ることはなく、森林化していたと考えられる。このため、調査区内には比較的古い樹木根が縦横に認められ、これら樹木根は当該期の遺物を巻き込みながら下位層にまで達するものも多い。これらに関しては、Ⅳ層以下を掘削中に包含層出土として取り上げたため、層位的な混乱が生じているが、縄文時代の遺物と判断したものを以下に報告する。

縄文土器（図12・13、図版6・7）

24～34は前平式土器に属する。**24**は口縁端部外面に近接するやや斜位の爪状のキザミが施され、口縁形状は口縁端部上面に施されたキザミにより細かい波状をなす。胴部外面は右上がり、内面は左上がりの貝殻条痕文を施す。**25**と**26**の内傾する口縁端部外面には、端部上面から連続した近接する斜位の爪状のキザミが施され、口縁形状は細かい波状をなす。胴部外面はともに横方向の貝殻条痕文であるが、**26**

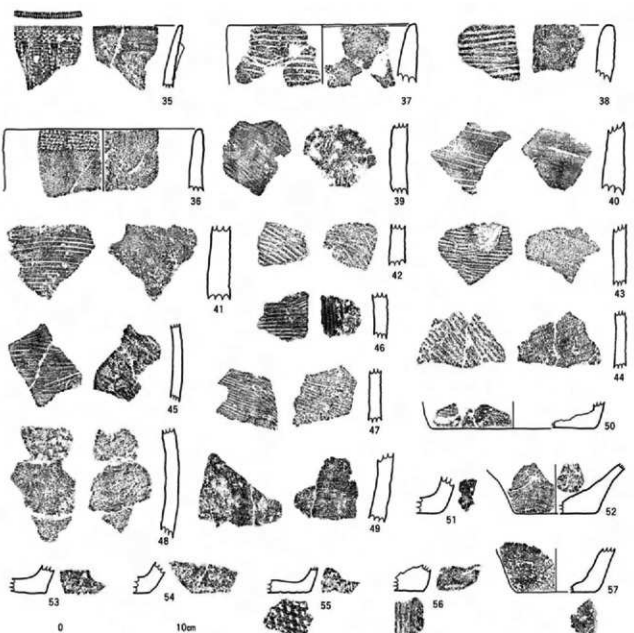


図13　各層位出土の縄文時代早期土器（2）

の条痕文はやや広い。なお、26の口縁部は強い横方向のナデによって尖り気味であり、横ナデの影響で内面にゆるい段が生じており、胴部内面は横方向のケズリで調整され、器壁を薄く仕上げている。また、米粒大ほどの窯礼を焼成前に施している。27は口縁端部外面に深く大きい縦位のキザミを有し、口縁部は外面側に膨らみをもつ。胴部外面には強い貝殻条痕文を、口縁部のキザミ直下は横方向に、それ以下は左上がりに施す。28・29は口縁端部外面に縦位のキザミを重ねるように2段に施す。ともに口縁端部上面は面をなし、28のみキザミを有する。胴部外面の施文は、28は左上がり、29はやや左上がりの貝殻条痕文である。30は口縁端部外面に深いキザミをもつ。31～34は胴部である。31・32には太めの、33・34には細かい貝殻条痕文が施されている。

35は知覧式土器である。面をなす口縁端部上面から外面直下にかけては細かいキザミを有し、口縁部外面には横位の貝殻腹縁刺突文を3条施す。胴部外面は目の細かい貝殻条痕文を横方向に施した後、2～2.5cm の間隔で貝殻腹縁刺突文を縦位に施す。縦位の刺突文の間には、クサビ形の貼付突帯が現状で2段確認できる。

36は中原Ⅰ式土器に相当する。ほぼ直立する口縁部の外面に、5～6条の貝殻腹縁刺突文を横位に施す。刺突文以下は無文である。

37～47は貝殻条痕文系土器である。37・38は口縁部で、外面の施文は、口縁端部から横方向に浅く幅の広い貝殻条痕文を施す。39～47は胴部である。39～44は厚い器壁の外面に浅く断面が方形となる貝殻条痕文を施すが、39～41は外面の施文後、ナデ消すようにする。また、45～47の外面施文も同様の貝殻条痕文をなすが、施文後に器面を磨いて仕上げる。器壁は薄い。なお、42と49には内面にも条痕文が認められる。

48・49は無文土器である。いずれも内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。

50～57は平底になる底部を一括した。なお、55～57の底部には編物痕が残る。

石器遺物（図14～21、写真3、図版7～10）

58～68は打製石鏃で、58～60は平基式、61～68は凹基式となる。58は切先部を細かい調整で丁寧に仕上げている。59の平面形はほぼ正三角形状をなすが、基部と比べ切先部をやや鋭く仕上げている。60は両面ともに荒い調整であり、大きな剥離を残すことから、未成品であるとも考えられる。61は基部の抉りは深く、逆刺は先鋭をなす。他の凹基式石鏃と比べ小振りである。62は基部の抉りは深く、逆刺は先鋭をなす。裏面側に細部調整を施す。63は基部の抉りは深く、逆刺はやや丸い。側縁は直線的で平滑に成形され、切先は非常に鋭く仕上げている。64は細部の調整により、側縁部をやや鋸歯状に仕上げている。65の側縁部は緩やかに内湾し、大きく鋸歯状をなす。66は鉢地型の石鏃である。側縁部が緩やかに外湾し、木の葉状の平面形をなす。基部の抉りは浅く、逆刺はやや先鋭に仕上げている。67は基部の抉りは浅く、逆刺は先鋭をなす。側縁部を細かい鋸歯状に成形する。68は基部の抉りは深く、大きく丸みのある逆刺を有する。細部の調整によって、切先を鋭く仕上げている。69は打製石鏃の未成品である。両面の側縁を粗い調整によって、先端部を鋭角に仕上

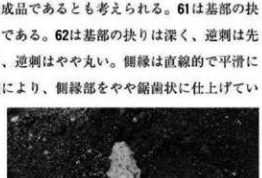


写真3　打製石鏃65の出土状況

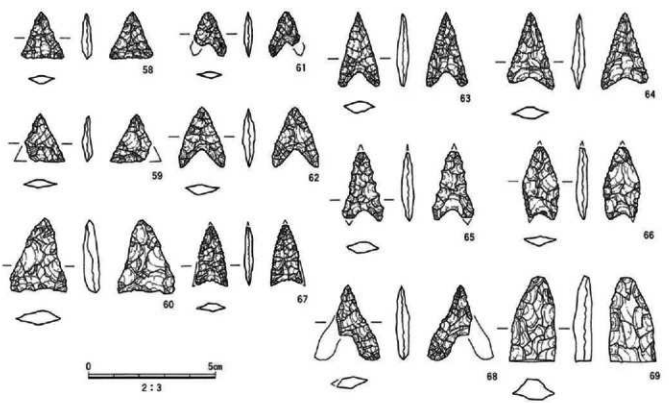


図14　各層位出土の縄文時代早期打製石鏃

げた素材を、表面側からの作用によって細長い二等辺三角形状の素材を取る。**70**～**75**は削器である。**70**～**72**は剥片素材の側縁部の薄く鋭角をなす部分を、平面形が三角形または半円形となるように剥離した剥片を利用する。いずれも、表面は礫面を残している。**70**は表面上部と裏面下部に細部調整を施し、やや鋸歯状の刃部を作るが、**71**は接合資料**98**に属する。表面右側縁に刃部形成のための剥離を認めるが、未成品である可能性が高い。**72**は特に目立った加工が認められなかった。**73**～**75**は縦長剥片を素材とする。**73**は裏面左側縁に連続する剥離が認められる。**74**は裏面右側縁の中央に微細な剥離を施す。**75**は表面の左半分に礫面を残し、表面の右側縁を調整して刃部を作るが、上半部のみが鋭角をなす。

76～**79**は掻器である。**76**は横長剥片を素材とする。表面両側縁と末端に連続する大きな剥離を施して刃部とする。**77**～**79**は縦長剥片を素材とする。**77**は表面末端の大きな剥離と裏面末端の調整剥離により刃部を作る。**78**は裏面末端に荒い剥離を施す。また、左側縁は調整により大きく鋸歯状をなす。**79**は表面に大きく礫面を残し、細かく連続する剥離を裏面末端と両側縁下部に施している。

80～**83**は細部調整剥片である。**80**～**82**は縦長剥片を素材とする。**80**は裏面末端に微細な剥離痕が認められる。**81**は表面末端に若干の剥離痕が認められる。**82**は表面左側縁に細部調整を施す。**83**は横長剥片を素材とする。表面左側縁と裏面左側縁に細部調整が施される。

84～**87**は敲石で、いずれも扁平な楕円礫を利用する。**84**は下端に敲打痕が認められる。また、比熱によるものか一部に赤化が見られ、表面は著しく剥離する。**85**は上端と右側面に敲打による潰れが見られ、表面中央にわずかな窪みが認められる。**86**は左側面以外の三側縁面に著しい敲打痕が確認できた。**87**は下端に敲打痕が認められ、上半部を欠損する。

88・**89**は磨石である。**88**は扁平な不整形な楕円礫を利用する。磨面は表面にのみ認められ、下端には

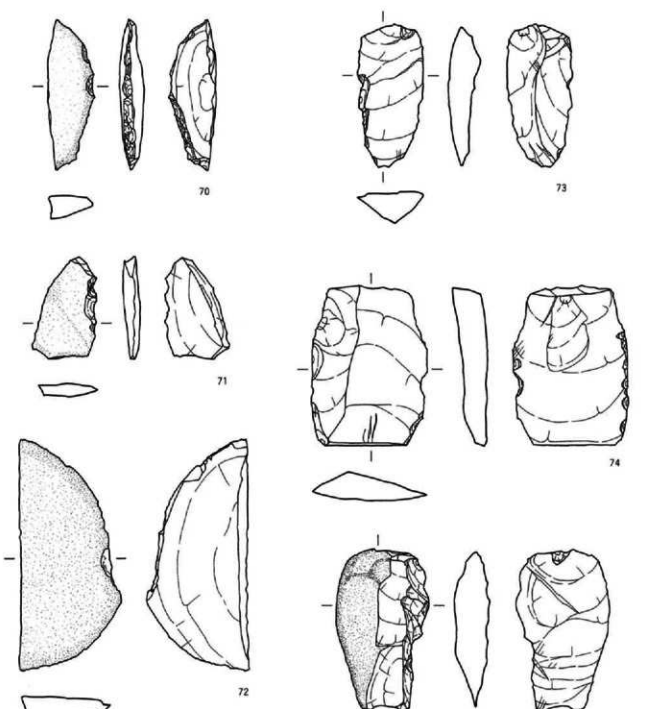


図15　各層位出土の縄文時代早期前器

敲打による潰れが見られる。**89**は非常に扁平な不整形な円礫を利用する。表裏面に顕著な磨面が認められる。

90～**92**は砥石である。**90**は扁平な隅丸長方形の剥片を利用する。礫面である表面側にくぼみを有した砥面が認められる。上面と右側面を欠損する。**91**は扁平でやや厚手に取られた剥片を利用する。表面の礫面を砥面とする。四方は欠損する。**92**は扁平に取った剥片の礫面を利用する。若干のくぼみを有した

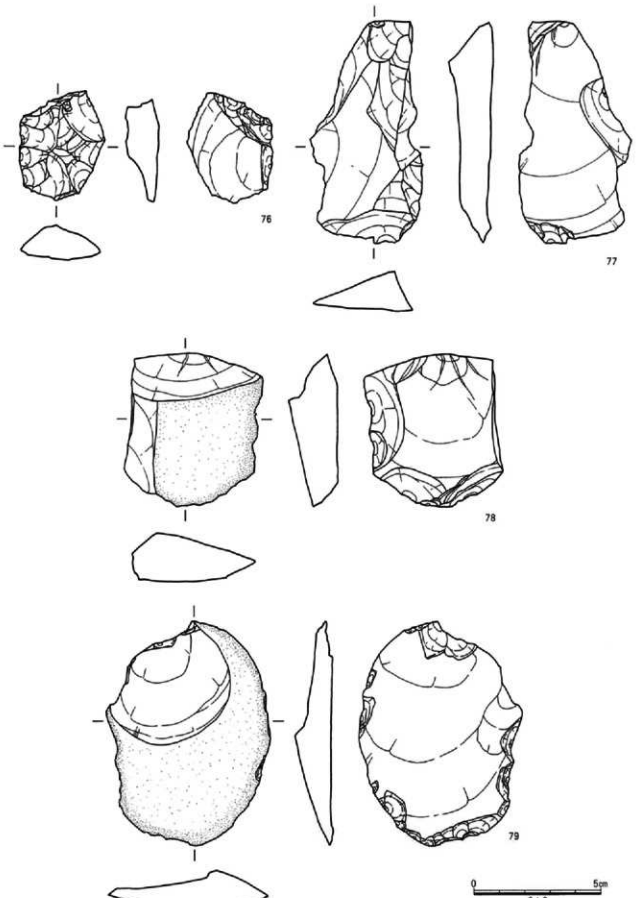


図16　各層位出土の縄文時代早期掻器

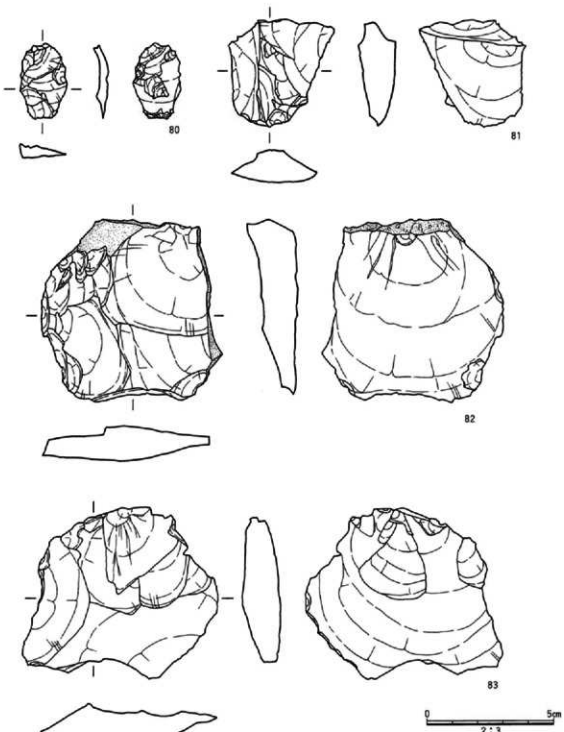


図17　各層位出土の縄文時代早期細部調整剥片

砥面が表面側に認められる。

93～**95**は局部磨製石斧である。**93**は扁平な長方形の礫を素材とする。使用時によるものか刃部の一部を欠損する。両側縁の加工を丁寧に行い、敲打によって側面を整える。刃部の両面側に研磨を施す。**94**は扁平な楕円形の礫を素材とする。両側縁の加工を表裏両面から丁寧に行う。刃部の大半と基部は欠損するが、一部に研磨が認められる。**95**はやや扁平な長方形の礫を素材とする。両側縁の加工を表裏両面から行い、敲打によって側面を整える。刃部の片面側に研磨を施す。全体的に磨耗が著しい。

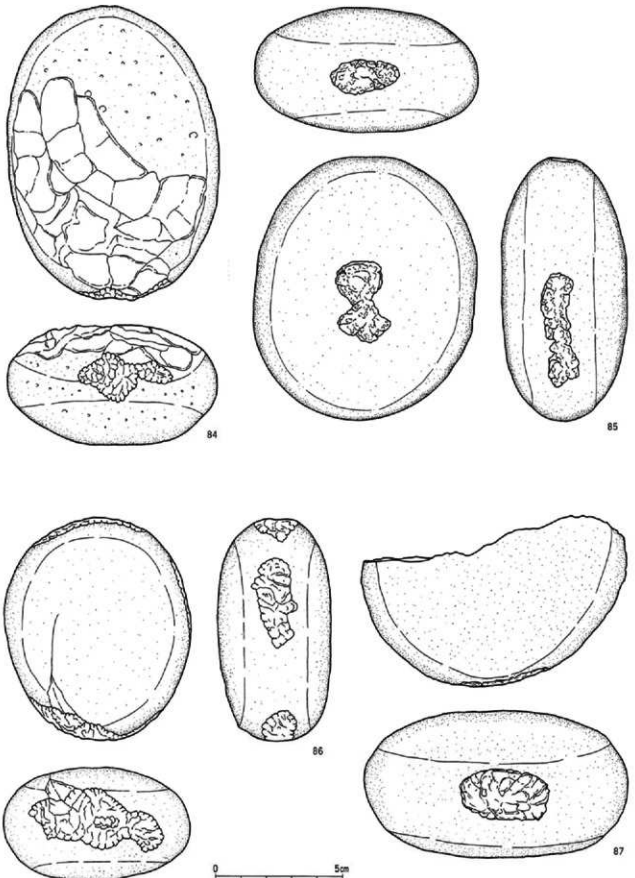


図18　各層位出土の縄文時代早期敲石

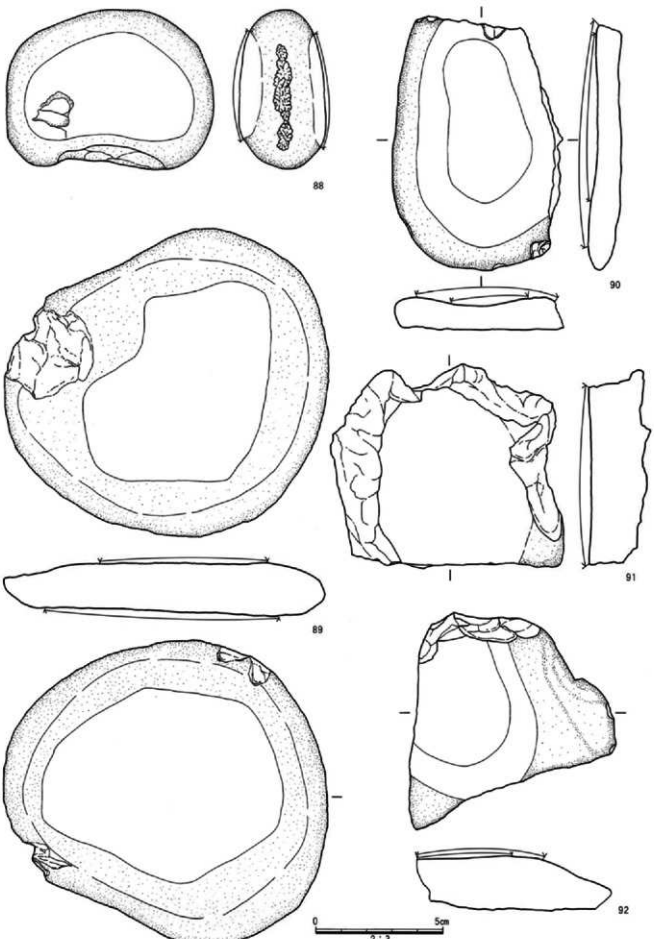


図19　各層位出土の縄文時代早期磨石・砥石

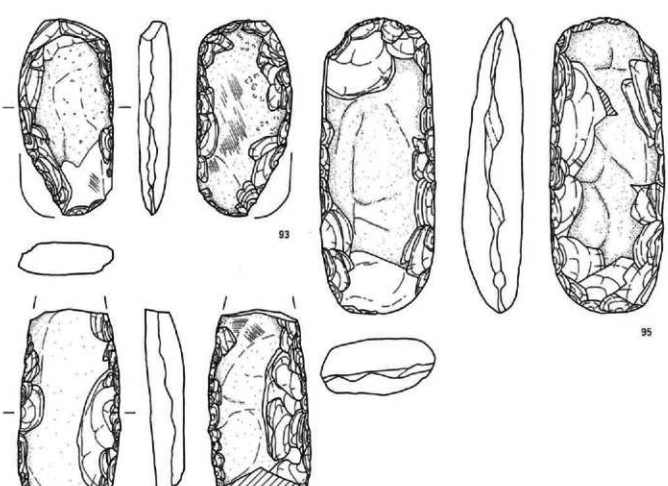


図20　各層位出土の縄文時代早期局部磨製石斧

96・97は打製石斧である。いずれも表面に礫面を残す厚みのある横長剥片を素材とする。**96**は表面からみた右側縁側の加工を表裏両面から丁寧に行い、側面を敲打によって整える。使用時のものか、刃部の一部を欠損する。**97**は主として表面右側縁と裏面右側縁に粗い剥離を施す。

98は接合資料である。表面に礫面を残した横長剥片と削器**71**で構成される。削器形成の素材を剥離するために、横長剥片の薄く鋭角をなす側縁部分を利用する。また、横長剥片には、**71**と同様の削器をあと2箇所剥ぎ取った痕跡が見受けられる。

99は石核で、剥片剥離の作業面を主剥離面に設定し、打点を石核周縁に沿って移動させながら剥片剥離を行う。表面と上面には礫面が、左側面には剥片剥離とは無縁の古い割れが残る。

その他にⅠ層中からチャート、Ⅳ層中から桑ノ木津留産黒曜石の小剥片が、それぞれ1点ずつ出土した。参考資料として、黒曜石製小剥片の写真を掲載した。

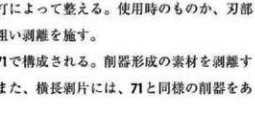


写真4　桑ノ木津留産黒曜石の小剥片

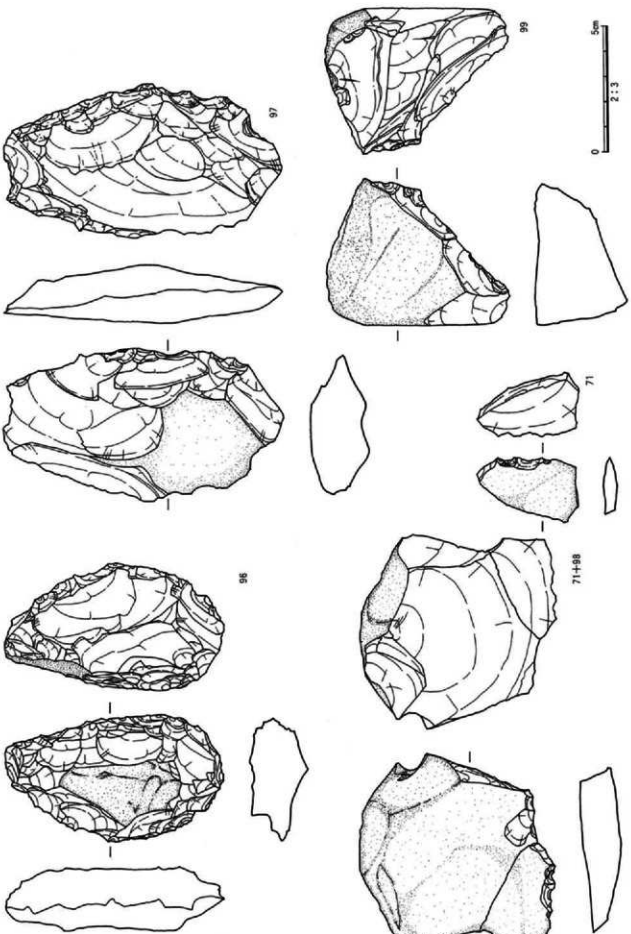


図21　各層位出土の縄文時代早期打製石斧・接合資料・石核

表1　旧石器時代石器遺物の属性および計測値

番号	出土層位	器種	剥片形態	石材			最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
				名称	色調	特徴	cm	cm	cm	g	
1	Ⅳ層	ナイフ形石器		ホルンフェルス	暗灰	縞あり、ややざらつく	4.15	2.50	1.20	8.2	
2	Ⅲ層	ナイフ形石器		ホルンフェルス	暗灰	縞あり	8.10	3.70	1.10	36.9	
3	Ⅲ層	削器	縦長剥片	ガラス質安山岩	オリーブ黒	ざらつく	3.70	3.60	0.90	11.9	
4	Ⅳ層	削器	縦長剥片	流紋岩	オリーブ黒	オリーブ黒色の雲状斑	6.55	4.50	1.60	41.5	
5	Ⅴ層	削器	縦長剥片	珪質頁岩	灰オリーブ	滑らか	4.90	2.30	0.55	6.5	
6	Ⅲ層	削器	縦長剥片	ホルンフェルス	にぶい黄	縞あり、粉感あり	8.10	4.05	1.65	66.6	
7	0～1層	細部調整剥片	縦長剥片	ホルンフェルス	にぶい黄	やや滑らか	6.05	4.10	1.10	23.9	
8	Ⅳ層	細部調整剥片	縦長剥片	チャート	暗オリーブ褐	滑らか	4.10	1.55	0.45	2.6	
9	Ⅴ層	細石刃		流紋岩	黄褐	滑らか	1.30	0.50	0.15	0.1	
10	0～1層	細石刃		流紋岩	オリーブ黒	オリーブ黒色の雲状斑	2.35	0.85	0.3	0.6	
11	試掘Tr	礫器		ホルンフェルス	黄褐	表面風化	5.10	8.50	3.50	157.5	
12	Ⅴ層	石核		流紋岩	灰黄	ややざらつく、斑なし	3.80	4.10	1.25	22.5	
13	Ⅳ層	石核		流紋岩	黄灰	縞あり、ややざらつく	4.30	3.70	2.90	50.3	
14	Ⅲ層	剥片	横長剥片	流紋岩	淡黄	黒色の縞あり	2.65	3.45	0.85	5.9	
15	Ⅵ層	剥片	横長剥片	流紋岩	灰黄	斑なし、ややざらつく	2.70	4.15	0.80	6.1	
16	Ⅳ層	剥片	縦長剥片	珪質頁岩	黒	やや滑らか	4.70	2.10	0.5	7.1	
17	Ⅵ層	剥片	縦長剥片	ホルンフェルス	浅黄	粉感あり	4.35	3.60	1.50	23.6	
18	撹乱	剥片	縦長剥片	ホルンフェルス	にぶい黄	やや滑らか	5.15	5.05	0.90	25.0	

表2　縄文時代早期石器遺物の属性および計測値

番号	出土層位	器種	剥片形態	石材			最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
				名称	色調	特徴	cm	cm	cm	g	
22	S11	打製石斧		ホルンフェルス	暗灰	黒色粒、ざらつく	(6.60)	6.35	2.60	138.0	
23	S11	打製石斧		流紋岩	灰オリーブ	縞あり、滑らか	(4.30)	4.45	2.05	49.3	
58	0～1層	打製石鏃		チャート	オリーブ	黒色の縞あり	1.85	1.70	0.40	0.6	
59	Ⅲ層	打製石鏃		チャート	灰	黒色斑	1.85	(1.65)	0.40	0.7	
60	Ⅲ層	打製石鏃		流紋岩	オリーブ黒	オリーブ黒色の雲状斑	2.95	2.25	0.60	3.0	未製品？
61	0～1層	打製石鏃		チャート	黒	やや光沢あり、滑らか	1.75	(1.25)	0.30	0.4	
62	0～1層	打製石鏃		姫島産黒曜石	灰		2.35	1.80	0.50	1.0	
63	Ⅲ層	打製石鏃		チャート	黒	滑らか	2.90	1.60	0.45	1.2	
64	Ⅵ層	打製石鏃		流紋岩	黒		3.05	2.85	0.50	1.5	
65	Ⅲ層	打製石鏃		姫島産黒曜石	灰		(2.70)	1.65	0.50	1.2	
66	Ⅲ層	打製石鏃		チャート	オリーブ灰	白色の縞あり	2.85	1.45	0.45	1.6	
67	Ⅲ層	打製石鏃		チャート	暗オリーブ灰	光沢あり	2.35	(1.25)	0.35	0.7	
68	0～1層	打製石鏃		チャート	暗オリーブ灰	黒色斑、縞あり	2.95	(1.75)	0.50	1.4	
69	0～1層	打製石鏃		ガラス質安山岩	オリーブ黒	ざらつく	3.35	1.80	0.80	4.2	未製品
70	0～1層	削器		砂岩	灰		5.95	1.90	0.90	10.7	
71	Ⅲ層	削器		流紋岩	灰オリーブ	縞あり、礫面滑らか	3.90	2.40	0.60	7.1	98と接合
72	撹乱	削器		砂岩	灰		9.20	3.90	1.00	37.4	
73	撹乱	削器	縦長剥片	ホルンフェルス	暗灰	ざらつく	5.50	2.60	1.20	16.7	
74	Ⅲ層	削器	縦長剥片	ホルンフェルス	灰	縞あり	6.30	4.50	1.15	42.7	
75	Ⅳ層	削器	縦長剥片	ホルンフェルス	灰オリーブ	ざらつく、粉感あり	6.35	3.60	1.40	31.1	
76	Ⅲ層	掻器	横長剥片	チャート	緑灰	黒色斑	3.30	4.10	1.30	17.8	
77	Ⅲ層	掻器	縦長剥片	ホルンフェルス	灰オリーブ	ざらつく、粉感あり	8.95	4.40	1.75	64.2	
78	Ⅲ層	掻器	縦長剥片	ホルンフェルス	オリーブ	粉感あり	6.05	5.25	1.90	72.7	
79	Ⅲ層	掻器	縦長剥片	ホルンフェルス	灰オリーブ	ざらつく、粉感あり	8.85	6.45	1.40	80.8	
80	Ⅲ層	細部調整剥片	縦長剥片	チャート	暗赤褐	滑らか	2.90	1.80	0.55	2.9	
81	Ⅲ層	細部調整剥片	縦長剥片	ホルンフェルス	黄灰	縞あり、ややざらつく	4.10	3.80	1.30	20.7	
82	Ⅳ層	細部調整剥片	縦長剥片	ホルンフェルス	黄灰	オリーブ黒色の雲状斑	7.20	6.60	1.70	87.6	
83	Ⅲ層	細部調整剥片	横長剥片	ホルンフェルス	にぶい黄	ざらつく、粉感あり	6.80	7.10	1.50	71.0	
84	Ⅲ層	敲石		尾鈴山酸性岩類	にぶい黄		11.50	8.30	4.70	647.8	
85	0～1層	敲石		尾鈴山酸性岩類	浅黄		10.40	8.70	4.90	670.0	
86	Ⅳ層	敲石		砂岩	にぶい黄		8.80	7.40	4.45	398.6	
87	撹乱	敲石		尾鈴山酸性岩類	灰白		5.90	10.30	5.80	429.1	
88	Ⅲ層	磨石		尾鈴山酸性岩類	にぶい黄		8.20	6.30	3.40	242.5	
89	Ⅲ層	磨石		砂岩	黄褐		12.70	12.20	2.10	405.8	
90	Ⅲ層	凹石		砂岩	黄褐		(10.0)	(6.70)	1.30	119.9	
91	Ⅲ層	凹石		砂岩	にぶい黄		(8.05)	9.20	2.45	237.6	
92	Ⅲ層	凹石		流紋岩	灰	白色の縞あり	(7.60)	(7.15)	2.15	167.8	
93	Ⅲ層	局部磨製石斧		緑色珪質(凝灰岩)	暗オリーブ灰	白色斑	7.80	3.70	1.30	53.0	
94	0～1層	局部磨製石斧		流紋岩	灰オリーブ	黒い筋	(8.60)	4.00	1.50	65.6	
95	0～1層	局部磨製石斧		ホルンフェルス	灰オリーブ	ざらつく	11.70	4.55	2.40	193.9	磨面有収色
96	Ⅳ層	打製石斧		流紋岩	暗灰	縞あり	8.40	4.80	2.20	117.1	
97	Ⅳ層	打製石斧	横長剥片	砂岩	灰		11.05	6.10	2.30	155.9	
98	Ⅲ層	石核		流紋岩	灰オリーブ	縞あり、礫面滑らか	7.10	7.60	2.60	134.7	71と接合
99	Ⅲ層	石核		ホルンフェルス	灰	ややざらつく	7.20	5.80	3.60	145.3	

第5節　まとめ

今回の調査では、旧石器時代に属する遺物および縄文時代早期前半期に属する遺構・遺物を検出したことで、当該地域の歴史を構築するための重要な手がかりを得ることができた。また、上記の時代以外の遺物がほとんど出土しなかったことから、縄文時代早期以後、近代から現代に畑地として造成されるまで、人間の手が入ることがなかった場所であったことも判明した。以下では、周辺域の調査成果を踏まえつつ、住吉B遺跡と当該地域の歴史的様相を概観しまとめとする。

当遺跡の旧石器時代の様相としては、始良Ｔｎ火山灰降下以後の状況を確認することができた。しかし、遺物包含層から出土したナイフ形石器や細石刃などの石器遺物については、数量的に極僅かで、なおかつ、周辺域で顕著に見られるような接合資料も見出すことはできなかった。さらに、礫群などの生活痕跡についても皆無であった。このことは、当該期の旧地形が日々の生活に適さないほどの傾斜地であったことに起因すると思われ、出土の石器遺物については、さらに高位にあった活動の場からの流れ込みであったと考える。

周辺域での旧石器時代については、本調査地からも眺望ができ、当遺跡が立地する丘陵から延びる舌状台地上に展開する中ノ迫第１～３遺跡において大きな成果が得られている。中ノ迫遺跡では、始良Ｔｎ火山灰降下以前の様相も判明しており、舌状台地の中程に位置する第１遺跡（２次）において８基の礫群が検出されている。降下以後については、台地の中程から山麓にかけてが活動の中心地であったようで、第１遺跡の１・２次調査併せて36基もの礫群が検出されている。また、２次調査地の南東側に位置する第２遺跡では、礫群の他に石器ブロックも検出されている。ただし、第１遺跡と第２遺跡では石器組成に違いが見られ、前者はナイフ形石器、後者は角錐状石器および細石刃を中心に出土しており、第２遺跡の報告で報告者が指摘するように、時期差を示すものであろう。

以上をみると、旧石器時代の当該地においては、中ノ迫第１・２遺跡が立地する舌状台地の中程から山麓付近が中心的な活動の場であったことがわかる。そこから円弧を描くように活動範囲が広がっていたと考えられ、本調査地では生活痕跡こそ検出されなかったが、約１㎞圏内にある当遺跡の位置する丘陵地も眼下の台地上に住む旧石器時代人の活動範囲内にあったと考えておきたい。

続く縄文時代の生活痕跡として、早期に属する土坑と集石遺構を検出したが、調査面積に対する遺構の密度は低い。遺物については、貝殻文系と無文の縄文土器および石器遺物の出土をみた。石器遺物については、周辺遺跡で見られる組成と大差ないが、縄文土器のうち貝殻文系に関しては、前平式を筆頭に知覧式・中原Ⅰ式と、現在のところ周辺遺跡で出土のない土器形式が見つかっており注目される。

周辺地域において、当遺跡に並行する時期の遺跡はなく、近い時期のものとして、篠原川を挟んだ東１㎞ほどに立地する草創期に属する隆帯文土器が出土した赤石・天神本遺跡、早期半ばを中心に後半までの遺構・遺物を検出した中ノ迫第２・３遺跡がある。当遺跡の成果は、当該地における縄文時代草創期から早期にかけての時間的空白を埋めるものとして評価できる一方で、当遺跡に集落としての成熟さがないことから、中心となる活動の場は、さらに高位の平場にあったと考えておきたい。そして、これら遺跡の状況が示すとおり、当該地域の縄文時代草創期から早期における縄文時代人は、そう広くはない空間の中で、生活圏の中心を変えながら活動を継続させていたのであろう。

第Ⅳ章　赤石遺跡の調査結果

第１節　発掘調査の経過

調査対象区の調査前の状況は雑木林であり、表層には腐植土が堆積し、狭小の調査区内には大きく成長した後に伐採された樹根が十数本残っており、至るところで深い土層の撹乱が見られた。また、調査区の北西部の一部には、高位置でのミカン畑や茶畑等の造成に伴う盛り土が堆積していた。

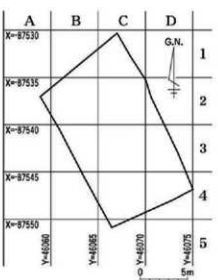


図22　調査地配置図

発掘調査は、2007（平成19）年11月19日に開始した。まず、表土を重機によって除去した。表土の掘削後には、遺物包含層となる黒褐色土層（Ⅱ層）、暗褐色土層（Ⅲ層）が順に現れ、遺物の取り上げを行いながら人力による掘削作業を進めた。主に出土した遺物は、縄文時代中期～後晩期及び弥生時代中期土器片、石器などであった。ほとんどの土器片は一個体としてまとまって出土する状況でなかったが、摩耗をあまり受けていない状態で散在していた。また、旧石器時代の剥片や古墳時代の土師器・須恵器片もわずかに出土した。遺物包含層の掘削段階で、遺構プランは確認できなかった。次段階では、調査区のほぼ中央を縦走するよう土層観察ベルトを設定した上で、さらに遺物包含層の掘削作業を進めた。そのうちに、遺物包含層の下に褐色土層（Ⅳ層）が現れ、その段階で“にじみ”状の遺構プランと遺物が局所的に集中する範囲を把握できることができた。恐らく、遺物包含層（Ⅱ・Ⅲ層）中のレベルから各遺構は掘り込まれていたものと考えられるが、調査区北西部（グリッドＢ１・Ｃ１・Ｂ２の一部）に広がる盛り土層や土壌の進行などによって、褐色土層（Ⅳ層）より上位層中での遺構検出は困難であった。そのため、最終的には褐色土層（Ⅳ層）上面を遺構検出面として遺構プランの確定を行った。

本調査区内において、最終的に検出できた遺構は、縄文時代後期の竪穴住居１軒、土坑11基（うち４基は自然凹みの可能性もあり得る）、弥生時代中期の竪穴住居１軒及び不明遺構１基であった。検出された各遺構では土層観察ベルトを設定して精査を進め、遺構実測図は１/20を基本として記録した。各遺構埋土中の遺物は床面付近等のものを遺構実測図中に図化した。その他の埋土中の遺物は点上げ及び一括上げをし、写真記録を適宜行った。2008（平成20）年１月10日に遺構を検出したⅣ層上面の空中撮影を業務委託で実施し、同年１月17日までに掘り下げ（一部）・遺物取り上げ・遺構実測等のすべての現地における発掘作業を終え、同年１月21日に調査区の埋め戻し及び整地を終了した。

なお、図面作成や遺物の取り上げなどの記録作業に供するために、国土座標に基づき５m四方で調査区すべてを包括するように地区割してグリッド設置を行った。各グリッド名は西よりＡ～Ｄ区、北より１～５区として、その組み合わせで図22のように表記するようにした。

第２節　発掘調査区の層序

本調査対象地の標高は153.7～155.0mを測る。現状は比高差が約1.3mであり、概ね南東側に下る丘陵の緩斜面にある雑木林であった。調査区内には大きく成長した後に伐採された十数本の樹根（直径50～80cm）が残っていたので、その除去作業を可能な限り人力で行いながら発掘調査作業を進めた。土層確認ベルトや調査区壁によって調査区内での土層の広がりが確認できた。

本調査区における基本的な層序は、以下に述べるⅠ～Ⅵ層（表３）のとおりである。

表土層直下のⅡ～Ⅲ層が遺物包含層で、Ⅳ層上面を遺構検出面とした。Ⅳ層以下は、トレンチを拡張して掘削をしたが遺物は認められなかった。また、調査区の北西部（グリッドＢ１・Ｃ１・Ｂ２の一部）でのみ盛り土層の堆積が表土層（Ⅰ層）直下で確認できた。その盛り土層については、調査区より高位置における人為的な造成の際に生じたものであると考えた。Ⅵ層（明褐色土の礫層）以下の掘削は行わなかった。なお、本調査区内では緩傾斜地という立地条件のためか、アカホヤ火山灰層（Ｋ－Ａｈ）や姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ）層は確認されなかった。また、場所によっては樹根の影響（撹乱）がⅢ層の深さあたりまで及んでいるところがあり、遺構や遺物の検出に影響を及ぼしていた。調査区内の地層堆積状況の観察及び記録は、各トレンチ・調査区の壁及び調査区中央にほぼ北西から南東に設定した土層観察ベルトで行った。

表３　基本層序

Ⅰ層	表土層で、厚さ15～20cmである。腐葉土を多量に含み、樹根の影響を多く受ける。
Ⅱ層	黒褐色土（Hue10YR2/3）厚さ10～15cmである。粘性もしまりもややある。遺物包含層（主に縄文時代中期～後期及び弥生時代中期）である。その一部は樹根の影響を受ける。
Ⅲ層	暗褐色土（Hue10YR3/4）厚さ10～20cmである。粘性・しまりもややある。遺物包含層（主に縄文時代中期～後期及び弥生時代中期）である。その一部は樹根の影響を受ける。
Ⅳ層	褐色土（Hue7.5R4/6）厚さ15～20cmである。粘性があり、しまりもややある。直径１mm程の白色粒（ＡＴのブロック）をわずかに含む。遺構検出層である。
Ⅴ層	黒褐色土（10YR3/1）厚さ10～15cmである。粘性・しまりある。調査区内の全域での広がりは確認できなかった。この層以下は無遺物層である。
Ⅵ層	明褐色土（Hue7.5R5/8）基盤層となる尾鈴山酸性岩類の風化表層土壌を含む礫層と考えられる。粘性があり、直径0.2～1.0mを超える礫も混入して硬くしまっている。

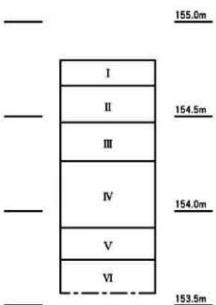


図23　地層断面模式図（1:20）

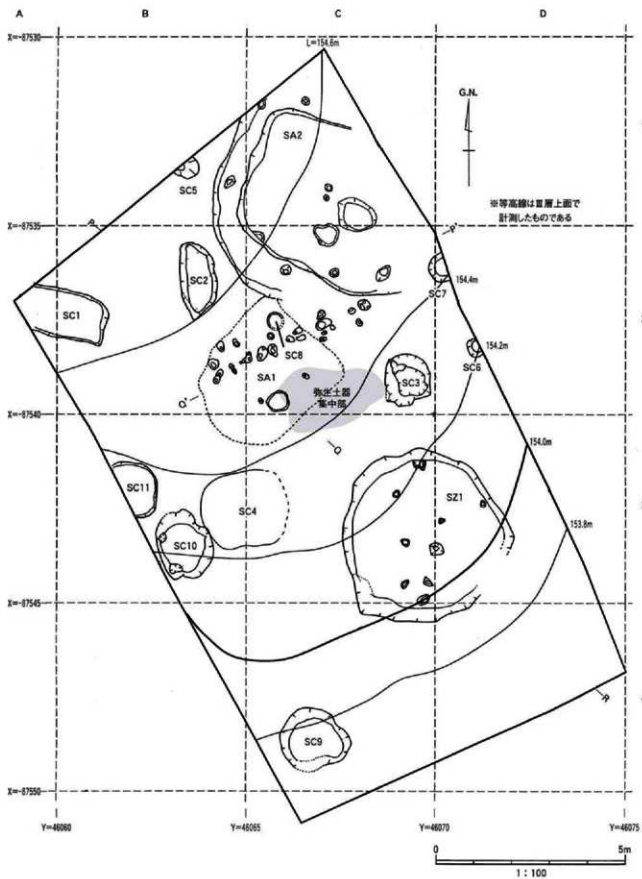
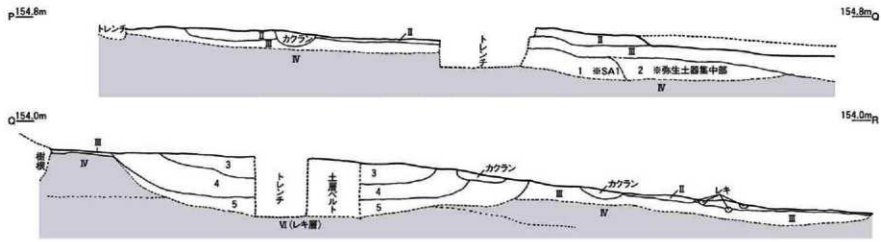

A
B
C
D
X=-87530
X=-87535
X=-87540
X=-87545
X=-87550
Y=46060
Y=46065
Y=46070
Y=46075
L=154.6m
G.N.
※等高線はⅢ層上面で
計測したものである
SA1
SA2
SC1
SC2
SC3
SC4
SC5
SC6
SC7
SC8
SC9
SC10
SC11
SZ1
焼土・炭
集中部
154.4m
154.2m
154.0m
153.8m
1
2
3
4
0
5m
1：100

図24　遺構分布図



土層観察ベルト　土層注記

1　暗褐色（Hue10YR3/3）土…しまりあり。極小の褐色（Hue10YR4/4）土粒をわずかに含む。ＳＡ１の雌土である。

2　黒褐色（Hue10YR2/3）土…やや しまりあり。炭化物（φ１～２mm）や赤褐色（Hue2.5YR4/6）の細粒をわずかに含む。「弥生土器集中部」の覆土である。

3　黒褐色（Hue10YR2/3）土…やや しまりあり。やや 粘性あり。

4　暗褐色（Hue10YR3/4）土…やや しまりあり。やや 粘性あり。

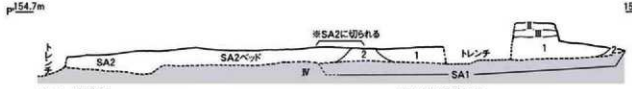
5　黒褐色（Hue10YR2/3）土…やや しまりあり。あまり 粘性なし。炭化物や多量の白色・黄橙色のパミス（φ５～30mm）を含む。

Ⅱ　黒褐色土（Hue10YR2/3）…粘性もしまりもややあり。遺物包含層である。

Ⅲ　暗褐色土（Hue10YR3/4）…粘性・しまりもややあり。遺物包含層である。

Ⅳ　褐色土（Hue7.5R4/6）…粘性があり、しまりもややあり。遺構検出層である。

0　2m
1：40



ＳＡ１　土層注記　　**Ⅱ～Ⅳは上注記と同じ**

1　暗褐色（Hue10YR3/3）土…しまりあり。Ⅳ層由来と橙色の微小粒をわずかに含む。

2　褐色（Hue7.5YR4/4）土…やや しまりあり。褐色(Hue7.5R4/4)土をブロック状で含む。

0　2m
1：40

図25　土層観察ベルト断面図

第3節　縄文時代中期～後期

本調査区では、縄文時代後期の竪穴住居1基、土坑11基（うち4基は自然凹みの可能性もあり得る）を検出した。縄文土器については、主に中期から後期にかけての土器片を多く出土した。遺構埋土から出土した土器を概観すると、竪穴住居では縄文時代後期に帰属するもの、土坑では縄文時代中期から後期に帰属するものが多かった。ただし、土器は小片であるものがほとんどで、完形近くまで復元できるまでに至るものはほとんどなかった。また、石器については、石斧・石錘・磨石・敲石・台石・砥石など当時の生活の様相を推測させるものが数多く出土した。ただし、各遺構埋土及び遺物包含層（Ⅱ～Ⅲ層）から出土した遺物については、本調査区が緩斜面であるという立地条件と出土状況から調査区より高位置からの流れ込み等で原位置からの出土ではない可能性が高いと考える。ここでは、縄文時代の遺構と遺物について説明を行う。なお、土坑については、いずれもその用途については不明である。以下では、ある程度の規模があり、当該時期の遺物を多く出土した自然凹みの可能性が低い土坑についてのみを説明することにする。すべての遺構位置については、遺構分布図（図24）を参照してもらいたい。

1　検出遺構と出土遺物

i）竪穴住居

ＳＡ１（図27、図版10）グリッドＣ３杭付近に位置する遺構である。遺構検出は暗褐色土層（Ⅲ層）中で精査しながら行ったが、遺構埋土が同系色であったために、いわゆる“にじみ状”でしか平面プランを捉えられずに明確な遺構プランを確定できなかった。しかし、遺物包含層中とはその出土状況が異なり、ある程度土器がまとまって出土したことと北東隅で後述する弥生時代中期の竪穴住居ＳＡ２に切られた遺構としての壁の立ち上がりが確認できたことにより、「竪穴住居」と積極的に判断した。ただし、精査を行ったが、主柱穴等を確認することはできなかった。推定される遺構の規模は、長軸約3.5m、短軸約3.0m、検出面からの深さは約0.25mで、ほぼ円形を呈すると考える。遺構内の遺物の取り上げについては、四分法に基づきほぼ北西部から時計回りにＳＡ１ａ→ＳＡ１ｂ→ＳＡ１ｃ→ＳＡ１ｄとセクション設定をして行った。ここでは、遺構埋土からの出土遺物のうち、縄文土器10点、石器４点を図化した。

100～105は深鉢の口縁部である。**100・101**はキャリパー状口縁で、**100**の内面には斜・横位のナデ、外面には撚糸文の上に凹線による短直線文や沈線文が施されている。また、口唇部には押圧文も施されている。**101**の外面にはＵ字状の沈線文が施されている。内面の調整としてはナデが認められる。どちらとも胎土中に２㎜程の灰白色粒を含んでいることが特徴的である。**103～105**の口縁部は外傾しており、**105**の口縁部内面には横位の沈線文が施されている。**106**は膨らんだ胴部をもち、頸部がややくびれており、さらに外反する波状口縁をもつ深鉢である。口縁部内面に１条の横位沈線文が施されている。**107・108**は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する平口口縁をもつ深鉢である。どちらも内面はナデ、外面には斜・横位のナデ調整が認められる。**107**の胴部はやや膨らんでおり、外面には煤が付着し黒色に変化している。

109は浅鉢の口縁部である。内・外面ともに横位のミガキ調整が認められ、さらに外面にはその上に平行する３条の沈線が施されている。

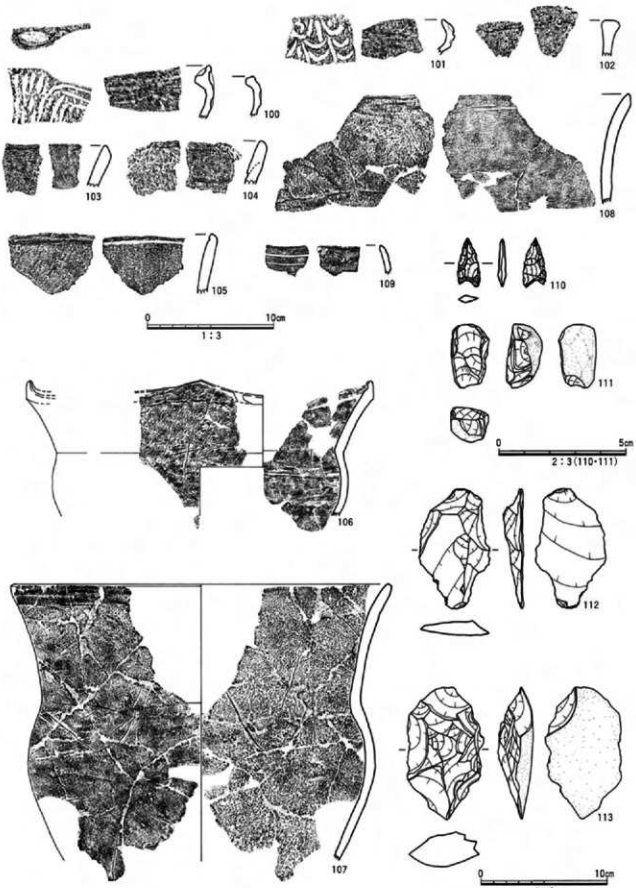


図26　ＳＡ１出土遺物実測図

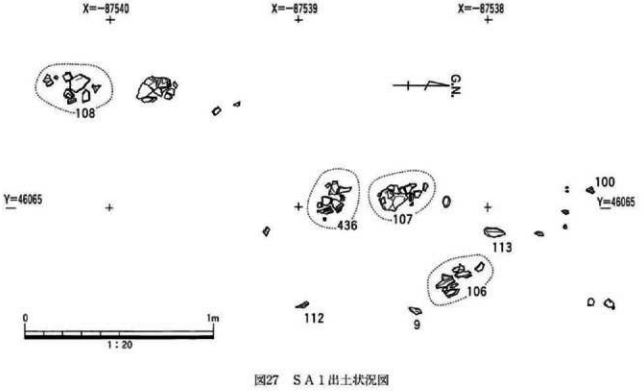


図27　ＳＡ１出土状況図

110～113は遺構埋土から出土した石器である。**110**は姫島産の黒曜石製で、全体の形状が二等辺三角形を呈する凹基式の石鏃である。凹基の抉りはアーチ状で、抉り自体はあまり深くない。両側辺はやや外湾し、脚部はやや内側に向かっている。**111**は針尾産と考える黒曜石の小型石核である。自然面を残し剥離作業が行われているようである。**112・113**はホルンフェル製の縦長剥片である。側辺部に細かな剥離痕は認められない。

ii）土坑

ＳＣ１（図28、図版11）　グリッドＡ２とＢ２との境界線付近で検出した遺構である。遺構の一部が調査区外まで広がっていたためにすべてを検出できなかった。平面プランは長軸約2.70m、短軸約1.24mの隅丸長方形と推定される。形状比（長軸／短軸）は2.18である。検出面からの深さは約1.90mで底面はほぼ平坦であり、断面形は長方形を呈する。埋土は褐色・黒褐色・黄褐色土などで、埋土中には炭化材を多く含み、黒いシミが広がる部分も認められる。遺構から出土した遺物はほとんどなかった。ここでは土器１点を図化した。

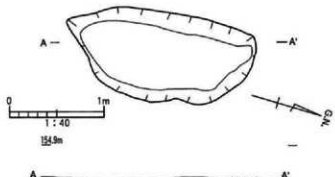
ＳＣ１　土層注記
1　褐色（Hue10YR4/4）土……黄褐色（Hue10YR5/6）のブロック状の粒を含む。黒いシミあり。
2　黒褐色（Hue10YR3/1）土……極小の褐色（Hue10YR4/4）土粒を10%程含む。ややしまりあり。やや粘性あり。
3　黒色（Hue2.5Y2/1）土……極小の褐色（Hue10YR4/4）土粒を50%程含む。しまりなし。炭化材を多量に含む。
4　暗褐色（Hue10YR3/3）土……黒いシミが全体に広がる。ややしまりあり。
5　黄褐色（Hue10YR5/6）土……黒いシミが部分的に広がる。
6　にぶい黄褐色（Hue10YR4/3）土…黒いシミがところどころにある。
7　黄褐色（Hue10YR5/6）土……ややしまりあり。
8　にぶい黄褐色（Hue10YR4/3）土…ほとんどしまりなし。

図28　ＳＣ１平断面図

114の内面には斜・横位、外面には横位の丁寧なナデ調整が認められ、ほぼ直立する深鉢の口縁部である。口縁部内面には１条の沈線文が施されている。

ＳＣ２（図29、図版11） グリッドＢ２の北西角付近に位置する遺構である。平面プランは長楕円形で、長軸約2.10m、短軸約0.96mである。（形状比＝2.19）検出面からの深さは約0.54mで、埋土中にわずかに炭化物を含む。遺構埋土からの出土した土器は少なく、剥片などが比較的多かった。ここでは、そのうちから土器１点、石器１点を図化した。

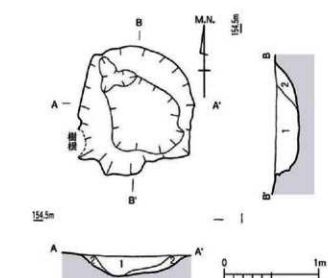
115は深鉢の頸部と考える。内面に１条の刻目貼付突帯とその直下に工具による沈線文らしき文様が認められる。外面に縄文による施文が施されている。**116**は砂岩製の平砥石であると考える。片表面のみに磨痕が認められる。



ＳＣ２ 土層注記
1 黒褐色（Hue10YR3/1）土……しまりなし。
2 褐色（Hue10YR4/4）土……しまりあまりなし。炭化物（φ２～３m）をわずかに含む。
3 暗褐色（Hue10YR3/3）土……炭化物（φ２～３m）や明褐色土粒（Hue7.5YR5/8）をわずかに含む。ややしまりあり。
4 にぶい黄褐色（Hue10YR4/3）土…ややしまりあり。

ＳＣ３（図29、図版12） グリッドＣ２の南東角付近に位置する遺構である。平面プランは長軸約1.39m、短軸約1.18mのほぼ円形である。（形状比＝1.18）検出面からの深さは約0.24mである。埋土は暗褐色と灰黄褐色の２層からなる。遺構埋土から出土したのは土器のみであった。ここでは、そのうちから７点を図化した。

117は深鉢の口縁部、**118**～**121**は深鉢の胴部である。**117**の内・外面に縄文による調整が認められる。さらに外面にはその上から棒状工具による横位の連続刺突文が施されている。**118**の外面には縄文による調整の上から斜・横位に２～３条の浅い沈線文や押引文が施されている。**119**～**121**の外面には横位の数条の貼付突帯間に半裁竹管状の工具による沈線文や連続爪形文が施されている。**120**には１個の穿孔も認められる。



ＳＣ３ 土層注記
1 暗褐色（Hue10YR3/3）土……ややしまりあり。やや粘性あり。
2 灰黄褐色（Hue10YR4/2）土……ややしまりあり。やや粘性あり。

図29 ＳＣ２・３平断面図

122の内面には工具痕や条痕文、外面には工具によるナデ・指押さえによる調整が施されている。

ＳＣ４（図版12） グリッドＢ３とＣ３の境界線付近に位置する遺構である。平面プランは、遺構のほぼ中央にある樹根による撹乱等もあり、非常に不明瞭であった。長軸約2.20m、短軸約2.00mのほぼ円形（形状比＝1.10）で、検出面からの深さは約0.19mと推定される。ここでは、遺構埋土からの出土遺物のうち、土器４点、石器２点を図化した。

123・**124**は深鉢の口縁部である。**123**の外面にはナデ調整の上から４条の細沈線文が施されている。内面には、風化のために不鮮明であるが、条痕文らしき調整が確認できる。**124**の内・外面には明瞭な条痕文や工具ナデが認められ、外面には並行して波状に延びる４条の貼付突帯が貼り付けられている。緩や

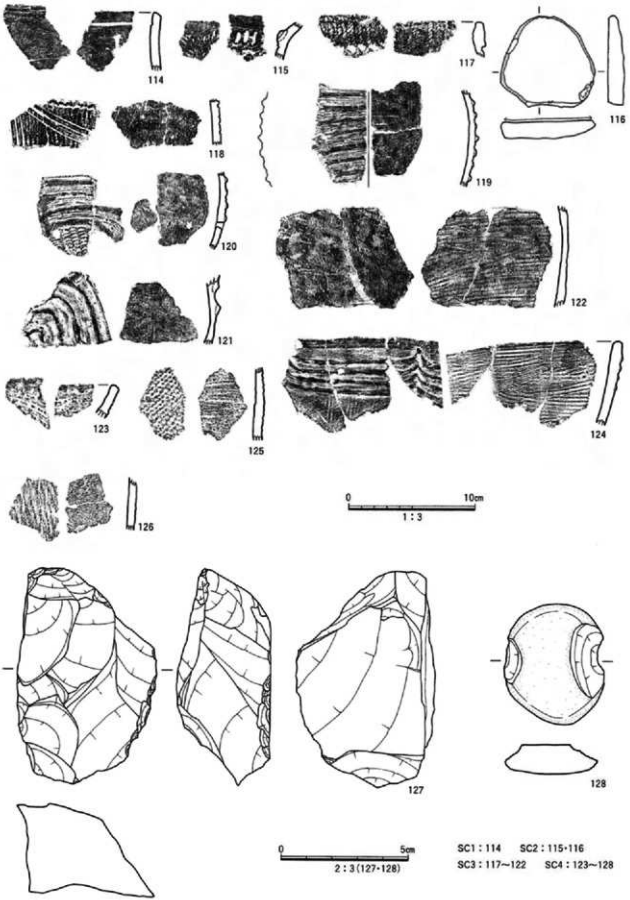
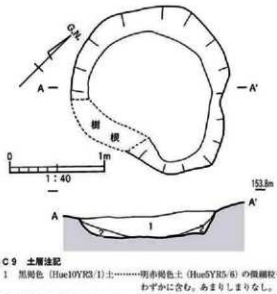


図30　ＳＣ１～４出土遺物実測図

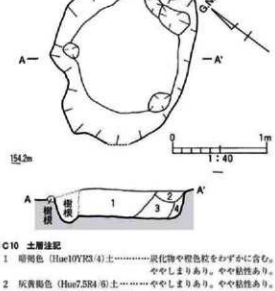
かな波状口縁のようである。**125・126**は小片であるが、深鉢の胴部の一部と考える。**125**の外面には煤が付着し、縄文による明瞭な施文が認められる。内面は横位の工具痕らしき調整が認められる。**126**の内面はナデ、外面には組織痕が認められる。**127**はホルンフェルス製の剥片である。片側縁部には細かな剥離痕が認められる。**128**は小型の砂岩製の石錘である。短軸方向に打ち欠きが片面方向から施されている。

ＳＣ９（図31） グリッドＣ４の南西隅付近に位置する遺構である。平面プランは、遺構の一部に樹痕に攪乱の影響を受けているが、長軸約1.78m、短軸約1.66mのほぼ円形と推定できる。（形状比＝1.07）検出面からの深さは約0.24mで、断面形は長方形である。埋土は黒褐色と褐色の２層からなる。ここでは、遺構埋土からの出土遺物のうち、土器３点、石器２点を図化した。

129はキャリパー状の深鉢の口縁部である。口唇部と口縁部直下に沈線文が施されている。**130**は深鉢の波状口縁部である。外面には棒状工具によって施された波状文様、口唇部には不明瞭な刻目が認められる。**131**は外湾する深鉢の頸部で、外面には縄文が施されている。**147**は尾鈴山酸性岩類製の磨石である。表裏面に磨痕が認められる。**144**はホルンフェルス製で小型の石錘である。短軸方向の打ち欠きが片端のみに施されている。



ＳＣ９ 土層注記
1 黒褐色（Hue10YR3/1）土……明赤褐色土（Hue5YR5/6）の微細粒をわずかに含む。あまりしまりなし。
2 褐色（Hue7.5R4/6）土……明赤褐色土（Hue5YR5/6）のブロックをわずかに含む。



ＳＣ10 土層注記
1 暗褐色（Hue10YR3/4）土……炭化物や橙色粒をわずかに含む。ややしまりあり。やや粘性あり。
2 灰黄褐色（Hue7.5R4/6）土……やしまりあり。やや粘性あり。
3 にぶい黄褐色（Hue7.5R4/3）土……やしまりあり。やや粘性あり。
4 褐色（Hue10R4/4）土……やしまりあり。やや粘性あり。

図31 ＳＣ９・10平断面図

ＳＣ10（図31、図版13） グリッドＢ３の南東の調査区壁近くに位置する遺構である。平面プランは長軸約1.84m、短軸約1.50mのほぼ円形である。（形状比＝1.07）検出面からの深さは約0.30mで、断面形は長方形である。ここでは、遺構埋土からの出土遺物のうち、土器５点、石器１点を図化した。

132・133は深鉢の口縁部である。**132**は口唇部外面に微突帯文が認められ、煤が付着する。内面は工具によるナデ、外面は指ナデによるやや粗い調整である。**133**の内・外面の調整は**132**と同様で、口縁外面に突帯文を有する。**134**は縄文、**135**は組織痕が外面に認められる深鉢の胴部小片である。また、**134**には貫通した１個の穿孔が施されている。**136**は深鉢の底部であり、表面は激しく摩耗を受けている。**145**はホルンフェルス製の打製石斧である。欠損部が大きいが、全体の形状が二等辺三角形に近い「バチ形」である打製石斧の基部と推定できる。表面には細かい敲打による整形痕が認められる。

ＳＣ11（図32、図版13） グリッドＢ３内で、**ＳＣ10**の北西側に位置する遺構である。遺構の約１／３が調査区西壁にかかりすべてを検出できなかったが、平面プランは長軸約1.58m、短軸約1.50の円形（形状比＝1.05）と推定される。検出面からの深さは約0.34mである。埋土は３層からなる。埋土中から大型の石器類を出土した。ここでは、遺構埋土からの出土遺物のうち、土器３点、石器６点を図化した。**137～139**は深鉢の胴部である。**137**は縦・横位の突帯に囲まれた部分に工具による連続した爪形刺突文、横位に並行する突帯間に細沈線文も認められる。**ＳＣ３**から出土した**119～121**と同類系の土器と考える。**138・139**の外面には撚糸文が施されている。**138**の内面には横位のナデ、**128**の内面には板状工具によるナデと指頭痕による調整が認められる。**139**の器厚は約５㎜である。**140**は針尾産と考える黒曜石の打製石鏃である。平面形態は二等辺三角形で両側辺は直線的に先端まで続いており、基部形態は凹基式で、その抉りは三角形を呈している。**142・143・146**は石錘で、その石材は**142・143**がホルンフェルス、**146**は砂岩である。**142・143**は長軸、**146**は短軸方向の両端にそれぞれ打ち欠きが施されている。**148**は尾鈴山酸性岩類製の台石で、床面から浮いた状態で出土した。

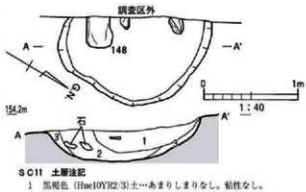


図32 ＳＣ11平断面図

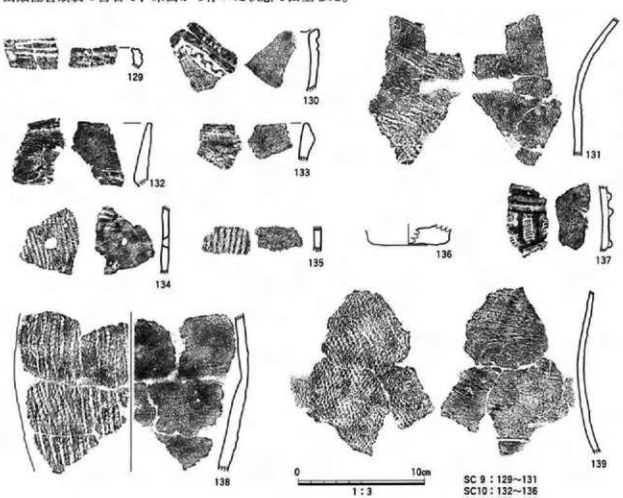


図33 ＳＣ９～11出土縄文土器実測図

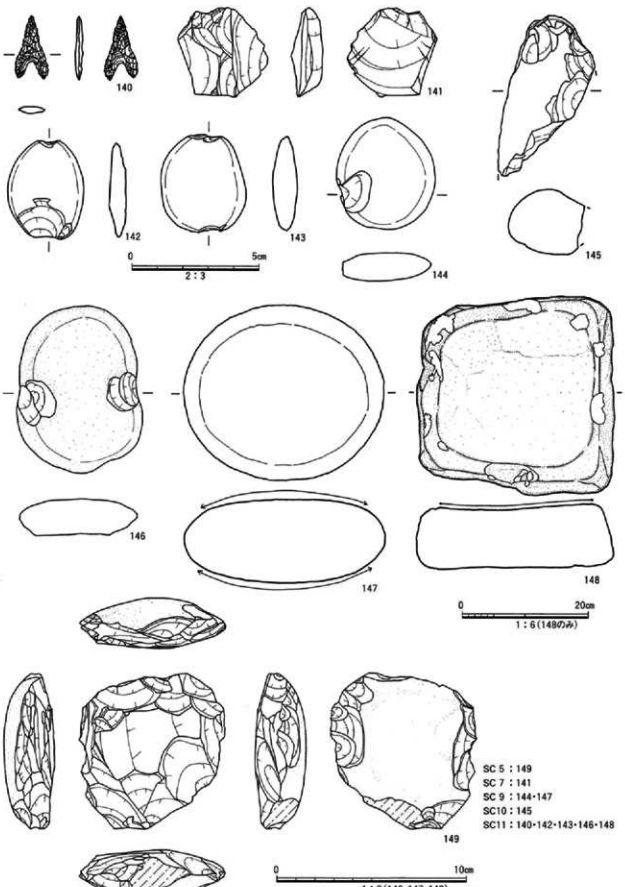


図34　ＳＣ５～11出土石器実測図

2　遺物包含層出土の遺物

i）土器

本調査区の遺物包含層（Ⅱ～Ⅲ層）からは、縄文土器が弥生土器や石器等と混在して出土した。それらは小片であるものが多く、全体の器形が分かる程度まで復元できたものはほとんどなかった。ただし、その形態や文様から判断すると、全体的には縄文時代中期・後期に帰属するものの割合が高く、その中にわずかではあるが、早期や晩期の土器小片が混在していた。

ここでは、遺物包含層から出土した縄文土器群をその形態や文様によって、深鉢を1～6類と類型化した。以下では、その分類の基準と根拠を示し、特徴ある遺物について若干の説明を加える。なお、個々の詳細な情報については、縄文土器観察表（表5～7）を参考にしてもらいたい。

1類：外面の地文が縄文であり、沈線文・押引文・刺突文・凹線文などの文様が施されている一群である。

（図35　150～153）

150は内湾するキャリパー状口縁で、縄文の上から横位に3条の沈線文が施されている。**151**はキャリパー状口縁を想定させる頸部～胴部である。縄文らしき文様の上から、口縁部にかけて縦位に連続する短直線状が認められ、その下に波状（横位）・直線土（縦位）の沈線文が施されている。**152**は縄文の上に太目の凹線文が施されている。**153**は縄文の上から太目の半裁竹管状工具による押引文が施されている。これらは船元式系土器に相当する群であると考える。

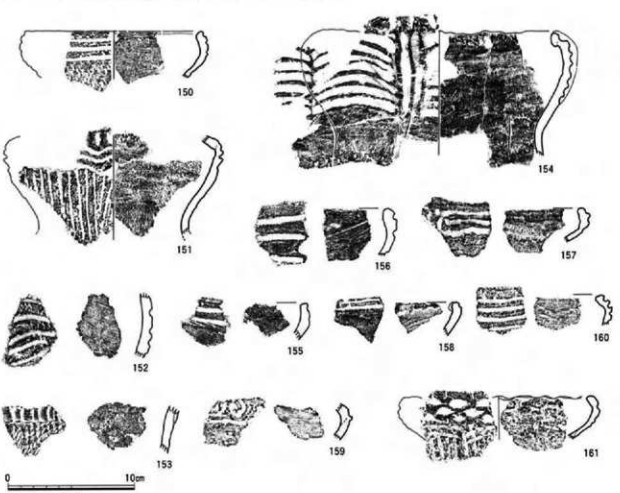


図35　遺物包含層出土遺物実測図（1）

2類：外面に沈線文や凹線文、連続刺突文、押引文などが施されている一群である。(図35・36　154～170)

さらに、口縁部の形態によってａ～ｃに細分した。

ａ　**大きく内湾させるキャリパー状口縁をもつもの**(154～161)

154は太い凹線文による縦位の３条突帯や横位の波状突帯などが口縁から頸部にかけて施されている。**155～157**の外面には沈線文が施されている。**155**は口縁と頸部の間に横位の２条沈線文が施されている。**156**の外面には横位に太い３条の沈線文、**157**の外面には横位の３条沈線文が施されている。そのうち最下位の沈線文は波状である。また、外面には煤が付着している。**158**は口唇部とその直下に２条の沈線が施されている。**159**の頸部付近には渦巻き状の沈線文が認められ、その直下には横位に１条の沈線文が施されている。**160**の外面には４条の平行沈線が横位に廻っている。**161**の口縁直下の外面には、管状工具による連続刺突文が横位に３段組で施されている。また、口唇部には押圧文の上から爪形状の刻みが認められる。外面の一部は黒色に変化している。これらは春日式系土器に相当する群であると考える。

ｂ　**やや内湾させる口縁をもつもの**(162～165)

162の外面には横位に工具による押引文が認められる。**163**の口縁部内面には斜位に施された縄文による連続押圧文、外面にはやや風化気味であるが３条の沈線文が認められる。**164**の外面には３条の沈線文、**165**の外面には２条の浅い凹線文が施されている。

ｃ　**やや外傾・外反、もしくはほぼ直立する口縁をもつもの**(166～170)

166はやや外傾、**167**はやや外反する口縁である。**166**は口唇部内面が肥厚しており、口唇外面には刻目が認められる。外面には山形状に３条の沈線文が施されている。**167**の外面はミガキ調整後に数条の沈線文が施されている波状口縁である。**168**はほぼ直立する口縁である。外面には２条の浅い凹線が認められる。

胴部のみが残存して、この類に属すると考えたものは次のとおりである。

169は外面に沈線文が施されている。**170**の外面には、貼付突帯間に半裁竹管状工具による沈線文と連続爪形文が施されている。

3類：口縁部内面に沈線文が施されている一群である。(図36　171～176)

171は丸く膨らんでいる胴部をもつ深鉢の波状口縁部である。口縁部内面に１条の沈線文が、外面にはナデ・ミガキらしき調整が認められる。**172～174**も波状口縁で、口縁部内面に１条の細沈線文が廻ると考える。**175・176**はどちらも内・外面ともにナデ調整で、さらに内面には１条の沈線文が施されている。

4類：突帯が施されている一群である。(図36　177～181)

177～180は深鉢の口縁部である。**177**は口縁部直下に貼付突帯があり、その断面形は鈍角三角形状である。**178**は突帯直下に貫通した穿孔を有する。内・外面ともにミガキ調整が認められる。**179**の外面には低い断面三角形の突帯文が波状に施され、内・外面ともに貝殻条痕文が認められる。**180**の外面には指ナデ調整と刺突文（未貫通）が認められる。**181**は深鉢の胴部で、１条の貼付突帯があり、その直下には横位に連続した竹管文らしき文様が認められる。

5類：貝殻条痕文や条痕文が施されている一群である。(図36　182～186)

182～185は深鉢の口縁部である。**182**の内面には貝殻条痕文、外面にはナデの上に縄文による沈線文が認められる。**183**の内面には貝殻条痕文、**184・185**の外面には条痕文が認められる。**186**は内・外面とも

に貝殻条痕文が認められる深鉢の胴部である。

6類：工具による調整痕が施されている一群である。(図37　187～197)

187～197は深鉢の口縁部であり、**187～193**はやや外傾、**194～197**はやや外反している。**187～193**の内面、または外面には工具によるナデらしき調整が認められる。**189**の口唇部外面には凹みが認められる。**191**の外面の一部は黒色を呈し、1個の貫通した穿孔が施されている。**192**は波状口縁の一部である。**194**の外面は板状工具によるナデ調整が施され、口唇部には細沈線が認められる。**195・196**の外面はどちらもその一部が黒色に変化している。**197**は推定口径が約20cmである。

次は1～6類以外の土器をまとめたものである。内・外面に施された主な文様・調整等によってA～Fに細分した。(図37　198～215)

A　外面に山形押型文が施されているもの(198)

198は深鉢の胴部と考える土器小片である。調査区の北西域に広がる盛り土中から出土した。

B　外面に撚糸文が施されているもの(199～202)

いずれも深鉢の胴部片で考える土器小片である。**199・200**はどちらも外面に明瞭な撚糸文が認められる。**201・202**の外面には撚糸文らしき文様が認められる。

C　内・外面ともにナデ調整が施されているもの(203・204)

203の外面には煤が付着し、**204**は内・外面ともに一部が黒色に変化している深鉢の口縁部である。

D　外面にミガキ調整が施されているもの(205～208)

205・206には内・外面ともにミガキ調整が認められる。**207・208**の外面は板状工具によるナデの上からミガキ調整が施されている。いずれも黒色磨研系の土器片と考える。

E　内面、もしくは外面に刺突文が施されているもの(209～212)

209は口縁部内面に竹管状工具による連続刺突文が施されている。**210**は口縁上端部と口唇部上面、**211**は口縁部外面、**212**は胴部外面にそれぞれ形態が異なる刺突文が認められる。

F　外面に組織痕が施されているもの(213～215)

213～215はいずれも小片であるが、明瞭な組織痕が認められる。

次は文様・調整等に関わらず、底部をまとめたものである。(図38　216～219)

216～219はいずれも上げ底である。**216**の内・外面には斜位の貝殻条痕の上からナデ消し調整が施されている。**217**の内面には指ナデ、外面には指ナデ・指押さえ、**218**の内・外面は丁寧なナデ調整が認められる。**219**の底部は円形でなく、緩やかに角張った部分が認められる多角形状の底部が推定される。端部は形成時に粘土を貼り付け積み出したように少し肥厚している。**220**は平底である。

さらに、その他の器種については、以下のようにまとめた。(図38　221～225)

221～223は浅鉢である。**221**は風化を強く受け、内・外面ともにナデ調整が認められる。**222**は頸部で緩やか「く」の字状に屈曲する。**223**は頸部で強く内に屈曲し、口縁部直下で「く」の字に屈曲する。内面にはナデ、外面にはミガキ調整が施されている。**224**は壺の胴部である。最大径約32cmと推定される。外面には明瞭なミガキ調整が認められる。**225**は土器片錘である。片表面に縄文文様が認められる。

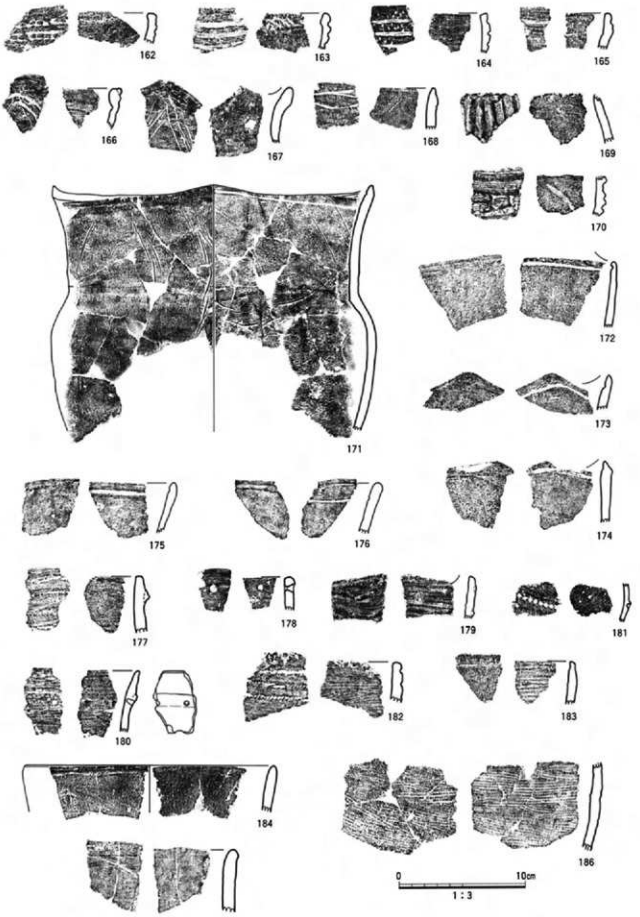


図36　遺物包含層出土遺物実測図（2）

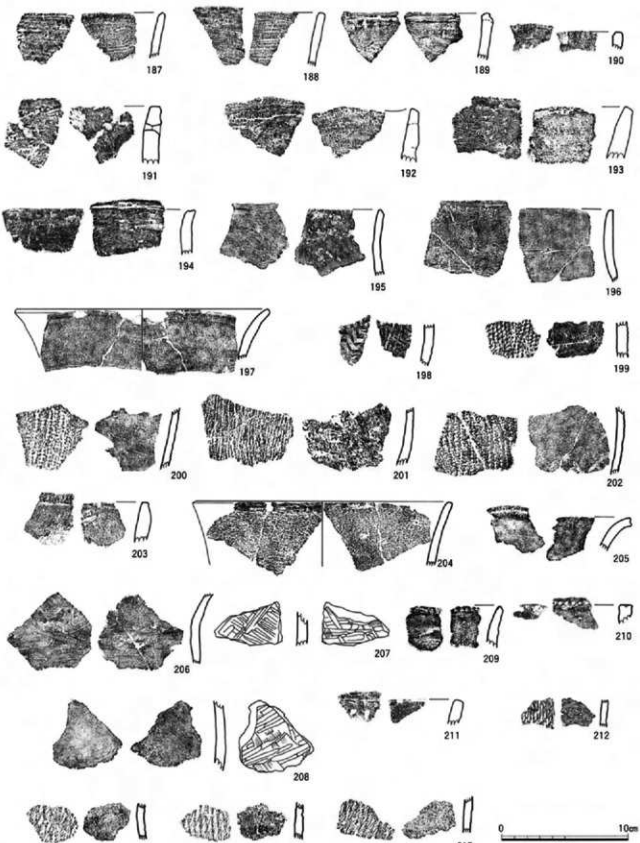


図37　遺物包含層出土遺物実測図（3）

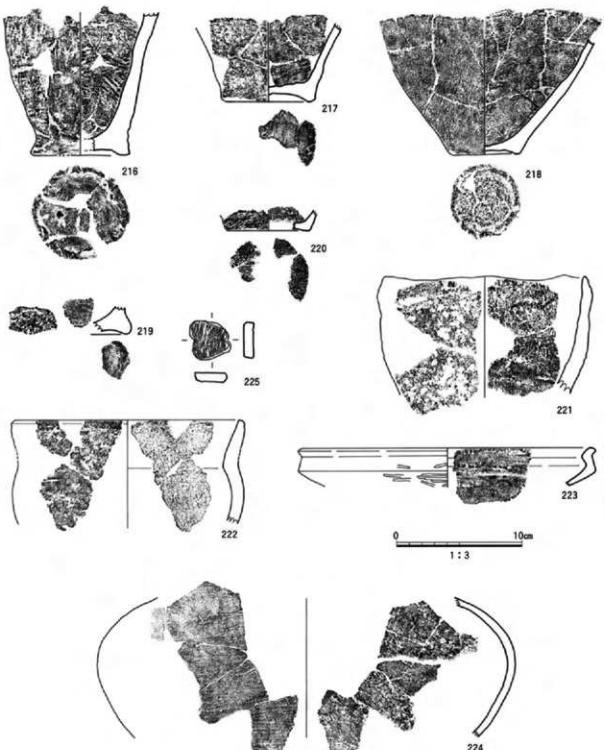


図38　遺物包含層出土遺物実測図（4）

ii）石器遺物

本調査区で出土した石器遺物は総数約530点である。剥片が最も多く、次いで磨石、敲石、石錘、打製石斧、打製石鏃などであった。（このうち116点について、実測図、写真及び石器観察表に掲載した。）出土した位置は、遺物包含層だけでなく、縄文時代や弥生時代の各遺構埋土中にもあった。これらの石器遺物も、他の遺物と同様に、高位置からの流れ込み等で原位置からの出土ではない可能性が高く、詳細な時期の確定は難しかったが、その器種や形態・石材などからが縄文時代に帰属するものが大部分を占めると考える。

ここでは、遺物包含層（Ⅱ～Ⅲ層）から出土した石器を一括して器種や石材を中心に分類し、その詳細を説明していく。なお、各遺構埋土から出土した石器については、各遺構の出土遺物で一括して説明した。また、個別の出土位置・色調・法量値などについては石器観察表（表13・14）を参照してもらいたい。

打製石鏃（図39　226～229）

ここでは遺物包含層から出土した打製石鏃は4点を図化した。

226・227は平面形態が二等辺三角形で、どちらもチャート製である。**226**の基部形態は平基式である。両側辺はわずかに膨らみながら先端まで続いている。**227**の基部形態は凹基式である。凹基の抉りはU字状に内湾しており、全長の約1/2まで達して深い。両側辺はやや外湾しながら先端に続いている。**228・229**の平面形態は正三角形をしており、凹基式である。**228**の凹基の抉りは三角形で、全長の約1/3にまで達している。両側辺はやや外湾しながら先端まで続いている。石材はチャートである。**229**の凹基の抉りはアーチ状であり、それ程深くない。両側辺は直線的に先端まで続いている。石材はガラス質安山岩である。この他、未図化であるが、ホルンフェルス製の打製石鏃が遺物包含層から3点出土した。

石匙（図39　230・231）

遺物包含層から出土した石匙は2点のみであり、ここではどちらも図化した。**230**はいわゆる横型で両面に丁寧な調整が施されている。刃部とつまみ部が左右非対称である。石材はガラス質安山岩である。**231**は破損により約1/2の残存ではあるが、同じく横型のものであり、両面に丁寧な調整が施されている。石材は白色の石英である。

粗製剥片石器（図39　232）

粗雑な剥片剥離が看て取られ、定型的な器種としては判断しにくい剥片の一群である。石材は砂岩が多く、遺物包含層からは6点出土した。石材はホルンフェルスと尾鈴山酸性岩類であった。その多くは、礫面から打面調整を行わず剥離されたものである。ここではそのうち1点を図化した。**232**はホルンフェルス製で、蛤状の幅広の横長剥片であり、断面形がレンズ形である。微細な剥離痕が認められる。正面全体に自然面を残すことから、母岩から最初に剥離されたものと推定される。

剥片（図40　233・234）

遺物包含層から出土した2点のみをここでは図化した。**233・234**はともにホルンフェルス製であり、打面形成を行った後に剥片を剥離したものであると考えられる。どちらにも側縁部に細かな剥離痕が認められる。なお、本調査区内で剥片は、315点以上出土している。利用された石材はホルンフェルスが非常に多く、チャートや黒曜石、珪質頁岩などは小片であるものが目立つ。またわずかではあるが、器種や石材などから旧石器時代に帰属すると判断できる剥片も少量であるが出土した。これらについては、

第5節を参照してもらいたい。

石核（図40・41　235～237）

遺物包含層から出土した石核は8点であった。その石材はほとんどがホルンフェルスであり、チャートや針尾産と考えられる黒曜石が各1点であった。ここでは、そのうち3点を図化した。**235～237**はすべてホルンフェルス製である。**235・236**はともに自然面を残し、打面形成を行った後に剥離作業を行っている。また、その剥離作業も打面転移をしながら複数方向から行っているようである。**237**は表裏両面が剥離を行う作業面となっている。

打製石斧・部分磨製石斧（図41～42　238～253）

ここでは遺物包含層から出土した打製石斧15点、部分磨製石斧2点を図化した。石材はすべてホルンフェルスである。なお、本調査区内では出土した石斧類の多くは、風化作用を受けており、原因不明の欠損によって全体の形態が不明瞭のものが多くあった。打製石斧は残存する形態から、全体の形状は二等辺三角形に近く、最大幅が石斧の下位にくる「バチ形」（**238～246**）、石斧の側辺に内湾する抉りが認められる「有肩形」（**247・248**）、全体の形状は長方形に近く、最大幅が石斧のほぼ中位にくる「短冊形」（**249～251**）の3群に大別できる。**244**は欠損があまりなくほぼ全体の形態が看て取れる。欠損の原因はそれぞれ不明であるが、**238・240～243・245**は基部側のみ、**239**は刃部側のみが残存している。**249・250**の刃部には細かい剥離調整が認められる。**247**は表面の一部に自然面が残り、明瞭な抉りが上位の両側にある。他の石斧に比べると厚みが薄い。**239～241・243・251**の表面には細かい敲打による整形痕が認められる。**252・253**は刃部の表面を磨いた部分を有する部分磨製石斧である。どちらも礫面を円刃として利用しているようだが、刃部側しか残存していないので全体の形態は不明である。

磨石・敲石・凹石（図43・44　254～266）

本調査区内で磨石・敲石は、一部破損したものを含め、合計38点が出土した。石材としては、尾鈴山酸性岩類18点と砂岩16点で大部分を占める。ここでは、そのうちの遺物包含層から出土した12点を図化した。そのサイズは6～15cmで、重さは200～800gである。形態も円形（**254～259**）・楕円形（**260・262**）・長楕円形（**261・263**）など様々である。主な敲打痕などの様子は以下のとおりである。**259**は全周縁に敲打痕が認められ、他より大きく重く約845gである。**261～263**は、長軸方向の両端に敲打痕が認められる。**254～258・260**の全周縁には敲打痕による稜が認められ、いわゆる“ソロバン珠状”であり、どれも掌中に収まるサイズである。表面に擦痕もあることから磨石との併用の可能性もある。**264**は砂岩製の凹石である。表裏面の中央部に敲打による凹みが認められる。周縁にもわずかに敲打痕が認められることから敲石との併用も考えられる。**265**は表面全体に擦痕が残る磨石である。**266**は表面中央部にわずかな敲打痕が認められる敲石である。

石錘（図44　267～275）

本調査区内で石錘は、一部欠損したものを含め、合計33点が出土した。石材としては、砂岩（21点）・ホルンフェルス（10点）の割合が高く、尾鈴山酸性岩類・頁岩製が各1点である。いずれも自然礫の一部に加工を施した錘具に相当する「打欠石錘」と考えられる。ここでは、遺物包含層から出土した9点を図化した。**267～269**は短軸方向、**270～275**は長軸方向の打ち欠きが施されている。**273**は比較的に器厚が厚く、重さは約250gである。**274・275**は長楕円形状であり、他の円形状のものと異なる。

その他（図45　276～280）

276はチャート製で表面が艶やかな手触りである。いわゆる、“ペットストーン”である可能性が考えられる。**277**・**278**は石器未製品である。**277**はチャート、**278**は姫島産の黒曜石製である。どちらも石器作製過程を想起させる細かな剥離痕が認められる。**279**・**280**は、どちらも石器作製過程の途中段階のものとも想定できたが、詳細な用途等が不明であるため「用途不明石器」とした。石材はどちらもホルンフェルスである。**279**は短軸方向の両端に抉るような打ち欠きが認められる。**280**は側縁部に明瞭で比較的丁寧な剥離調整痕が認められる。

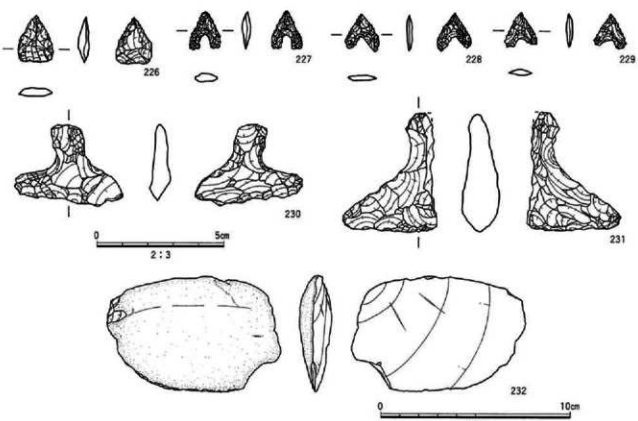


図39　遺物包含層出土遺物実測図（5）

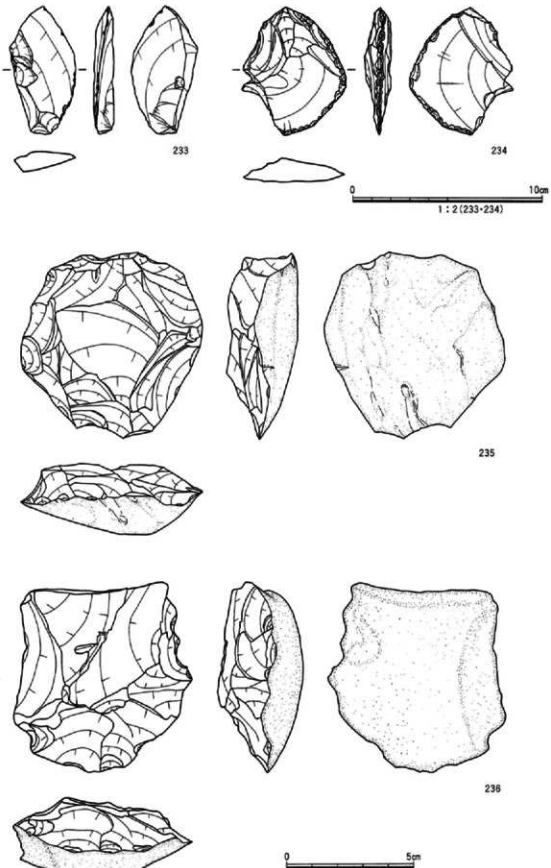


図40　遺物包含層出土遺物実測図（6）

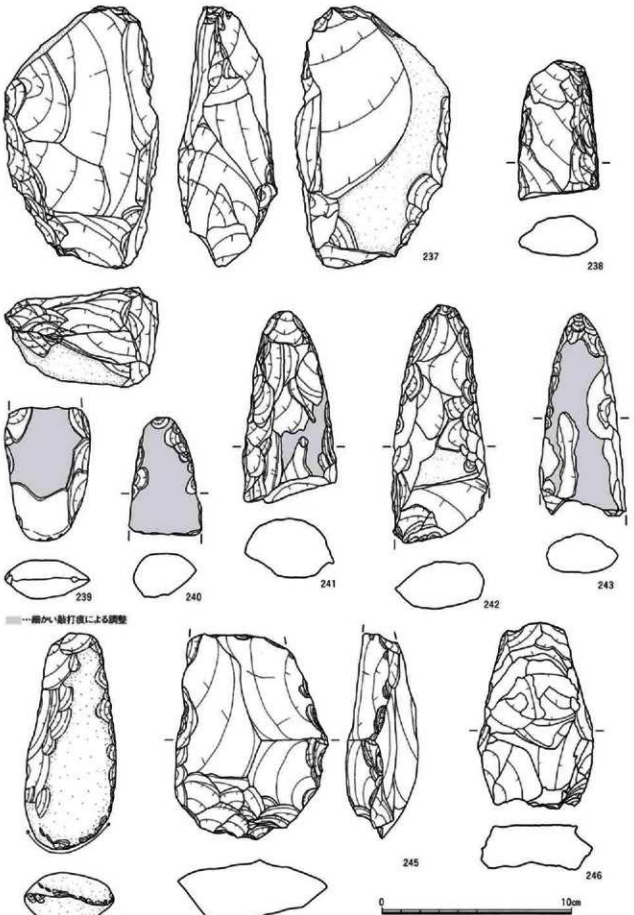


図41　遺物包含層出土遺物実測図（7）

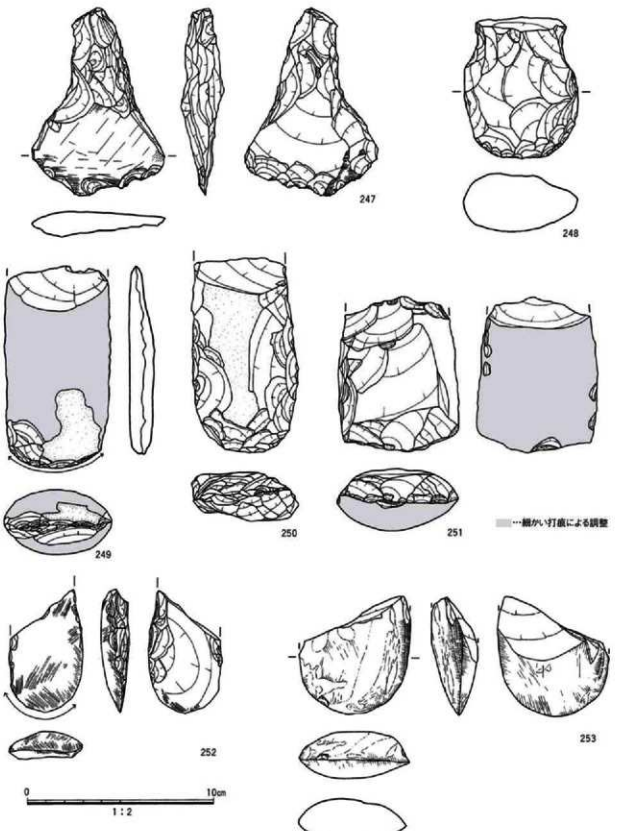


図42　遺物包含層出土遺物実測図（8）

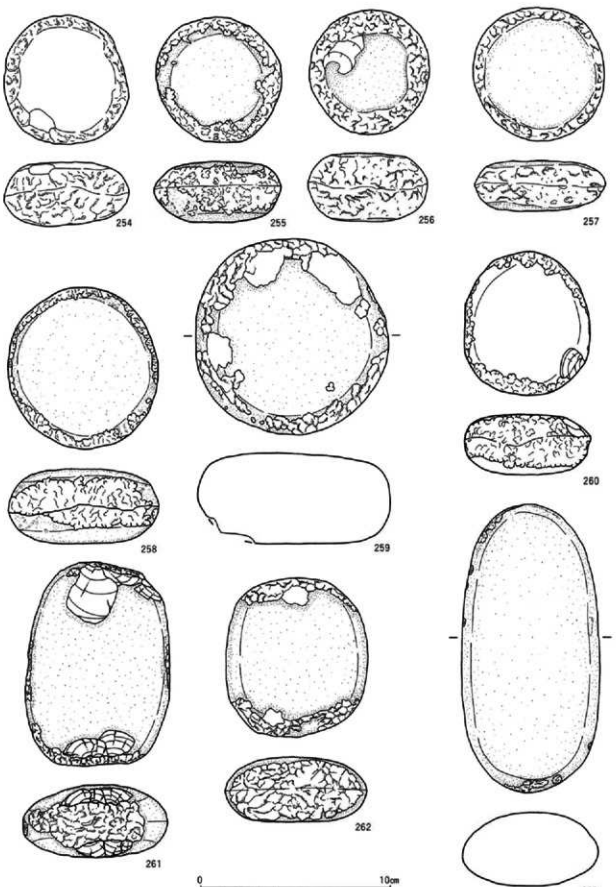


図43　遺物包含層出土遺物実測図（9）

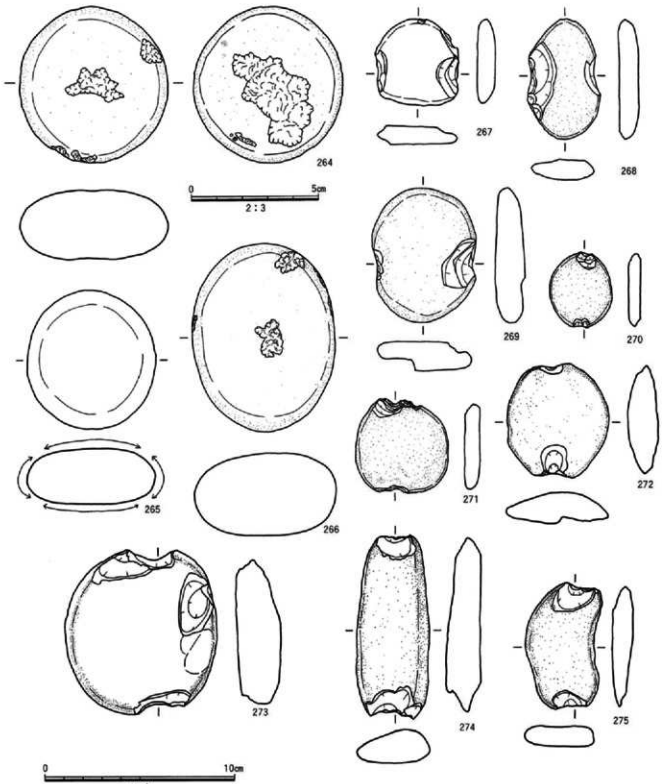


図44　遺物包含層出土遺物実測図（10）

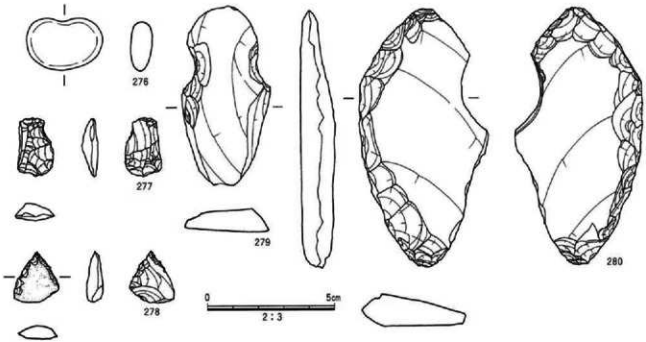


図45　遺物包含層出土石器実測図（11）

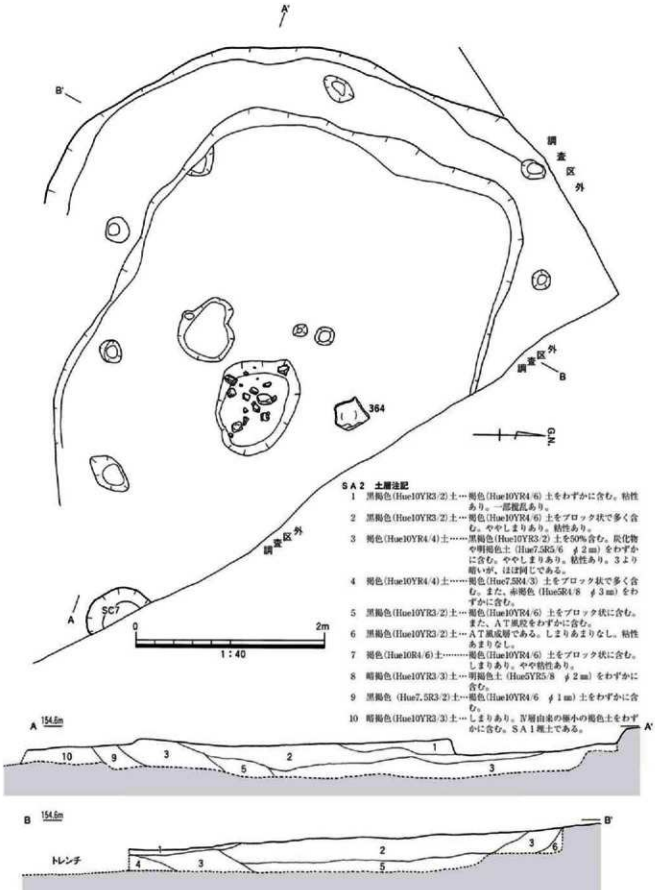
第4節　弥生時代中期

本調査区では、弥生時代の遺構として、竪穴住居1軒・不明遺構1基を検出した。遺構埋土から出土した土器を概観すると、弥生時代中期に帰属するものが多かった。ただし、遺構埋土及び遺物包含層（Ⅱ～Ⅲ層）から出土した遺物については、縄文時代の遺物同様に、調査区より高位置の場所からの流れ込み等により原位置からの出土ではない可能性が高いと考える。以下、弥生時代の遺構と遺物について説明を行う。

1　検出遺構と出土遺物

i）竪穴住居

ＳＡ２（図46,図版14）　調査区のほぼ北部に位置する竪穴住居である。遺構検出はⅣ層上面で行った。調査区壁まで遺構の一部が至っていたためにその全体を検出することはできなかったが、平面プランはほぼ長方形を呈し、その規模は6ｍ×7ｍと推定される。先述した縄文時代の竪穴住居**ＳＡ１**を南方向で切っている。また、トレンチ及び調査区壁によってその約半分しか確認できなかったが、おそらく床面全周にベッド状の段（幅約0.8～1.0m、床面からの高さ0.2m）を伴う遺構であると考える。明確な主柱穴、貼床や炉跡は確認できなかった。遺構埋土中からの出土遺物は、土器・石器を合わせて約170点で、そのほとんどが床面から3～50cmの間で出土している。床面直上では、住居跡中央部分からやや南東に寄った位置で、尾鈴山酸性岩類製の台石**364**（約27×31×5㎝、約6.6kg）を検出した。遺物の取り上げの際には、四分法により掘削時に設定した土層観察ベルトをもとに、ほぼ北西部から時計回りに**ＳＡ２ａ→ＳＡ２ｂ→ＳＡ２ｃ→ＳＡ２ｄ**としてセクションを設定して取り上げた。また、ベッド状の段上から出土した遺物も同様にセクションを**ＳＡ２ベッドａ～ｄ**と設定して取り上げた。遺構埋土からは



ＳＡ２　土層注記

1　黒褐色(Hue10YR3/2)土…褐色(Hue10YR4/6)土をわずかに含む。粘性あり。一部植乱あり。

2　黒褐色(Hue10YR3/2)土…褐色(Hue10YR4/6)土をブロック状で多く含む。ややしまりあり。粘性あり。

3　褐色(Hue10YR4/4)土……黒褐色(Hue10YR3/2)土を50%含む。炭化物や明褐色土(Hue7.5R5/6　φ2㎜)をわずかに含む。ややしまりあり。粘性あり。3より暗いが、ほぼ同じである。

4　褐色(Hue10YR4/4)土……褐色(Hue7.5R4/3)土をブロック状で多く含む。また、赤褐色(Hue5R4/8　φ3㎜)をわずかに含む。

5　黒褐色(Hue10YR3/2)土…褐色(Hue10YR4/6)土をブロック状に含む。また、ＡＴ風砂をわずかに含む。

6　黒褐色(Hue10YR3/2)土…ＡＴ風成層である。しまりあまりなし。粘性あまりなし。

7　褐色(Hue10R4/6)土……褐色(Hue10YR4/6)土をブロック状に含む。しまりあり。やや粘性あり。

8　暗褐色(Hue10YR3/3)土…明褐色土(Hue5YR5/8　φ2㎜)をわずかに含む。

9　黒褐色(Hue7.5R3/2)土…褐色(Hue10YR4/6　φ1㎜)土をわずかに含む。

10　暗褐色(Hue10YR3/3)土…しまりあり。Ⅳ層由来の極小の褐色土をわずかに含む。ＳＡ１埋土である。

図46　ＳＡ２実測図

弥生時代中期に帰属する弥生土器片が多く出土したことにから、ＳＡ２は弥生時代中期の遺構と判断した。出土した遺物の中に含まれていた縄文土器や石器等については、ＳＡ２がＳＡ１を切ったり、縄文遺物包含層を掘り込んだりしたことによる混入や周囲からの流れ込み等の可能性があると考えた。ここでは、ＳＡ２埋土から出土した弥生土器（45点）だけでなく、同時に出土した縄文土器（19点）、石器31点も併せて図化して説明している。(図47～51)

縄文土器　(図47　281～297)

281～294は深鉢の口縁部である。**281**はキャリパー状の口縁である。内湾する外面には横位に平行して連続した押引文の間に半裁竹管状工具による連続刺突文が施されている。**282～287**は内面、または外面に貝殻条痕文が認められる群である。どれも口縁はやや外傾している。**282**の内面は横位の貝殻条痕文の上からナデ、外面はナデ調整であり、未貫通の穿孔が施されている。**283**は内･外面ともに横位の貝殻条痕の上からナデ消しを施されている。**284**の口縁部直下には２条の細沈線が施されている。内･外面ともに貝殻条痕文の後にナデ消しが認められる。**285**は摘み出されたような突帯を外面に有する口縁である。内･外面ともに貝殻条痕文で調整されている。**286**は内･外面ともに条痕文で調整されている。残り部分は少ないが波状口縁の一部のようでもある。**287**は内･外面ともに貝殻条痕文が施されている。外面には併せて押圧文も認められる。**286**と同様に波状口縁状のようである。**288**は外傾する口縁部で、内・外面ともにナデ調整で、外面には未貫通の孔列文が施されている。**289**の内・外面、**290**の外面には沈線文が施されている。また、**289**の口縁上端部には刻目も併せて認められる。**291**･**293**の内･外面はいずれもナデ調整である。**292**は内・外面ともに斜位のナデ調整である。器壁が薄く、外面には煤の付着もあり、一

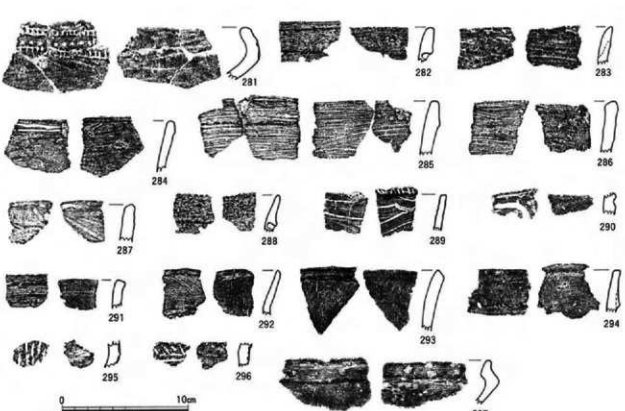


図47　ＳＡ２出土遺物実測図（1）

部が黒色に変化している。294は内・外面ともに指ナデが認められる。295・296は小片で詳細な部位は不明であるが、外面に工具による爪形の連続刺突文が施されている。また、296の内面には横位に2条の細沈線が認められる。297は浅鉢の口縁部から胴部にかかる部位であり、逆「く」の字状を呈する。

弥生土器（図48　298～342）

［甕口縁～頸部］（298～325）

298～317は口縁部に刻目が認められ、その直下に断面三角形の貼付刻目突帯を有するタイプである。そのうち、298～309・316は、口唇部外面を摘み出して突出させている群である。口縁部は298～304がほぼ直立、305～209・309・316はやや外傾している。299の口唇部には刻目は認められないが、その他の口唇部にはどれも刻目が施されている。また、299・305～309・316の口縁部上面は平面であるが、298・300～304の口縁部上面には凹みが認められる。さらに、298～306・308の外面には1条の貼付刻目突帯、304の外面には2条の貼付刻目突帯を有する。主な調整等については以下のとおりである。298の内・外面にはミガキ調整が認められる。300・301はどちらも内面はナデ、外面は横位のナデ・縦位のハケ目、302の外面にはミガキ、308は内・外面ともに斜位のハケ目がそれぞれ認められる。299・303・304の内・外面はどれもナデ調整である。305の外面には明瞭な斜・縦位のハケ目が認められ、煤が付着して、内面にはナデ調整・指頭痕が認められる。306の内面はナデ、外面には厚く煤が残る部分があり、縦位のハケ目調整が明瞭に認められる。309・316の外面には明瞭な斜・縦位のハケ目が認められる。

310～315・317は刻目のあるL字状の口縁部を有するタイプである。口縁部の断面形が310～312は三角形状、314～315・317は台形状である。また、310・312・317は口縁直下に1条の刻目貼付突帯を有する。主な調整等については、310・311・313・314の内・外面にはともにナデ、317・312の外面には横位のナデ・斜位のハケ目調整が認められる。

318～321は刻目のないL字状の口縁部を有するタイプである。いずれもその口縁部の断面は台形に近い形状である。318～320の口唇部には凹みが認められる。口縁部は318・319・321がほぼ直立しており、320はやや内傾している。318は推定口外径が約27cm であり、胴部には3条の貼付突帯を有する。319は推定口外径が約25cm であり、胴部には断面三角形状の1条の貼付突帯を有する。

322・323は口縁部が外反するタイプである。322は頸部から緩やかに外反している口縁部である。内面にはミガキの後、ナデ調整、外面には風化のために調整は不鮮明であるが、指頭痕が認められる。323は胴部が緩やかに膨らみ、頸部から大きく外反する口縁部を有する。内・外面ともにナデ調整であるが、土器の表面全体に凹凸が目立つ。外面には煤が付着する部分が認められる。

324・325は口縁部が「く」の字状に外に開くタイプである。324の外面にはハケ目の後にナデ調整が施され、325の外面には部分的に少量の煤が認められる。

［甕胴部］（326・327）

326には1条の貼付刻目突帯が残存している。内面にはナデ、外面の突帯下には斜位のハケ目調整が認められる。327の内面はナデ、外面は明瞭な斜・縦位のハケ目が認められ、部分的に煤が付着している。

［甕底部］（328～336）

326～330・332～336は平底で、331は上げ底である。328～330は底部から緩やかに外反しながら立ち上がるタイプである。328の外面には縦位のハケ目が明瞭に認められる。329・330は内・外面ともにナデ調整であり、330の底外面には指頭痕も認められる。331・332は端部が外に張り出すタイプである。331は

内・外面ともにナデ調整である。332の外面には縦位のミガキ調整が確認できる。333～336は底部から直線的に開くタイプである。333は内・外面にハケ目調整が認められる。334の内面にはハケ目の後に指ナデ、外面にはナデ調整が施されている。また、底外面には植物組織による圧痕が認められる。335の外面はタタキの後にナデ調整が施されている。底外面には不明瞭であるが圧痕が認められる。336の外面には指頭痕、底外面には朴（ほお）（モクレン科の落葉高木）と考えられる明瞭な葉脈痕が確認できる。

［壺］（338～340）

338は頸部から胴部にかかる部分である。内面には指押さえ・指ナデ・ハケ目、外面の一部は黒色に変化し、ミガキやハケ目の上からのナデ調整が認められる。339・340ともに口縁上端部に横位の凹線を有する。339は内・外面ともに風化のため調整不明である。340の内・外面ともにナデ調整で、内面には煤が付着している。

［鉢］（337・341）

337は鉢の内湾する胴部であり、口縁部に近づくほど器壁が薄くなっている。内面の一部は黒色に変化し、斜・縦位のハケ目の上を指ナデ、外面には部分的に煤が付着し、ナデ調整が認められる。341は内湾する胴部から直立する口縁部で、内面には斜・横位、外面には横位のナデ調整が認められる。

［その他］（342）

342は器種・部位は不明ではあるが、竹管文とイチイガシと考えられる種子圧痕が並んで認められる。

石器（図49～51　343～365）

343～345は打製石鏃で、どれも基部形態は凹基式である。343・345は全体の形状が二等辺三角形で、凹基の抉りは浅いアーチ状である。344は側辺が角張っており、基部の抉りが鈍角二等辺三角形で、先端部は破損している。石材は343がホルンフェルス、344・345はガラス質安山岩である。SA2からはこれらを含め、打製石鏃が5点出土した。346は緑色凝灰岩製の磨製石鏃で先端部は欠損している。347は「用途不明石器」で、石材はチャートである。石器未製品とも考えられる。348～350は剥片である。ＳＡ２からは剥片が約40点出土し、約50％がホルンフェルス製である。348・349は縦長剥片、348は横長剥片である。349の側縁部には細かな剥離痕が認められる。石材は348・350がホルンフェルス、349は姫島産の黒曜石である。351は石核である。石材はホルンフェルスで自然面を残し、打面形成を行った後、剥離作業を行っている。352・353は敲石である。352の石材は青灰色のチャートで、長軸端部には剥離痕と敲打痕が認められる。353の石材は砂岩である。ほぼ全周縁に敲打痕が認められる。354～357は石錘である。354～356は長軸方向、357は短軸方向に打ち欠きが施された「打欠石錘」である。石材は354・356が砂岩、355・357がホルンフェルスである。358・359はどちらとも一部欠損により全体の形態が不明瞭であるが、ホルンフェルス製の打製石斧である。358はおそらく「バチ形」の基部であると考える。表面には細かい敲打による整形痕が残っている。359は風化を強く受けているが「短冊形」の刃部であると考える。360は部分磨製石斧である。ホルンフェルス製で、刃部が滑らかに研磨されている。361は石皿である。表裏面の側辺から中央部にかけて明瞭な研磨による凹みが認められる。三側面に研磨痕が認められることから長期間使用したと推定される。石材は砂岩である。362は表裏面の中央部に敲打痕による凹みが認められる凹石である。長軸方向両端に明瞭な敲打痕も残ってことから敲石との併用も考えられる。363は尾鈴山酸性岩類の砥石と考える。片側表面のみに磨痕が認められるが、石皿として使用も捉える。364・365はどちらも尾鈴山酸性岩類の台石である。364はSA2床面直上で検出され、重量約6.6kgである。（図46参照）

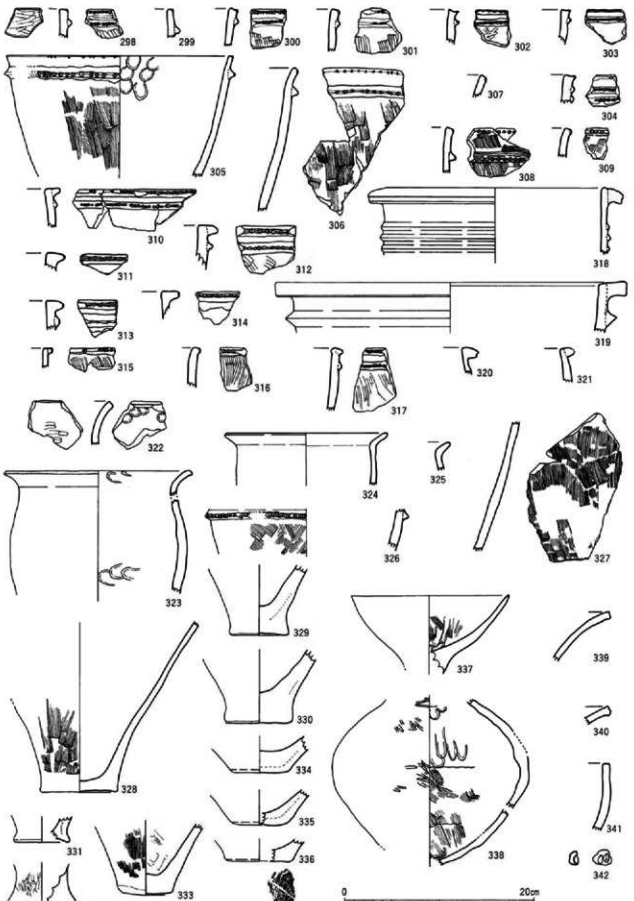


図48　ＳＡ２出土遺物実測図（2）

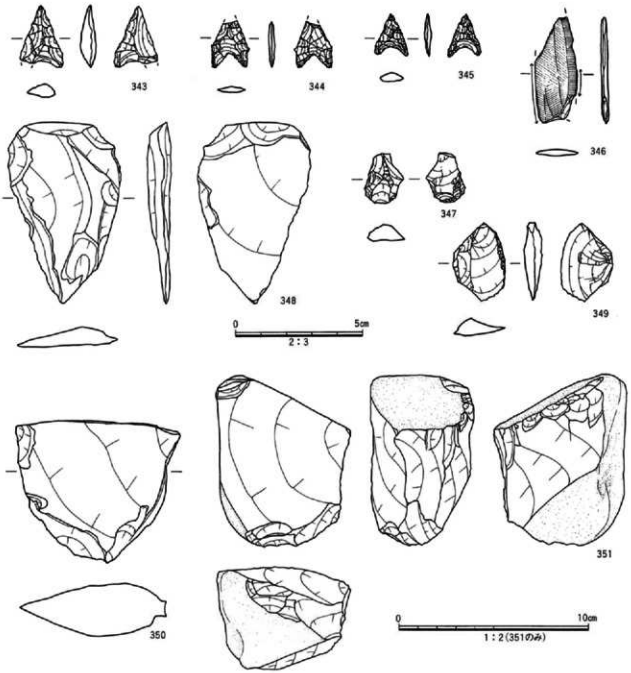


図49　ＳＡ２出土遺物実測図（3）

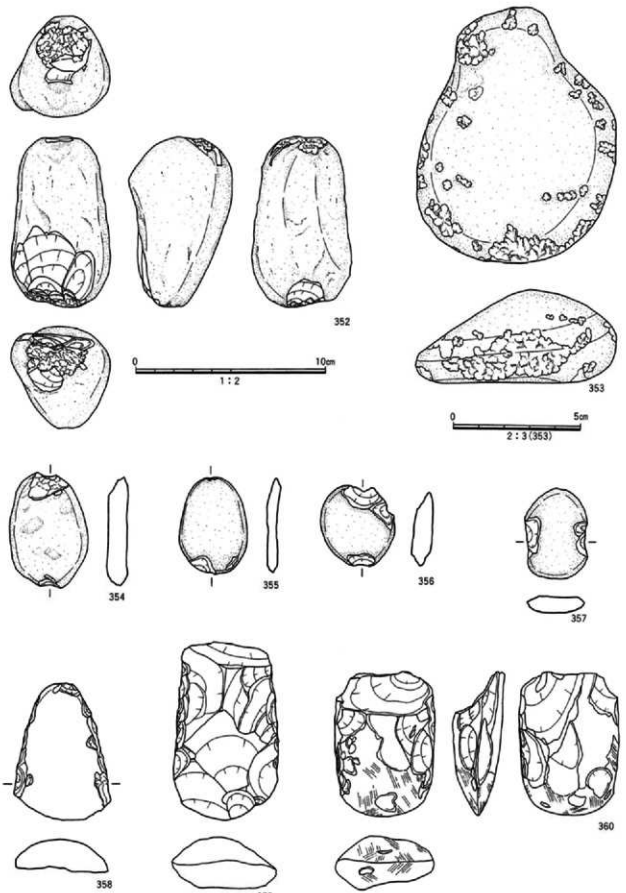


図50　ＳＡ２出土遺物実測図（4）

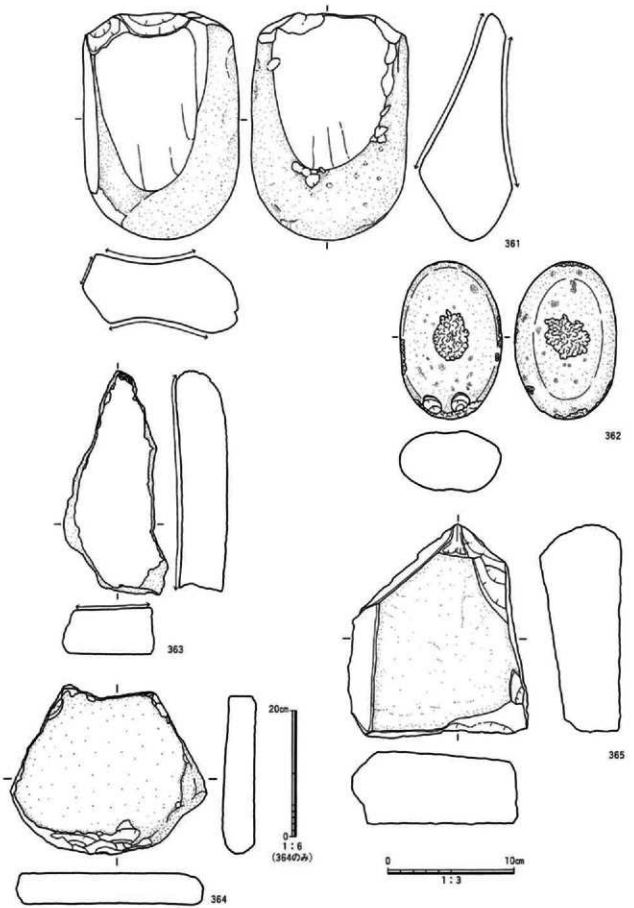
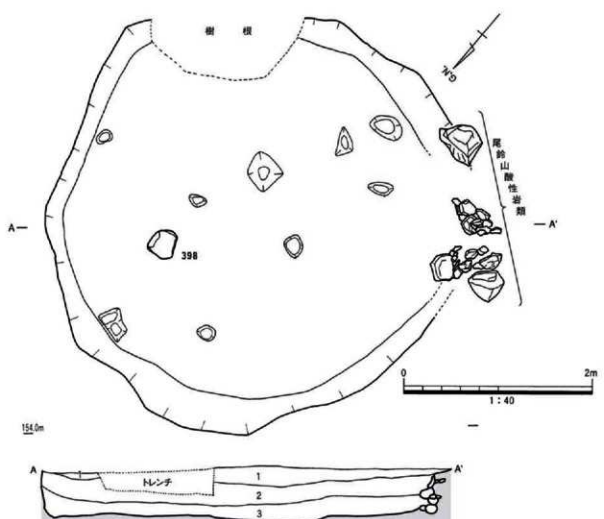


図51　ＳＡ２出土遺物実測図（5）

ii）不明遺構

ＳＺ１（図52、図版15） 調査区の南東部に位置する遺構である。検出面はⅣ層上面である。平面プランはほぼ円形を呈し、その規模は約4.0m×4.5mを測る。検出面からの底面までの深さは約0.6mあり、底面全体には節理がある尾鈴山酸性岩類の自然礫層による凸凹が認められる。また、そこには不規則に配置されたような小柱穴とも考えられる平面楕円形で直径0.2～0.3m、深さ0.2～0.4mの凹み８個を確認した。なお、貼床や炉跡などは確認できなかった。住居の可能性も考えられるが断定は避けておきたい。遺構の用途については不明である。遺物の取り上げの際には、四分法により掘削時に設定した土層観察ベルトをもとに、ほぼ北西部から時計回りに**SZ1a→SZ1b→SZ1c→SZ1d**としてセクション設定を行って取り上げた。遺構埋土内からの出土遺物は、土器・石器を合わせて約80点で、中央部分からやや東に寄った位置の床面直上で尾鈴山酸性岩類製の台石**398**（約0.32m×0.29m　11.5kg）を検出した。



ＳＺ１　土層注記

1　黒褐色(Hue10YR2/3)土…ややしまりあり。やや粘性あり。

2　暗褐色(Hue10YR3/4)土…ややしまりあり。やや粘性あり。

3　黒褐色(Hue10YR2/2)土…ややしまりあり。あまり粘性なし。炭化物や多量の白色・黄橙色のパミス（φ５～30mm）を含む。

図52　ＳＺ１実測図

ＳＺ１は遺構埋土から弥生時代中期に帰属する土器片が多く出土したことから、同時期に帰属すると判断した。ただし、出土した遺物の中には、前述した**ＳＡ２**と同様に、弥生土器と併せて縄文土器や石器遺物等が含まれていたが、**ＳＺ１**が遺物包含層を掘り込こんだことによる混入や周囲からの流れ込み等の可能性があると考えた。ここでは、**ＳＺ１**の埋土から出土した弥生土器（18点）だけでなく、同時に出土した縄文土器５点、石器16点を併せて図化した。

縄文土器（図53　366～370）

366・367はやや外傾する深鉢の口縁部である。**366**の口縁部内面には横位に１条の沈線文が廻ると考える。**367**の外面にはわずかに突出する１条の突帯文が施されている。**368～370**は深鉢の胴部である。**368**の内面にはナデ、外面には撚糸文が認められる。**369**の外面には縦位と横位に連なる「工」の字状の貼付隆起突帯があり、その間に半裁竹管状工具による２条の沈線文が施されている。**370**の外面には横位に３条の貼付隆起突帯が施されており、**369**と同様にその間には半裁竹管状工具による２条の沈線文が施されている。**369・370**ともに内面はナデ調整である。

弥生土器（図53　371～387）

371～373はほぼ直口する甕の口縁部である。**371**の口唇部外面はあまり突出せず、刻目は認められない。口縁直下には断面三角形の１条の刻目突帯を有する。内面はナデ、外面は横位のナデ・斜位のハケ目調整が認められ、煤が付着している。**372**は口唇部外面を小さく摘み出し突出させて、口縁直下には２条の刻目貼付突帯を有する。内面は横位のナデ、外面は横位のナデ・斜位のハケ目調整が認められる。**373**は口縁外面に刻目のある断面台形状の貼付突帯が施され、その直下に１条の貼付刻目突帯を有する。内面はナデ、外面は横位のナデ調整が認められる。**374～379**はＬ字状である甕の口縁部である。口縁部の断面は**374・375・377**が三角形状、**376・378・379**は口唇部が凹む台形状である。**374・375**の内・外面にはハケ目、また突帯直下の外面には指頭痕が認められる。**376**は外傾した口縁部で、推定口径は約19.9cmである。口縁部内面には指押さえが認められる。**379**は胴部から内傾する口縁部である。

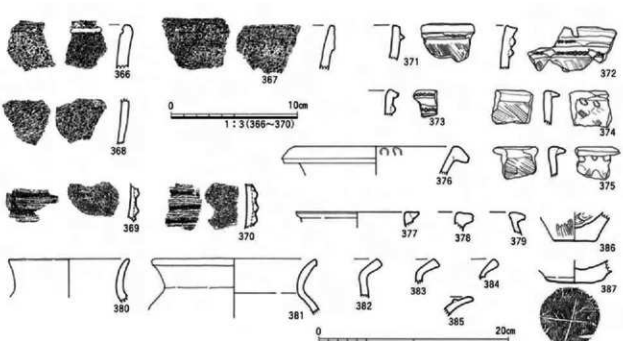


図53　ＳＺ１出土遺物実測図（1）

380は頸部から緩やかに外反する甕の口縁部で、内・外面にはナデ調整が認められる。**381**・**382**は「く」の字状、**383**・**384**はほぼ逆L字状近くまで外反している甕の口縁部である。**381**の内・外面は横位のナデ調整で、口唇部には横位のナデ調整による突帯部が認められる。**382**の内面はナデ、外面はハケ目の上からナデ消しが施され、指頭痕も認められる。**383**・**384**はどちらも内・外面ともにナデ調整が認められる。**382**～**384**の口唇部はやや肥厚している。**386**・**387**は甕の底部である。**386**の内面にはナデ・指押さえによる調整が認められ、煤が付着している。外面にはミガキ調整が認められる。**387**の底外面はその一部が黒色に変化しており、ナデ調整の上から明瞭な十字状の線刻が施してある。**385**は壺の口縁部である。内・外面ともにナデ調整が認められ、内面には1条の突帯が貼り付けられている。

石器（図54・55　388～400）

388はガラス質安山岩製の石鏃である。片方の脚部を欠損しているが、平面形態は二等辺三角形で、基部形態が凹基式である。凹基の状態はわずかに内湾するタイプと考える。**389**はチャート製の「用途不明石器」である。石鏃のように細かい剥離調整が施されている。**390**は黒灰色のチャート製の石匙である。横型で両面に丁寧な調整が施されている。刃部とつまみ部が左右非対称である。**391**・**392**は剥片である。どちらとも辺縁には連続する剥離調整が施されている。石材はいずれもホルンフェルスである。**393**はほ

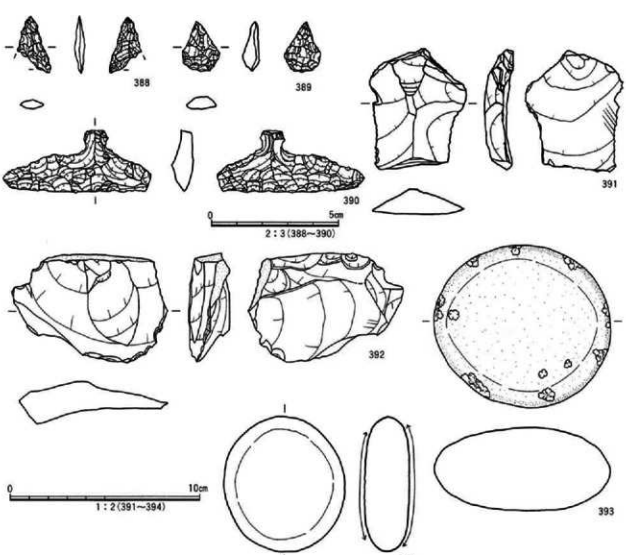


図54　ＳＺ１出土遺物実測図（2）

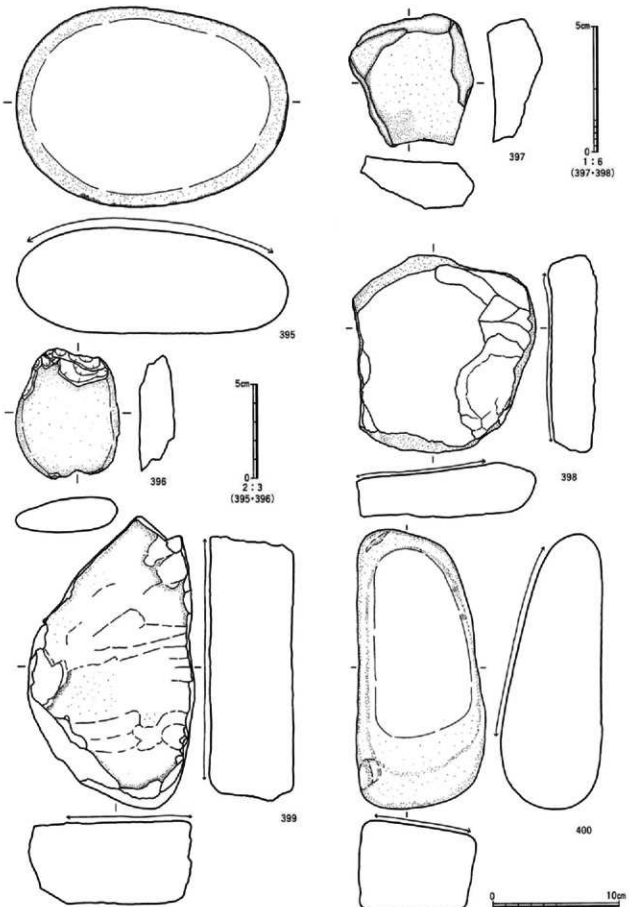


図55　ＳＺ１出土遺物実測図（3）

ぼ全周縁に敲打痕が残る尾鈴山酸性岩類製の敲石である。**394**・**395**は磨石である。平面形態は**394**が円形、**395**が楕円形を呈し、どちらも断面形は扁平である。磨痕は**394**には表裏両面、**395**には片表面のみに認められる。石材については、**394**は尾鈴山酸性岩類、**395**は砂岩である。**396**は砂岩製の石錘である。一部破損を受けているが、長軸方向の打ち欠きが施されている。**397**～**399**はどれも尾鈴山酸性岩類製の台石である。**398**は**ＳＺ１**の床面直上で検出した。表面には磨痕が認められる。(図52参照) **400**は砂岩製の砥石である。表裏面ともに擦痕が認められる。

iii) 弥生土器集中部 (図56 371～387)

グリッド**Ｃ２**付近（Ⅲ層）において、弥生時代中期の土器小片が比較的集中して出土する範囲（約1.5ｍ×３ｍ）を確認した。(図24参照) しかし、トレンチを掘り、土層断面等の精査を行ったが、遺構として認めるまでには至らなかった。そこで、この弥生土器小片が集中した範囲を「弥生土器集中部」として、出土遺物の取り上げを行った。ここでは、そのうち弥生土器７点、石器１点を図化した。

401～**403**は、口唇部に刻目が施され、口縁部の下に横位の貼付刻目突帯を有する甕の一群である。口縁部は**401**・**402**がほぼ直立、**403**はやや外傾している。口縁部の刻目貼付突帯の断面形は、**401**・**402**は三角形状、**403**は台形状である。いずれも内・外面ともにナデ調整が施されている。また、**402**の外面には不明瞭であるが、ハケ目調整が認められ、煤が付着している。**404**・**405**は、口唇部の端部が凹むＬ字状の口縁部を有する甕の一群である。口縁部の断面形はどちらもほぼ台形状である。**404**は欠損している１条の貼付突帯が確認できる。**406**・**407**はどちらも壺の胴部のようである。**406**は横位に３条の貼付突帯を有する。内面には斜位のハケ目調整が認められる。**407**の外面には摘み出しによる３条の突帯があり、その直下には横位の櫛描波状文が施されている。**408**は尾鈴山酸性岩類の剥片である。片側縁部に剥離痕が認められる。

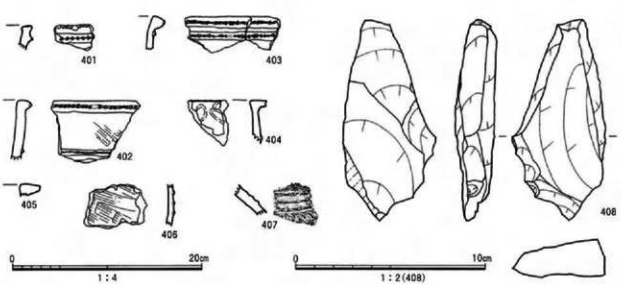


図56　弥生土器集中部出土遺物実測図

2　遺物包含層出土の遺物

ｉ）土器

遺物包含層（Ⅱ～Ⅲ層）からは多くの弥生土器が他の時代のものと混在して出土した。出土した弥生土器は小片のものが非常に多く、接合作業によって器形が分かる程度までに復元できたものはあまりなかった。しかし、その形態や文様からすると、**ＳＡ２**や**ＳＺ１**と同時期である弥生時代中期に帰属するものが多かった。ただし、先述した他の遺物同様に、調査区より高位の場所からの流れ込み等で原位置からの出土ではない可能性が高いと考える。

ここでは、出土した弥生土器片を器種と部位を主な着眼点としながらⅠ～Ⅲ類に分類を行った。以下には分類の基準と根拠を示し、特徴のある遺物についてのみ若干の説明を行う。なお、個々の詳細な情報については、弥生土器観察表（表７～10）を参照してもらいたい。

甕

Ⅰ類：Ｌ字状の口縁部を有さない一群である。（図57　409～428）

さらに、口縁の形状等によってＡ～Ｄに細分した。

Ａ　口唇部外面を摘み出して突出させ、刻目を施しているもの（409～412・415・419・420・422～424）

それぞれの口縁部は、**409**～**412**・**415**がやや内傾ぎみ、**419**は外傾、**420**・**422**は外反ぎみ、**423**は内傾しながら立ち上がっている。**409**～**412**・**419**・**422**の口縁部上端には凹みが認められ、**409**・**411**・**412**・**420**・**423**は２条、**410**・**419**・**422**は１条の貼付刻目突帯を有する。**409**には刻目突帯の直下に貫通する１個の穿孔も施されている。**415**の口縁部上端には凹みが認められず、１条の貼付刻目突帯を有する。**420**も口縁部上端には凹みが認められないが、口唇部の内・外面に刻目が認められる。口縁直下には２条の貼付刻目突帯を有する。**424**は口縁直下に貼付刻目突帯は認められない。外面には不定方向のハケ目調整が認められ、煤が付着している。この類は下城式系土器に相当すると考える。

Ｂ　口唇部外面をほとんど突出させず、刻目を施しているもの（413・416・421・428）

それぞれの口縁部は、**413**がやや内傾ぎみ、**416**はほぼ直立、**421**・**428**やや外反ぎみである。**413**の口縁部上端には凹みが認められ、２条の貼付刻目突帯を有する。**416**の口縁部上端には凹みは認められず、１条の貼付刻目突帯を有する。**421**は１条の貼付刻目突帯を有し、その直下には斜位のハケ目が認められる。**428**は口唇部にわずかな刻目と１条の貼付刻目突帯を有する。内面はナデ、外面はハケ目調整が認められ、煤が付着している。

Ｃ　口唇部外面をほとんど突出させず、刻目を施していないもの（414・417・418・425）

417には刻目が認められず、１条の貼付突帯を有する。**414**・**418**は口縁直下に１条、**425**は２条の貼付刻目突帯を有する。

Ｄ　口縁が「く」の字状に外反して、端部がやや肥厚するもの（426・427）

426は外反する口縁下に１条の貼付刻目突帯を有する。口縁部内面には指頭痕が認められ、内面全体に煤が付着している。外面にはハケ目調整が認められる。**427**は１条の貼付刻目突帯を有し、その直上にわずかな凹みが認められる。中溝式系土器に相当すると考える。

Ⅱ類：Ｌ字状の口縁部を有する一群である。（図57・58　429～446）

さらに、その口縁部の断面形状によってＡ～Ｃに細分した。

A　台形状であるもの（429～437）

429～432の口唇部に刻目が認められ、いずれもその直下に１条の貼付刻目突帯を有する。429の内面はナデ、外面はナデ・工具によるナデが施されている。430は口唇部の内面にも刻目があり、内面には横位のハケ目、外面には横位のナデ・斜位のハケ目が認められる。431の内面は横位のナデ・指押さえ、外面は横位のナデ・ハケ目が施されている。432の内面はナデ、外面には横位のナデ・ハケ目が施されている。433～434の口唇部には凹みが認められる。433は他と比べると口縁突出部が小さく、内面には指押さえ痕が認められる。436の胴部には横位に３条の貼付突帯が貼り付けられている。437は436と同類系土器と考える。

B　長方形状であるもの（438～440）

438～440の口唇部には凹みが認められる。440の胴部には３条の貼付突帯を有する。

C　三角形状であるもの（441～446）

441の口唇部には刻目が施され、内面には横位のナデ・斜位のハケ目、外面には線刻や工具痕が認められ、煤も付着している。442の口縁部の断面は他より鋭く尖った三角形である。口唇部に刻目があり、その直下に１条の貼付刻目突帯を有する。内面にはミガキ・指頭痕、外面にはハケ目調整が認められる。443の内・外面にはハケ目調整が認められる。446の口径は約45cmと推定され、口縁部の直下に１条、胴部に２条の貼付刻目突帯が貼り付けられている。内面にはハケ目・指頭痕、外面には斜・縦位のハケ目が認められる。

Ⅲ類：頸部から外反している一群である。（図58　447・448）

447の内面には横位のナデ、外面には縦位のハケ目が認められる。口縁直下には１条の刻目のない貼付突帯が貼り付けられている。448の口縁部は欠損しているが、頸部はほぼ直角に折れ曲がっている。

次に、甕などの底部をまとめ、その形態によってA～Cに細分した。（図58　449～461）

A　平底であるもの（449～456）

449・454・456は端部が張り出さないものである。449・451・453・454は直線的に、450はやや膨らみながら、452・455・456は直立後にやや外反しながら胴部へ立ち上がるタイプである。454の器壁は比較的厚く、底外面には形成時に付いたと考えられる線状圧痕が認められる。455は端部が少し張り出している。外面には縦位のハケ目調整が認められる。456の外面には横位の指ナデの調整が認められる。

B　脚台状の底部であるもの（457・458）

457は内・外面ともにハケ目の上にナデ消しが認められ、内面の一部は黒色に変化している。外面には明瞭な指頭痕が認められる。458の外面には横位の貫通した穿孔が施されている。

C　上げ底で端部が張り出さないもの（459～461）

459の外面には植物組織、内部には種子圧痕らしきものが認められる。460の内面にはハケ目の上からナデ、外面にはナデ調整が認められる。461の内面にはナデ、外面には板状工具によるナデ調整が認められる。

次に、壺・高坏など甕以外の土器片をまとめた。（図58　462～465）

462・463ともに壺の頸部である。462の内面にはナデ・ハケ目、外面にはナデ・ミガキ、463の内・外面はともにナデ調整が認められる。464は中空の脚部に円板状の粘土を充填して形成された際に生じた粘

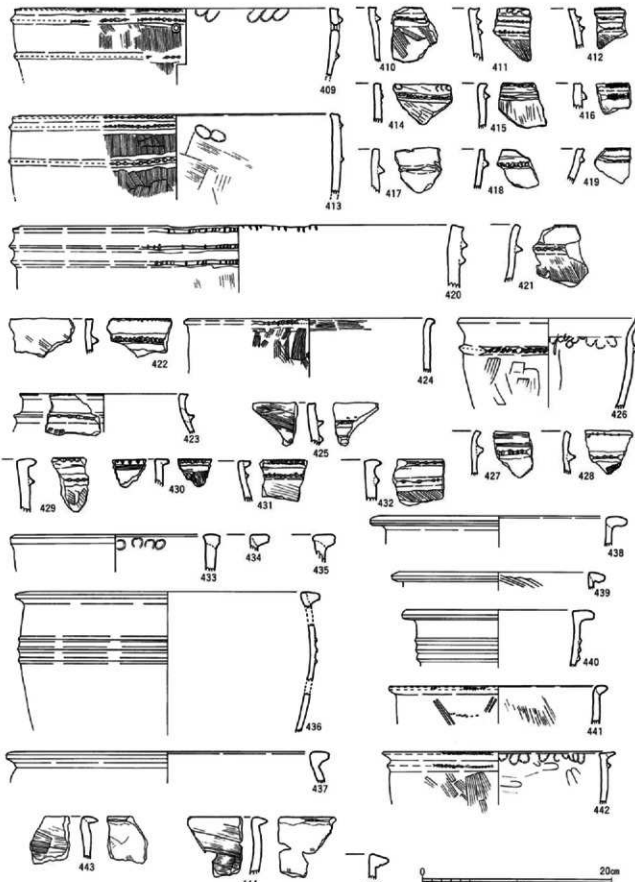


図57　遺物包含層出土遺物実測図（12）

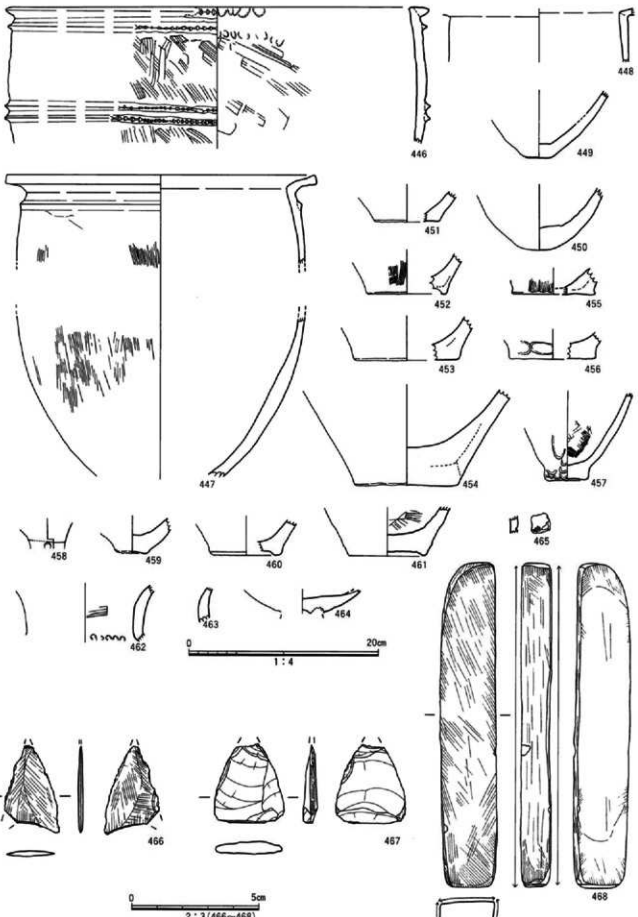


図58　遺物包含層出土遺物実測図（13）

土の継ぎ目や凹部が残る高坏の杯部である。外面には横位のナデ調整が認められる。**465**の器種・部位は小片であるため不明であるが、明瞭な種子圧痕が認められる。

ii）石器遺物（図58　466～468）

466は緑色凝灰岩製の無茎の磨製石鏃で、基部は凹基式である。**467**は緑色凝灰岩製の磨製石鏃の未完成品と考える。どちらも先端部は欠損している。**468**は砥石である。天草産の陶石製であり、その形状から大陸系磨製石斧からの転用と考える。

第５節　その他の時代の遺物

ここでは、調査区内の遺物包含層等から出土した縄文時代・弥生時代以外の遺物をまとめて掲載する。まず、**469**～**472**はその形状と石材の特徴から旧石器時代に帰属するものと考える。**469**・**470**はホルンフェルス、**471**は珪質頁岩、**472**は流紋岩製の剥片であり、どちらの側辺部にも剥離痕が認められる。まず、**473**～**476**は古墳時代に帰属する土師皿の底部片である。４点とも内・外面に丁寧な回転ナデが認められる。またどれも未図化であるが、調査区の北西域の盛り土中から遺物包含層（Ⅱ～Ⅲ層）で出土していない須恵器の底部小片３点、遺物包含層（グリッドＢ１Ⅲ層）からは近世に帰属すると考えられる石英製の火打ち石１点が出土した。

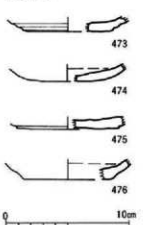


図60　その他の時代の出土遺物実測図（2）

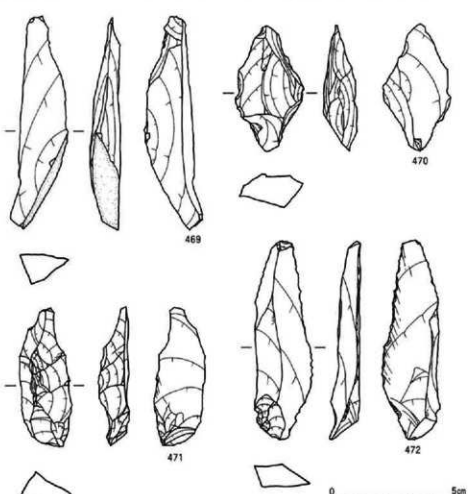


図59　その他の時代の出土遺物実測図（1）

第6節　まとめ

本調査では、縄文時代後期及び弥生時代中期の遺構を検出した。また、地形的要因による高位置からの調査区内への流れ込みの可能性が高いと考えられるが、狭小な調査区でありながらも各遺構や遺物包含層から多種多様の土器片や石器類が多く出土した。また、旧石器時代や古墳時代、近世に帰属すると判断できる遺物も少量ではあるが出土した。さらに、何らかの原因で混入した可能性が高いが、加速器質量分析法（ＡＭＳ）による放射性炭素年代測定の結果、**ＳＡ１**埋土中では750±25年ＢＰ（２σの暦年代でＡＤ1220～1285年）、**ＳＣ１**の埋土中では755±20年ＢＰ（ＡＤ1225～1285年）というほぼ同じ年代値の炭化材が出土した。これらのことは、当該地域の歴史を解明する上で、貴重な資料となり得ると考える。以下では、今回の赤石遺跡における調査結果を、縄文時代及び弥生時代で若干の考察を加えてながら整理することでまとめとしたい。

1　縄文時代

縄文時代では、後期の竪穴住居（**ＳＡ１**）１軒と中期～後期の土坑（**ＳＣ１～ＳＣ11**）11基（表４参照）を検出した。また、中期～後期の土器や石器が多く出土した。また、少量であるが、早期（山形押型文など）や晩期（組織痕文など）も少量であるが出土した。以上のことから、この調査区及び周辺では縄文時代の生活が早い時期から始まり、長期にわたり継続していたであろうと推測する。

特に、縄文時代における赤石遺跡の特徴としては、①船元式・春日式系土器や貼付突帯間に工具による沈線文・連続爪形文が施された縄文時代中期に位置する土器の出土、②後期に帰属する竪穴住居（**ＳＡ１**）、③器種・石材ともに多様性に富む石器類の出土が挙げられる。

表４　土坑計測一覧表（＊は推定値である。）

ＳＣ　№	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	形状比	主な出土遺物	備　考
ＳＣ　1	＊2.70	1.24	1.90	2.18	深鉢	実測図（1/20）掲載
ＳＣ　2	2.10	0.96	0.54	2.19	砥石・深鉢	実測図（1/20）掲載
ＳＣ　3	1.39	1.18	0.24	1.18	深鉢	実測図（1/20）掲載
ＳＣ　4	＊2.20	＊2.00	0.19	＊1.10	剥片・石錘・深鉢	実測図（1/20）掲載
ＳＣ　5	＊0.80	＊0.60	0.16	＊1.43	石核	自然凹み可能性もあり
ＳＣ　6	＊0.60	＊0.50	0.15	＊1.20		自然凹み可能性もあり
ＳＣ　7	＊0.90	＊0.70	0.15	＊1.29	剥片	自然凹み可能性もあり
ＳＣ　8	0.38	0.36	0.10	1.29		自然凹み可能性もあり
ＳＣ　9	1.78	＊1.66	0.24	＊1.07	石錘・磨石・深鉢	実測図（1/20）掲載
ＳＣ　10	1.84	1.50	0.30	1.23	深鉢	実測図（1/20）掲載
ＳＣ　11	1.58	＊1.50	0.34	＊1.05	石錐・台石・深鉢	実測図（1/20）掲載

（＊は推定値である。）

①については、縄文時代中期に帰属する竪穴住居など集落本体を形成する明確な遺構は検出されていないが、中期の土器が比較的集中していている土坑（ＳＣ３など）が存在することから当該期に人々の生活がこの調査区内で展開されていた可能性が考えられる。また、遺物包含層から出土した他の縄文時代中期の土器片は非常に小片ではあったが、激しく表面の摩耗を受けていないことから、本調査区近くに集落本体が存在していたことの可能性も何わせる。今後は、本調査区周辺だけでなく、近隣の遺跡や船元・春日式土器を多く出土して、縄文時代中期の集落として評価された下耳切第３遺跡（高鍋町）などと関連をさらに考えて必要がある。

②については、竪穴式住居跡（ＳＡ１）１軒を検出したが、縄文時代後期・晩期の竪穴住居を検出している近隣の赤石・天神本遺跡との関連を考え、川南町内に広がる丘陵辺縁部での縄文人の生活ぶりを総括していく必要がある。

③については、本調査区から出土した石器は約500点であった。製品と剥片・砕片との接合が認められなかったため製品製作作業の直接的な復元はできていない。最も多く出土した石器類は剥片（315点）であり、その剥片除く石器を器種別に分類すると、漁労具としての石錘（33点）、狩猟具や武器としての打製石鏃（16点）、土木農耕具としての打製石斧（28点）、食材や道具等の加工具としての敲石・磨石類（37点）・台石（10点）・石匙（３点）・凹石（２点）・石皿（１点）などであった。（図61参照）また、すべての石器類を石材別に分類すると、ホルンフェルス（約49.7%）、尾鈴山酸性岩類（約12.2%）、砂岩（12.1%）の順であった。（図62参照）次いで、本遺跡近隣では採取できない黒曜石（8.5%）・ガラス質安山岩（11.9%）が出土した。特に、姫島産黒曜石については、石鏃・剥片・チップなど多様な形態で出土した。他の針尾産・腰岳産黒曜石と比較しても高い出土率であった。

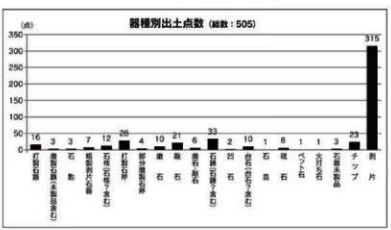


図61　石器類器種別出土点数

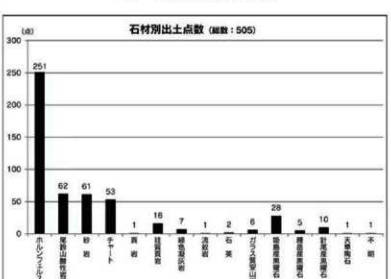


図62　石器類石材別出土点数

以上のように本調査区から出土した石器については、器種・石材ともに多様性に富むという特徴が見られた。これらのことにより、平田川と篠原川という２つの河川に挟まれた南東向きに派生した丘陵辺

縁部に立地した赤石遺跡では、縄文時代から近くの露頭や川原などから比較的容易に採取できるホルンフェルスや尾鈴山酸性岩、砂岩などを巧みに利用した石器を用い、ドングリなどの植物性食材や獣や魚などの動物タンパク質の獲得を営む多様な食生活が送られていたと推測できる。また、遠方にある各石材産地からの石材や製品の搬入等といった直接的な交流だけに限定することはできないが、何らかの交流があった可能性は十分に推し量ることができる。

2　弥生時代

弥生時代では、竪穴住居（**ＳＡ２**）１軒と不明遺構（**ＳＺ１**）１基を検出し、各遺構埋土や遺物包含層から弥中期の土器、石器が出土した。竪穴式住居跡**ＳＡ２**は、調査区外に広がる遺構で、すべてを検出することはできなかったが、おそらく床面全周にベッド状の段（幅0.8～1.0m，床面からの高さ0.2m）を伴う長方形プラン（約６ｍ×７ｍ）をもつと考える。不明遺構**ＳＺ１**は、ほぼ円形プラン（約4.0m×4.5m）を検出することができたが、その性質は最終的に判断することはできなかった。どちらとも遺構埋土から出土した土器に下城式系土器などを比較的多く含むことから、中期に帰属する遺構であると考えた。さらに、加速器質量分析法（ＡＭＳ）による放射性炭素年代測定の結果（**ＳＡ２**の炭化材では2165±25年ＢＰ（ＢＣ360～270，　260～150，　140～110年）、**ＳＺ１**の炭化種実では2220±25年ＢＰ（ＢＣ390～340，　330～200年）の年代値）によると、２つの遺構は比較的近い時期に利用されていた可能性が高い。遺物包含層（Ⅱ～Ⅲ層）から出土した弥生土器を見ると、中期に位置する下城式系土器・口縁部に断面三角形貼付突帯を有する土器が比較的多く、わずかに後期初頭に位置する在地系の中溝式系土器などが含まれていた。なお、石器については、緑色凝灰岩製の磨製石鏃２点と天草産の陶石製で大陸系磨製石斧を転用したであろうと考える砥石１点が出土した。

以上のことにより、弥生時代の赤石遺跡は、竹笹類をはじめ、ススキ属やチガヤ属なども生育する比較的開かれた環境下にあり、瀬戸内地方をはじめ、他地域の文化の影響を何らかの形で受けながら、近隣に分布する照葉樹林から豊かな植物性食材や動物タンパク質などを獲得していた人々の生活が推測できる。

今後は下城式や逆Ｌ字口縁をもつ甕を検出した大内原遺跡、後期の竪穴住居と下城式土器を検出した赤石・天神本第１遺跡や中ノ迫第１遺跡など近隣の遺跡との関係を分析し、弥生時代における尾鈴山系から派生する丘陵辺縁地で展開されていた人々の生活の広がりの復元をしていく必要がある。

引 用 ・ 参 考 文 献

石川悦雄1984「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描（Ｍｋ.Ⅱ）」『宮崎考古』第９号　宮崎考古学会

大阪府弥生文化博物館2007『日向・薩摩・大隅の原像　南九州の弥生文化』大阪府立弥生文化博物館図録87

金丸武司2004「宮崎における縄文時代早期前半期の土器群－別府原式土器の設定－」『宮崎考古』第19号　宮崎考古学会

川南町教育委員会1983『川南町史』

1983『川南町の埋蔵文化財　遺跡詳細分布調査報告書』

鹿児島県埋蔵文化財センター 2007『上水流遺跡　縄文時代中期後半から弥生時代編』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第113集

木崎康弘1998「中原式土器について」『九州縄文土器編年の諸問題』九州縄文研究会貿易陶磁研究会

桑畑光博1997「春日式土器二例」『宮崎考古』第15号　宮崎考古学会

2000「中溝式土器の再検討－宮崎県における弥生時代中期後半から後期前半にかけての土器編年にむけて－」『第39回宮崎考古学会例会資料』

新東晃一1989『早期九州貝殻文土器』『縄文土器大観１』小学館

宮崎県埋蔵文化財センター 2000『右葛ケ迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第21集

2002『蔵座村遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第53集

2005『東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅴ』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第111集

2006『虚空蔵免遺跡　赤石・天神本遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第122集

2006『天神本第２遺跡　大内原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第123集

2006『下耳切遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第125集

2006『中ノ迫第３遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第144集

2007『中ノ迫第１遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第142集

2008『中ノ迫第２遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第167集

2008『市納上第２遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第170集

表5　縄文土器観察表（1）

掲載No	実測No	遺物取上げNo	種別	器種	部位	出土位置・層	推定法量(cm)	手法・調整・文様等の特徴 内面	手法・調整・文様等の特徴 外面	色調 内面	色調 外面	焼成	胎土中に含まれる粒の特徴	備考
100	8	2	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA1 埋土	●	ナデ（斜・横位）	撚糸文→凹線の短直線文 沈線文	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	2mm以下の灰白・浅黄橙・褐灰色粒	口唇部：横ナデ キャリパー状口縁
101	9	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA1a 埋土	●	ナデ（横位）	U字状の沈線文	にぶい橙	にぶい橙・灰褐	良好	2mm以下の灰白・明褐灰・黒褐色粒	口唇部：凹み キャリパー状口縁部貼付突帯（3条）
102	6	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA1b 埋土	●	ナデ（横位）	ナデ（斜位）	にぶい褐	橙	良好	2~3mmの茶色粒，2mm以下の灰・白色粒，微細な光沢黒色粒	
103	5	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA1b 埋土	●	ナデ（横位）	ナデ（斜位）	にぶい黄褐	にぶい橙	良好	1mm以下の黒・灰・乳白色粒，微細な光沢透明粒	
104	7	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA1a 埋土	●	ナデ（斜・横位）	ナデ（斜位）	黒褐	灰黄・にぶい黄褐	良好	3mm以下の黒・灰・茶・乳白色粒	
105	4	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA1a 埋土	●	ナデ	ナデ（斜・横位）	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	2mm以下の灰白・灰色粒	内面：沈線（1条） 外面：煤
106	2	8	縄文 土器	深鉢	口縁～頸・胴部	SA1 埋土	口径 27.2	ナデ	ナデ（斜位・横位） 沈線（横位 1条）	にぶい褐	にぶい褐・灰褐	良好	3mm以下の灰白・明褐灰・褐灰・光沢黒色粒	波状口縁 外面：黒色化
107	1	11	縄文 土器	深鉢	口縁～胴部	SA1 埋土	口径 30.2	ナデ（風化）	ナデ（斜・横位）	橙・にぶい橙	灰褐・にぶい橙	良好	0.5~2mmの灰白・浅黄橙・褐・褐灰色粒	外面：煤
108	3	20	縄文 土器	深鉢	口縁～胴部	SA1 埋土	●	ナデ	ナデ（斜・横位）	にぶい褐	にぶい褐	良好	2mm以下の灰白・明褐灰・浅黄橙・褐灰・光沢透明粒	
109	10	一括	縄文 土器	浅鉢	口縁部	SA1d 埋土	●	ミガキ（横位）	ミガキ(横位)→沈線文(3条・横位)	褐灰	にぶい橙	良好	1mm以下の灰白・褐灰・光沢黒色粒	
114	104	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SC1 埋土	●	丁寧なナデ（斜・横位）	丁寧なナデ（斜・横位）	にぶい褐	にぶい黄橙	良好	2mm大の褐・灰色粒、1mmの淡黄・褐・灰色粒	波状口縁部 内面：沈線（1条） 外面：煤
115	106	一括	縄文 土器	深鉢	頸部	SC2 埋土	●	ナデ（横位）工具による沈線文	縄文？ナデ（横位）	橙	橙	良好	3mm以下の灰白色粒，2mm以下の黒色粒，1.5mm以下の赤褐色粒	内面：刻目貼付突帯（1条）
117	107	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SC3 埋土	●	縄文	縄文→棒状工具による連刺突文	にぶい黄橙	浅黄橙	良好	1mm以下の乳白・橙色粒	
118	109	一括	縄文 土器	深鉢	胴部	SC3 埋土	●	縄文	縄文→押引文・浅沈線文（2~3条 斜・横位）	にぶい橙	橙	良好	1mm以下の橙・乳白色粒	内・外面：黒斑？
119	110	7	縄文 土器	深鉢	胴部	SC3 埋土	●	工具によるナデ？	貼付突帯間に半截竹管状工具による沈線文・連続爪形文	橙	橙	良好	1mmの白・褐・橙色粒	外面：貼付突帯
120	111	8	縄文 土器	深鉢	胴部	SC3 埋土	●	工具によるナデ？	貼付突帯間に半截竹管状工具による沈線文・連続爪形文	橙	赤褐	良好	1mmの白・褐・橙色粒	外面：貼付突帯 穿孔（1個）あり
121	112	4	縄文 土器	深鉢	胴部	SC3 埋土	●	工具によるナデ	貼付突帯間に半截竹管状工具による沈線文・連続爪形文	橙	明褐	良好	1mmの白・褐・橙色粒	外面：貼付突帯
122	113	2・3・5・6	縄文 土器	深鉢	胴部	SC3 埋土	●	工具によるナデ？ 条痕文	工具によるナデ？ 指ナデ 指押さえ	黄褐	褐	良好	3mmの灰・白・橙色粒	
123	115	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SC4 埋土	●	条痕文？（風化）	ナデ→沈線文(4条)	にぶい橙	にぶい橙	良好	2mm以下の灰白・浅黄色粒、微細な光沢透明粒	
124	114	5・6	縄文 土器	深鉢	口縁部	SC4 埋土	●	工具によるナデ？ 条痕文	工具によるナデ？ 条痕文	明赤褐	明褐	良好	微細な白・橙色粒	波状口縁？貼付突帯（4条） 内・外面：黒色化？
125	116	7	縄文 土器	深鉢	胴部	SC4 埋土	●	ナデ 工具痕？（横位）	縄文	黄褐	にぶい黄橙	良好	3mm以下の灰白粒	外面：煤
126	211	一括	縄文 土器	深鉢	胴部	SC4 埋土	●	ナデ	組織痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	3mm以下の灰白・淡黄色粒	
129	120	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SC9 埋土	●	ナデ	ナデ 沈線文（3条）	にぶい褐	にぶい褐	良好	4mmの乳白色粒，1mm以下の黒褐・光沢黒色粒	口唇部：沈線文 キャリパー状口縁
130	119	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SC9 埋土	●	ナデ	棒状工具による波状文	にぶい黄褐・黒褐	にぶい黄褐・黒褐	良好	1mm以下の茶褐・灰褐色粒	波状口縁 口唇部：刻目（不明瞭）
131	121	一括	縄文 土器	深鉢	頸部	SC9 埋土	●	ナデ	縄文	褐	暗灰黄	良好	3mmの灰褐色粒，3mm以下の褐・乳白・茶褐色粒	内面：煤
132	122	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SC10 埋土	●	工具によるナデ？	指ナデ？	明黄褐	橙	良好	1mmの灰白・光沢透明粒	内・外面：煤 口唇部外面：微突帯文
133	123	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SC10 埋土	●	工具によるナデ？	指ナデ？	赤	橙	良好	1mm以下の橙・光沢透明粒	口縁部外面：突帯文
134	124	一括	縄文 土器	深鉢	胴部	SC10 埋土	●	指ナデ？指押さえ	縄文	暗褐	暗褐	良好	1mm以下の褐・光沢透明粒	穿孔（1個 貫通）あり
135	212	一括	縄文 土器	深鉢	胴部	SC10 埋土	●	ナデ	組織痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	4mm以下の黄灰色粒，2mm以下の淡黄色粒	外面：煤
136	125	一括	縄文 土器	深鉢	底部	SC10 埋土	底径 6.5	不明（風化）	指ナデ？	橙	橙	良好	3mm以下の淡黄粒	摩耗大
137	127	一括	縄文 土器	深鉢	胴部	SC11 埋土	●	ナデ	貼付突帯間に工具による沈線文・連続爪形文	浅黄橙	黄橙	良好	2mm以下の乳白色粒	
138	126	一括	縄文 土器	深鉢	胴部	SC11 埋土	●	ナデ（横位）	撚糸文（縦位）	橙	にぶい橙	良好	1mm以下の乳白色粒	外面：煤？
139	128	3・5	縄文 土器	深鉢	頸部	SC11 埋土	●	板状工具？によるナデ	撚糸文	にぶい黄橙・にぶい黄褐	にぶい黄褐・灰黄褐	良好	2mm以下の淡黄・褐・乳白色粒，微細な光沢透明・金色粒	
150	142	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	C3 Ⅲ	口径 14.2	ナデ（横位）	縄文→沈線文(3条・横位)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	0.5mm以下の乳白色粒	キャリパー状口縁
151	148	29	縄文 土器	深鉢	頸部～胴部	C3 Ⅲ	●	ナデ	縄文？→沈線文	にぶい黒褐	にぶい赤褐	良好	4mm以下の灰白色粒，1mm以下の茶褐・灰褐・乳白色粒	キャリパー状口縁
152	152	一括	縄文 土器	深鉢	胴部	B3 Ⅲ	●	ナデ	縄文→沈線文	黄褐	にぶい橙	良好	3mm以下の淡黄色粒	
153	155	一括	縄文 土器	深鉢	胴部	T1 Ⅲ	●	ナデ	縄文（縦位）→押引文（横位）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	3mm以下の灰白色粒，1mm以下の赤褐色粒	
154	131	79・97・99・100	縄文 土器	深鉢	口縁～頸部	B2 Ⅱ	口径 18.4	ナデ（風化）	太凹線文による突帯（3条） 波状突帯（縦位） ナデ	暗褐	明赤褐	良好	3mm以下の白・橙・にぶい黄橙色粒	キャリパー状口縁
155	132	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	T8 －	●	ナデ	沈線文（2条）	明赤褐	橙	良好	3mm以下の灰白色粒	キャリパー状口縁
156	136	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	T3 Ⅱ	●	ハケ目？（斜位）	沈線文（3条）	明黄褐	明黄褐	良好	3mm以下の茶褐色粒，2mmの乳白色粒，1mm以下の茶褐・乳白色粒	キャリパー状口縁
157	138	30	縄文 土器	深鉢	口縁部	C3 Ⅲ	●	ナデ	沈線文（3条）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	1mm以下の灰白・淡黄色粒	キャリパー状口縁 外面：煤 内面：炭化物
158	139	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	D3 Ⅲ	●	ナデ	沈線文（2条）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	1mm以下の灰白粒	キャリパー状口縁 内面：黒色化 外面：煤
159	140	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	B3 Ⅲ	●	ナデ	沈線文（1条＋渦巻状）	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	4mm以下の褐灰色粒，3mm以下の灰白色粒，微細な光沢粒	キャリパー状口縁
160	143	37	縄文 土器	深鉢	口縁部	C3 Ⅲ	●	横ナデ 連続刺目（縦位）	平行沈線文（4条） ナデ	にぶい褐・褐	にぶい褐	良好	2mm以下の淡黄・灰・灰・褐色粒	キャリパー状口縁
161	141	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	T14E －	口径 15.1	ナデ（斜・横位） 指押さえ	管状工具による連続刺突文	にぶい橙	橙	良好	1mm以下の乳白色粒	口唇部：刻目文→爪形あり キャリパー状口縁 外面：黒色化

表6　縄文土器観察表（2）

掲載No	実測No	遺物取上げNo	種別	器種	部位	出土位置・層	推定法量(cm)	手法・調整・文様等の特徴 内面	手法・調整・文様等の特徴 外面	色調 内面	色調 外面	焼成	胎土中に含まれる粒の特徴	備考
162	135	28	縄文土器	深鉢	口縁部	B3 Ⅱ	●	ナデ（横位）	押引文（横位）	褐	褐	良好	2mm以下の茶褐・灰褐色粒	やや内湾する口縁
163	145	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	C3 Ⅱ	●	縄文による連続押圧文（斜位） ナデ	沈線文（3条）（風化気味）	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好	1～3mmの淡黄・褐・乳白・光沢金色粒	やや内湾する口縁
164	137	29	縄文土器	深鉢	口縁部	C4 Ⅲ	●	ナデ（横位）	沈線文（3条・横位）	明黄褐	明黄褐	良好	3mmの茶褐色粒、2mmの乳白色粒、1mm以下の茶褐・乳白色粒	やや内湾する口縁
165	167	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	D4 Ⅱ	●	ナデ	凹線文（2条）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	1.5mm以下の黒色粒,1mm以下の灰白色粒	やや内湾する口縁
166	133	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	B2 Ⅱ	●	ナデ	沈線文（山形状）	明赤褐	明赤褐	良好	1mm以下の茶褐・灰褐色粒	口唇部：刻目
167	134	3	縄文土器	深鉢	口縁部	D3 Ⅱ	●	指ナデ	ミガキ→沈線文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	2mm以下の茶褐・灰褐・乳白色粒	波状口縁
168	165	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	D3 Ⅲ	●	沈線文（1条） ナデ	沈線文（2条）	にぶい橙	にぶい黄橙・橙	良好	3mm以下のにぶい橙色粒、1mm以下の灰白色粒	
169	151	一括	縄文土器	深鉢	胴部	C3 Ⅱ	●	ナデ	沈線文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	1mm以下の茶褐・灰褐・灰褐色粒	
170	153	75	縄文土器	深鉢	胴部	D4 Ⅲ	●	ナデ	ナデ 貼付突帯部に半截竹管状工具による沈線文 連続爪形文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	4mm以下の灰白色粒	
171	186	39	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	C4 Ⅲ	口径25.4	ナデ	ナデ　ミガキ？	橙	浅黄	良好	2mm以下の乳白色粒	口縁部内面：沈線文（1条） 波状口縁
172	159	35	縄文土器	深鉢	口縁部	D3 Ⅱ	●	丁寧なナデ	ミガキ（風化気味）	にぶい褐	にぶい褐・暗褐	良好	2mm以下の淡黄色粒、灰・褐・光沢透明粒	口縁部内面：細沈線文（1条） 波状口縁　外面：煤
173	160	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	T10W －	●	工具によるナデ→ナデ	工具によるナデ→ナデ	にぶい褐	にぶい褐色	良好	1mmの淡黄・灰色粒	口縁部内面：細沈線文（1条） 波状口縁
174	161	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	T10E	●	ナデ	ナデ（横位）　工具によるナデ（斜位）？	にぶい褐	明褐	良好	1mm以下の淡黄・褐・乳白色粒	口縁部内面：細沈線文（1条） 波状口縁
175	162	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	C4 Ⅱ	●	ナデ	ナデ	赤	赤	良好	2mm以下の淡黄粒	口縁部内面：沈線文（1条）
176	163	51	縄文土器	深鉢	口縁部	B2 Ⅱ	●	工具によるナデ？	工具によるナデ？	橙色	橙色	良好	2mm以下の浅黄橙粒	口縁部内面：沈線文（1条）
177	193	85	縄文土器	深鉢	口縁部	C2 Ⅱ	●	指ナデ	指ナデ	橙	橙	良好	2mm以下の褐灰・灰白・光沢透明粒	貼付突帯
178	191	22	縄文土器	深鉢	口縁部	C1 Ⅲ	●	ミガキ（風化気味）	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	微細な淡黄・褐・透明粒	貼付突帯 穿孔（貫通）あり
179	178	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	C3 Ⅲ	●	貝殻条痕文	貝殻条痕文	にぶい黄褐	にぶい褐	良好	1～2mmの淡黄・灰・褐・光沢黒色粒、微細な光沢透明粒	波状口縁 貼付突帯（2条）
180	195	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	T5 Ⅲ	●	指ナデ	指ナデ 刺突文（未貫通）	明黄褐	橙	良好	3mm以下の褐灰色粒	貼付突帯
181	158	一括	縄文土器	深鉢	胴部	C3 Ⅱ	●	ナデ	ナデ　竹管文？ ハケ目？	にぶい黄橙	浅黄	良好	3mm以下の半透明粒	貼付突帯（1条）
182	144	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	T10W	●	貝殻条痕文	ナデ→縄文による沈線文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好	4mmの褐灰色粒、3mmの淡黄・褐色粒、微細な淡黄・褐・光沢黒色・透明粒	
183	168	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	B3 Ⅲ	●	貝殻条痕文	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	良好	3mm以下の灰褐色粒、1mm以下の灰白色粒	内面・口唇部：煤
184	183	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	B3・C1	口径19.4	丁寧なナデ ミガキ？	条痕文	にぶい褐	にぶい褐	良好	3mm以下の褐色粒、1mm以下の灰色粒、微細な光沢黒色粒	外面：黒色化
185	196	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	D4 Ⅲ	●	ナデ	条痕文（風化気味）	にぶい橙	浅黄橙	良好	1mm以下の光沢粒	
186	203	一括	縄文土器	深鉢	胴部	T2E Ⅱ	●	貝殻条痕文	貝殻条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	4mm以下の茶褐・灰褐色粒、1mm以下の黒褐色粒、微細な光沢黒色粒	
187	169	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	C2	●	工具によるナデ？	工具によるナデ？	オリーブ黒	オリーブ黒	良好	4mm以下の茶褐・黒褐色粒、1mm以下の乳白・黒褐色粒、微細な光沢黒色粒	
188	170	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	T2E Ⅱ	●	工具によるナデ？	工具によるナデ？	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好	1mm以下の乳白・灰褐・茶褐色粒、微細な光沢透明粒	
189	164	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	D3 Ⅲ	●	工具によるナデ？	工具によるナデ？	赤	赤褐色	良好	1mm以下の灰白・光沢透明粒	口唇部：凹み
190	187	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	C2 Ⅲ	●	ナデ	ナデ　工具痕？	黒褐	黒褐	良好	1mm以下の灰褐・乳褐色粒	
191	174	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	T14W	●	工具によるナデ？	工具によるナデ？	黒褐	黒褐	良好	3mm以下の浅黄橙色粒	穿孔（貫通）あり 外面：黒変
192	176	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	C4 Ⅲ	●	工具によるナデ？	工具によるナデ？	暗赤褐	赤褐	良好	3mm以下の褐灰色粒	波状口縁
193	175	39	縄文土器	深鉢	口縁部	B2 Ⅱ	●	ナデ　指押さえ？	工具によるナデ？	明赤褐	橙	良好	2mm以下の灰白粒	
194	179	5	縄文土器	深鉢	口縁部	C4 Ⅱ	●	ナデ（横位）	板状工具によるナデ（横位）	明褐	にぶい黄橙	良好	1mm以下の淡黄・褐・乳白・光沢透明粒、2mmの灰色粒	口唇部：細沈線
195	182	28	縄文土器	深鉢	口縁部	D3 Ⅱ	●	ナデ？（風化気味）	工具によるナデ(斜位）？	赤	赤	良好	1mm以下の灰白・光沢透明粒	外面：黒色化
196	181	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	T2E Ⅱ	●	工具によるナデ？	工具によるナデ？	暗赤褐	暗赤	良好	1mm以下の淡黄・光沢金・黒色粒	外面：黒色化
197	180	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	C3 Ⅱ・Ⅲ	口径20.0	工具によるナデ？	工具によるナデ？	にぶい褐	暗褐	良好	2mm以下の灰白・光沢黒色粒	
198	157	一括	縄文土器	深鉢	胴部	C1 盛土	●	工具によるナデ？（斜位）	山形押型文	赤褐	赤	良好	2mm以下の橙粒	
199	206	一括	縄文土器	深鉢	胴部	B1 Ⅱ	●	指ナデ	撚糸文	にぶい黄褐	明褐	良好	3mm以下の淡黄色粒	
200	207	一括	縄文土器	深鉢	胴部	T14W	●	ナデ（横位）	撚糸文	黄褐	黄褐	良好	1mm以下の乳白・茶褐・灰褐色粒、微細な光沢粒	
201	204	54	縄文土器	深鉢	胴部	C3 Ⅲ	●	指ナデ	撚糸文？	暗褐	明赤褐	良好	4mm以下の淡黄色粒	
202	208	14	縄文土器	深鉢	胴部	C3 Ⅱ	●	指ナデ	撚糸文？	暗赤褐	暗赤褐	良好	2mm以下の褐色粒・微細な光沢透明粒	
203	166	3	縄文土器	深鉢	口縁部	B2 Ⅱ	●	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	2mm以下の灰白色粒	外面：煤
204	184	一括	縄文土器	深鉢	口縁部	D4 Ⅲ	口径19.8	ナデ（横位）	ナデ（横位）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	2mm以下の灰白色粒、微細な光沢黒色粒	内・外面：黒色化

表7　縄文土器観察表（3）

掲載No	実測No	遺物取上げNo	種別	器種	部位	出土位置・層	推定法量(cm)	手法・調整・文様等の特徴 内面	手法・調整・文様等の特徴 外面	色調 内面	色調 外面	焼成	胎土中に含まれる粒の特徴	備考
205	185	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	T8	＊	丁寧なナデ　ミガキ？	丁寧なナデ　ミガキ？	にぶい橙	にぶい橙	良好	3mm以下の灰白・にぶい褐色粒、微細な光沢粒	内・外面：黒色化
206	199	35	縄文 土器	深鉢	頸部	D4　Ⅲ	＊	ミガキ（横位）→ナデ？	ミガキ（斜・横位）	灰黄褐	灰黄褐	良好	2mmの乳白色粒、1mm以下の淡黄・乳白・光沢透明・金色粒	外面：煤
207	201	68	縄文 土器	深鉢	胴部	D4　Ⅲ	＊	ミガキ（斜位）	板状工具によるナデ(斜位)→ミガキ(横位)	褐灰	灰黄褐	良好	1mmの淡黄・褐色粒	
208	200	一括	縄文 土器	深鉢	胴部	T11S	＊	丁寧なナデ	板状工具によるナデ（斜位）→ミガキ（斜位 風化気味）	にぶい黄褐	褐灰	良好	1～2mmの灰・褐・淡黄・乳白色粒	
209	189	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	T8	＊	竹管状工具による連続刺突文　ナデ	ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	良好	微細な淡黄・褐・乳白・透明色粒	
210	190	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	C2　Ⅱ	＊	ナデ	ナデ	明褐	明褐	良好	5mmの褐・灰・乳白・光沢黒色粒、4mmの褐色粒	口縁上端部：竹管状工具による連続刺突文
211	146	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	C4　Ⅲ	＊	ナデ	刺突文	灰黄	灰黄	良好	2mm以下の灰白色粒	
212	156	一括	縄文 土器	深鉢	胴部	B2　Ⅲ	＊	板状工具によるナデ？	刺突文	褐色	明褐色	良好	1mm以下の灰白粒	
213	209	一括	縄文 土器	深鉢	頸部	C3　Ⅱ	＊	ナデ	組織痕	にぶい褐	黒褐	良好	5mmの灰白色粒、2mm以下の淡黄色粒	外面：煤
214	210	一括	縄文 土器	深鉢	胴部	C3　Ⅱ	＊	ナデ	組織痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	3mm以下の灰白色粒、2mm以下の淡黄色粒	
215	213	一括	縄文 土器	深鉢	胴部	T14W	＊	ナデ	組織痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	4mm以下の灰黄色粒、2mm以下の灰白色粒	
216	282	2・60・61・53	縄文 土器	深鉢	胴～底部	D3　Ⅲ	底径7.9	貝殻条痕文（斜位）→ナデ	貝殻条痕文（斜位）→ナデ	明赤褐・黒褐	明赤褐・黒褐	良好	3mm以下の灰・黒褐・にぶい黄橙・褐灰・光沢透明粒	上げ底
217	271	一括	縄文 土器	深鉢	底部	D4・D3　Ⅲ	底径7.5	ナデ　指ナデ	ナデ　指ナデ　指押さえ	にぶい褐	にぶい褐色	良好	1mm以下の浅黄橙・灰白・褐灰・光沢金・光沢黒色粒	上げ底
218	280	38	縄文 土器	深鉢	底部	C4　Ⅲ	底径5.6	ナデ（風化気味）	丁寧なナデ	浅黄・灰黄	にぶい赤褐	良好	3mm以下の灰白粒、にぶい黄橙・褐灰・光沢黒色粒	上げ底
219	277	61	縄文 土器	深鉢	底部	B2　Ⅱ	＊	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	良好	3mm以下の灰・橙・褐灰・淡橙・光沢黒色粒	上げ底　多角形底部？
220	278	一括	縄文 土器	深鉢	底部	C2　Ⅲ	＊	ナデ	ナデ（横位）	にぶい橙	にぶい橙 褐灰	良好	2mm以下のにぶい橙・褐灰・浅黄橙色粒	
221	172	21	縄文 土器	浅鉢	胴部	B3　Ⅱ	口径15.9	不明（風化）	不明（風化）	黒褐	明褐	良好	2mm以下の茶褐・赤褐・灰褐・乳白色・微細な光沢粒	内面：煤
222	173	一括	縄文 土器	浅鉢	口縁～胴部	D3　Ⅲ	口径17.7	ナデ（横位）	ナデ	橙	橙	良好	3mm以下の茶褐・灰褐粒	外面：煤
223	197	縄文	土器 浅鉢	浅鉢	口縁～胴部	C1　盛土	＊	ナデ	ミガキ	橙	赤橙	良好	2mm以下の赤褐色粒、1mm以下の光沢粒	
224	202	一括	縄文 土器	壺	胴部	B3・C3　Ⅱ・Ⅲ	＊	ナデ（風化）	ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好	2mm以下の茶褐・赤褐・黒褐色粒、微細な光沢粒	
225	266	一括	縄文 土器	土器片錘	－	C2　Ⅲ	＊	ナデ	縄文	橙	橙	良好	1mmの淡黄・褐・乳白色粒、3mmの赤褐色粒	
281	22	24・31	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA2a　埋土	＊	ナデ	竹管状の連点文　工具による押引文　ナデ（横位）	褐	にぶい褐	良好	4mm以下の乳白・灰色粒、1mmの光沢黒・褐色粒、微細な光沢透明粒	キャリパー状口縁
282	29	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA2a　埋土	＊	貝殻条痕文（横位）→ナデ	ナデ（横位）	にぶい黄橙	にぶい橙	良好	3mm以下の灰白・にぶい黄橙色粒	穿孔（未貫通）
283	36	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA2b　埋土	＊	貝殻条痕文（横位）→ナデ	貝殻条痕文（横位）→ナデ	にぶい橙	にぶい橙	良好	1.5mm以下の褐灰・灰褐色粒	
284	30	23	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA2d　埋土	＊	沈線文（2条）　貝殻条痕文（斜・横位）→ナデ	貝殻条痕文（横位）→ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	3mm以下の灰・褐・茶色粒、微細な透明・光沢黒色粒	
285	31	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA2c ベッド　埋土	＊	貝殻条痕文（斜・横位）	貝殻条痕文（横位）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	2mm以下の褐・乳白色粒、微細な光沢透明粒	摘み出し突帯
286	33	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA2b　埋土	＊	貝殻条痕文（斜位）→ナデ	貝殻条痕文（横位）	にぶい橙	にぶい橙	良好	2mm以下の黒灰・灰・乳白色粒、微細な黒・透明粒	波状口縁状
287	177	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA2b　埋土	＊	貝殻条痕によるナデ（斜・横位）	貝殻条痕文　ナデ　押圧文	明赤褐	明赤褐	良好	1～2mmの淡黄・褐色・光沢透明・乳白色粒	波状口縁状
288	28	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA2d　埋土	＊	ナデ（横位）	孔列文（未貫通）　ナデ（横位）	にぶい橙	にぶい橙	良好	3mm以下の灰褐・にぶい赤褐色・灰赤色粒	
289	188	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA2a　埋土	＊	沈線文（3条）	ナデ（縦位）→沈線文	にぶい褐	にぶい褐	良好	1mm以下の黒褐・茶褐・光沢黒色粒	口縁上端部：刻目
290	149	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA2a　埋土	＊	ナデ	沈線文	橙	橙	良好	4mm以下の乳白色粒、1mm以下の茶褐色粒	
291	27	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA2b　埋土	＊	ナデ（横位）	ナデ（横位）	灰褐	灰褐	良好	2.5mm以下の灰褐・黒褐・褐灰色粒	
292	37	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA2a　埋土	＊	ナデ（斜位）	ナデ（斜位）	灰黄褐・褐灰	黒	良好	2mm以下の明褐灰・灰白・灰褐色粒	外面：煤・黒色化
293	35	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA2a　埋土	＊	ナデ	ナデ（斜位）	にぶい橙	にぶい褐色	良好	1mm以下の灰・褐灰・浅黄色・にぶい黄褐・黒色粒	
294	194	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SA2a　埋土	＊	指ナデ	指ナデ	明赤褐	褐	良好	4mm以下の淡黄色粒	貼付突帯
295	23	一括	縄文 土器	深鉢？	口縁部？	SA2a　埋土	＊	ナデ	工具による爪形連続刺突文　ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好	2mm以下の黒・灰・乳白色粒、微細な光沢黒色粒	
296	24	一括	縄文 土器	深鉢？	頸部？	SA2c ベッド　埋土	＊	細沈線（2条・横位）　ナデ	工具による爪形連続突文　ナデ	灰黄褐	にぶい黄褐	良好	3mm以下の黒・褐・茶・乳白色粒、微細な光沢透明粒	
297	25	一括	縄文 土器	浅鉢	口縁～胴部	SA2b　埋土	＊	ナデ（横位）（風化）	ナデ（横位）	にぶい黄橙・灰黄褐	にぶい橙	良好	0.5mm以下の光沢黄褐色粒、1mm以下の明褐灰・淡黄・にぶい橙色粒	
366	86	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SZ1b　埋土	＊	ナデ	ナデ（横位）	明赤褐	明赤褐	良好	2mm以下の黒灰・白灰・褐・茶・乳白色・微細な光沢透明粒	内面：沈線（1条・横位）
367	85	一括	縄文 土器	深鉢	口縁部	SZ1b　埋土	＊	ナデ	ナデ（横位）　突帯文（1条）	灰黄褐	にぶい黄橙	良好	3mm以下の黒灰・白灰・褐・乳白色粒、微細な光沢透明粒	口唇部：凹み 口縁部：貼付突帯
368	87	一括	縄文 土器	深鉢	胴部	SZ1c　埋土	＊	ナデ	撚糸文	褐灰	にぶい黄褐	良好	4mm以下の灰白・黄白色粒、微細な光沢透明粒	
369	89	一括	縄文 土器	深鉢	胴部	SZ1b　埋土	＊	ナデ	ナデ　突帯部に半裁竹管状工具による沈線文（3条）	にぶい黄橙	にぶい橙	良好	2mm以下の浅黄橙・明褐灰・灰白・褐灰色粒	貼付隆起突帯（縦・横位）
370	88	一括	縄文 土器	深鉢	胴部	SZ1c　埋土	＊	ナデ	ナデ　突帯部に半裁竹管状工具による沈線文（2条）	にぶい黄橙	にぶい褐	良好	2mm以下の明褐灰・灰白・浅黄橙・褐色粒	貼付隆起突帯（3条「工」字状）

表8　弥生土器観察表（1）

掲載No	実測No	遺物取上げNo	種別	器種	部位	出土位置・層		推定法量(cm)	手法・調整・文様等の特徴 内面	外面	色調 内面	外面	焼成	胎土中に含まれる粒の特徴	備考
298	57	一括	弥生 土器	甕	口縁部	SA2c ベッド	粗土	●	ナデ（斜・横位）	ナデ（斜・横位）	明赤褐	橙	良好	4mm以下の浅黄・灰白・灰・橙色粒	口唇部：刻目 貼付刻目突帯（1条）
299	56	66	弥生 土器	甕	口縁部	SA2b	粗土	●	ナデ	ナデ（横位）	にぶい橙	にぶい橙	良好	4.5mm以下の灰白・灰・褐色・光沢透明粒	口唇部：刻目 貼付刻目突帯（1条）
300	61	一括	弥生 土器	甕	口縁部	SA3c	粗土	●	ナデ	ナデ（縦・横位）	橙	橙	良好	3mm以下の黒灰・白灰・褐・乳白色粒、微細な光沢透明粒	口唇部：刻目 貼付刻目突帯（1条）
301	62	一括	弥生 土器	甕	口縁部	SA2b	粗土	●	ナデ	ナデ（縦・横位）	橙	橙	良好	4mm以下の黒灰・白灰・褐・乳白色粒、微細な光沢透明粒	口唇部：刻目 貼付刻目突帯（1条）
302	64	一括	弥生 土器	甕	口縁部	SA2d	粗土	●	ナデ	丁寧なナデ（横位） ミガキ（斜位）	橙	橙	良好	2.5mm以下の浅黄橙・褐・灰・光沢透明粒	口唇部：刻目　口縁上端部：凹み　貼付刻目突帯（1条）
303	65	一括	弥生 土器	甕	口縁部	SA2b	粗土	●	ナデ	ナデ（横位）	橙	橙	良好	2mm以下の黒・白・灰白・褐色粒	口唇部：刻目　口縁上端部：凹み　貼付刻目突帯（1条）
304	63	一括	弥生 土器	甕	口縁部	SA2b	粗土	●	ナデ	ナデ（横位）	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	2mm以下の黒灰・灰・褐・茶色・光沢のある透明粒	口唇部：刻目 貼付刻目突帯（2条）
305	40	305 32	弥生 土器	甕	口縁〜胴部	SA2a B2	粗土 Ⅱ	口径 23.0	指押さえ　ナデ	ハケ目（縦位）	橙	にぶい橙	良好	4mm以下の灰白・灰色粒、1mmの光沢黒・黄灰・透明粒	口唇部：刻目 貼付刻目突帯（1条） 外面：煤
306	38	7	弥生 土器	甕	口縁〜胴部	SA2c ベッド	粗土	●	指押さえ　ナデ	ハケ目（縦位）	にぶい黄橙	にぶい黄橙・橙	良好	3mm以下の褐・灰・乳白色粒、微細な光沢黒・透明粒	口唇部：刻目 貼付刻目突帯（1条）　外面：煤
307	26	一括	弥生 土器	甕	口縁部	SA2c ベッド	粗土	●	ナデ	ナデ（横位）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	2mm以下の褐・灰・乳白色粒、微細な光沢黒色・透明粒	口唇部：刻目
308	55	16	弥生 土器	甕	口縁部	SA2c	粗土	●	ナデ（横・斜位）	ハケ目（斜・横位）	にぶい橙	にぶい橙	良好	4　以下の光沢透明・灰・橙色粒	口唇部：刻目 貼付刻目突帯（1条）
309	59	一括	弥生 土器	甕	口縁〜胴部	SA2b	粗土	●	ハケ目（横位）	ハケ目（斜位） ナデ（横位）	にぶい橙	褐灰	良好	3mm以下の黒褐・乳白色粒、微細な光沢黒色透明粒	
310	49	一括	弥生 土器	甕	口縁〜胴部	SA2c ベッド	粗土	●	ナデ（横位）　ナデ	ナデ（横位）　ナデ	明赤褐	橙	良好	3mm以下の黒灰・褐・乳白色粒、微細な光沢透明粒	L字状口縁 貼付刻目突帯（1条）
311	54	一括	弥生 土器	甕	口縁部	SA2b	粗土	●	ナデ（横位）　ナデ	ナデ（横位）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	3mm以下の黒灰・灰・灰白・乳白色粒、微細な光沢透明粒	L字状口縁 内・外面：煤
312	51	23・一括	弥生 土器	甕	口縁〜胴部	SA2d	粗土	●	ナデ	ハケ目（斜位） ナデ（横位）	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好	2mm以下の黒灰・灰白・褐・乳白色粒、微細な光沢透明粒	L字状口縁 貼付刻目突帯（1条）
313	52	一括	弥生 土器	甕	口縁〜胴部	SA2b	粗土	●	ナデ（横位）　ナデ	ナデ（横位）（風化気味）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	2mm以下の黒灰・灰・乳白色粒、微細な黒・透褐・乳白・光沢透明粒	貼付刻目突帯（1条）
314	53	57	弥生 土器	甕	口縁部	SA2b	粗土	●	ナデ	ナデ（横位）	にぶい橙	にぶい橙	良好	4mm大の褐色粒、2　以下の黒灰・褐色粒、微細な光沢透明粒	L字状口縁
315	58	一括	弥生 土器	甕	口縁〜胴部	SA2a	粗土	●	ナデ	ハケ目（斜位） ナデ（横位）	にぶい橙	にぶい橙	良好	2mm以下の黒灰・白灰・乳白色粒、微細な光沢透明粒	
316	60	5	弥生 土器	甕	口縁〜胴部	SA2c ベッド	粗土	●	ハケ目（斜・横位）	ナデ（縦・横位）	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好	4mm以下の黒灰・褐灰・褐・乳白色粒、微細な光沢透明粒	L字状口縁
317	50	一括	弥生 土器	甕	口縁〜胴部	SA2a	粗土	●	ナデ	ナデ（横位）　ハケ目（斜位）→ナデ	にぶい黄橙・灰黄褐	にぶい黄橙	良好	5mm大の灰褐色粒、3mm以下の灰・褐・茶・乳白色粒、微細な光沢透明粒	貼付刻目突帯（2条）
318	41	1・2 50 53・83・84・85	弥生 土器	甕	口縁〜胴部	SA2c ベッド B2 C2	粗土	口径 23.0	ナデ	横方向のナデ	橙	橙	良好	3mm以下の褐・茶・灰・乳白色粒	凹みのあるL字状口縁 貼付突帯（3条）
319	246	一括	弥生 土器	甕	口縁部	SA2a	粗土	●	ナデ（横位）　指押さえ	ナデ（横位）	浅黄	浅黄	良好	3mm以下の赤褐色粒	L字状口縁　口唇部：凹み・煤　貼付突帯（1条）
320	67	一括	弥生 土器	甕	口縁部	SA2b	粗土	●	ナデ（横位）	ナデ（横位）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	6mm以下の灰白・浅黄・褐・白・光沢黒・金色粒	凹みのあるL字状口縁
321	66	一括	弥生 土器	甕	口縁部	SA2a	粗土	●	ナデ（横位）	ナデ（横位）	橙	橙	良好	6mm以下の灰・黒・灰白・白・浅黄橙・褐色粒	L字状口縁
322	68	4	弥生 土器	甕	口縁〜頸部	SA2a	粗土	●	ミガキ→ナデ(風化気味)	不明（風化） 指頭痕	黒褐・明赤褐	橙	良好	5mm以下の灰白・黒灰・黄白・褐色粒、微細な光沢灰白色粒	
323	43 44	16 6 14・61	弥生 土器	甕	口縁〜頸部 頸〜胴部	SA2b C2 SA2b	粗土 Ⅱ 粗土	口径 19.4	指押さえ　ナデ	ナデ	橙 橙・明黄褐	橙 橙・明黄褐	良好	3.5mm以下の赤褐・灰白・黒・光沢褐色粒、9.5mmにぶい赤褐色粒 6mm以下のにぶい赤褐・灰白・黒・光沢褐色粒	No.44と同一個体 外面：煤 No.43と同一個体 外面：煤
324	70	55	弥生 土器	甕	口縁〜胴部	SA2b	粗土	口径 16.8	ナデ（横位）　ナデ	ナデ（横位）　ハケ目→ナデ	にぶい黄橙	橙	良好	1mm以下の黒灰・白灰・褐色粒、微細な光沢黒・透明粒	
325	71	一括	弥生 土器	甕	口縁〜頸部	SA2b	粗土	●	ナデ（横位）	ナデ（横位）　ナデ	にぶい橙	にぶい橙	良好	2mm以下の灰白・褐灰・にぶい橙・光沢黒・金色粒	外面：煤
326	42	3・4	弥生 土器	甕	胴部	SA2c ベッド	粗土	●	ナデ	ハケ目（斜位） ナデ（横位）	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好	3mm以下の黒褐・褐・茶・乳白色粒、微細な光沢透明粒	貼付刻目突帯（1条）
327	74	8	弥生 土器	甕	胴部	SA2c ベッド	粗土	●	ナデ	ハケ目（縦位）	灰黄	にぶい黄	良好	3mm以下の乳白色・黒褐・にぶい黄橙・褐灰・光沢透明粒	外面：煤
328	39	2・6 25 13・16	弥生 土器	甕	胴〜底部	SA2c SA2b C2	粗土 粗土 Ⅱ	底径 8.3	ナデ	ハケ目（縦位）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	7mm以下の灰色・褐灰・浅黄橙・光沢黒・透明粒	平底
329	77	5・13	弥生 土器	甕	底部	SA2d	粗土	底径 6.2	ナデ	ナデ	灰	にぶい黄橙	良好	[illegible]	平底
330	76	65	弥生 土器	甕	底部	SA2d	粗土	底径 7.1	ナデ	ナデ　指頭痕	灰	橙	良好	3mm以下の灰白・灰赤・灰・黒褐・黄灰・光沢黒褐・乳白色粒	平底　底外面：指頭痕 SZ1−41と接合
331	81	1	弥生 土器	甕	底部	SA3d	粗土	底径 6.0	ナデ	ナデ	灰	にぶい黄橙	良好	2.5mm以下の灰赤・黒褐・灰白・灰・灰黄褐色粒	上げ底
332	82	17	弥生 土器	甕	底部	SA2d	粗土	底径 7.3	不明（欠損）	ミガキ（縦位）	−	橙	良好	3mm以下の灰・乳白・暗赤褐・褐灰・黒・褐色粒	平底
333	75	3 30	弥生 土器	甕	底部	SA2c SA2b	粗土	口径 6.0	ハケ目→ナデ消し	ナデ（縦位）	にぶい黄橙	にぶい橙	良好	5mm下の灰赤・灰白・黒褐・褐白・乳白・明赤褐・光黒・透明粒	平底

表9　弥生土器観察表（2）

掲載No	実測No	遺物取上げNo	種別	器種	部位	出土位置・層	推定法量(cm)	手法・調整・文様等の特徴 内面	外面	色調 内面	外面	焼成	胎土中に含まれる粒の特徴	備考
334	78	60	弥生 土器	甕	底部	SA2b 埋土 C2 Ⅱ	底径 6.2	ハケ目→ナデ	ナデ	褐灰	にぶい橙・橙	良好	5mm以下の黒灰・褐灰・褐・乳白色粒	平底　底外面：圧痕
335	79	46	弥生 土器	甕	底部	SA2b 埋土	底径 5.8	ハケ目→指ナデ	ナデ	褐灰	にぶい橙・橙	良好	4mm以下の黒灰・白灰・褐灰・褐・茶・乳白色粒	平底　底外面：圧痕
336	80	一括	弥生 土器	甕	底部	SA2b 埋土	底径 7.1	ナデ	ナデ　指頭痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	4mm以下の黒灰・白灰・褐・茶・乳白色粒、微細な光沢黒・金・透明粒	平底　底外面：植物葉(朴)痕
337	46	51 1	弥生 土器	鉢	胴～底部	SA2b 埋土 C2 Ⅱ	●	ハケ目(斜・縦位)→指ナデ	ナデ	黒	にぶい褐・橙	良好	5mm以下のにぶい褐・明褐・灰白色粒	内面：黒色化 外面：煤
338	47 48	1·3·6·8·9·19 一括	弥生 土器	壺	胴～底部	SA2b 埋土	●	ハケ目（斜・縦位）指押さえ　指ナデ	ハケ目（斜・横位）	にぶい橙・褐	にぶい橙・橙・褐	良好	3mm以下の褐灰・灰褐・明赤褐色粒	外面：煤
339	72	16·21	弥生 土器	壺	口縁部	SA2d 埋土	●	不明（風化）	不明（風化）	にぶい橙・淡黄	にぶい橙	良好	2.5mm以下の灰褐・にぶい橙・にぶい赤褐・灰白色粒	口縁上端部：浅い凹み
340	69	一括	弥生 土器	壺	口縁部	SA2c ベッド 埋土	●	ナデ（横位）	ナデ（横位）	にぶい黄橙	にぶい橙	良好	1mm以下の黒灰・白灰・褐・乳白色粒、微細な光沢透明粒	口縁上端部：凹み 内面：煤
341	73	64	弥生 土器	鉢	口縁～胴部	SA2b 埋土	●	ナデ（斜・横位）	ナデ（横位）　ナデ	にぶい橙	にぶい橙	良好	1mm以下の灰褐・灰白・褐灰色粒	
342	83	一括	弥生 土器	不明	不明	SA2c 埋土	●	竹管文	不明	にぶい褐	にぶい褐	良好	1mm以下の浅黄・明褐灰色・光沢金色粒	種子圧痕
371	96	一括	弥生 土器	甕	口縁部	SZ1c 埋土	●	ナデ	ナデ（横位） ハケ目（斜位）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	2mm以下の浅黄・褐灰色粒	貼付刻目突帯（1条） 外面：煤
372	94	一括	弥生 土器	甕	口縁～胴部	SZ 1b-c 埋土	●	ナデ（横位）	ナデ（横位） ハケ目（斜位）	にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	5mmの褐色粒、3mm以下の黒灰・白灰・褐・黄白・乳白色粒	貼付刻目突帯（2条）
373	95	一括	弥生 土器	甕	口縁部	SZ1b 埋土	●	ナデ　ナデ（横位）	ナデ（横位）	褐灰	にぶい橙	良好	3mm以下の灰白・にぶい黄橙・にぶい橙色粒	口唇部：刻目 貼付刻目突帯（1条）
374	242	46	弥生 土器	甕	口縁部	SZ1 埋土	●	ハケ目	ナデ（横位） ハケ目　指頭痕	にぶい褐	にぶい褐	良好	3mm以下の乳白・灰褐、微細な光沢透明粒	L字状口縁
375	243	一括	弥生 土器	甕	口縁～胴部	SZ1 埋土	●	ナデ（横位） ハケ目	ハケ目　ナデ（横位）　指頭痕	橙	橙	良好	3mm以下の乳白・灰褐・茶褐、光沢透明粒	L字状口縁
376	253	31	弥生 土器	甕	口縁部	SZ1 埋土	口径 19.9	ナデ（横位） 指押さえ？	ナデ（横位）	橙	橙	良好	3mm以下の黄灰・赤褐・光沢粒	L字状口縁 口唇部：凹み
377	100	一括	弥生 土器	甕	口縁部	SZ1d 埋土	口径 13.0	ナデ（横位）	ナデ（横位）	橙・灰黄褐	橙・灰黄褐	良好	2.5mm以下の光沢透明・灰白・灰・黒色粒	L字状口縁
378	98	一括	弥生 土器	甕	口縁部	SZ1c 埋土	●	ナデ（横位）	ナデ（横位）	褐灰	にぶい黄橙	良好	3mm以下の光沢黒・光沢褐・灰白・にぶい赤褐・褐灰色粒	L字状口縁 口唇部：凹み
379	97	一括	弥生 土器	甕	口縁部	SZ1d 埋土	●	ナデ	ナデ（横位）	浅黄	にぶい黄橙	良好	1mm以下の褐灰・褐・灰白・光沢黒色粒	L字状口縁 口唇部：凹み
380	93	一括	弥生 土器	甕	口縁～頸部	SZ1d 埋土	口径 12.6	ナデ（横位）	ナデ（横位）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	2mm以下の黒灰・白灰・褐・黄白色粒、微細な透明粒	
381	90	一括	弥生 土器	甕	口縁～頸部	SZ1c 埋土	●	ナデ（横位）	ナデ（横位）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	6mm以下の光沢黒・透明・灰白色粒	
382	91	一括	弥生 土器	甕	口縁～頸部	SZ1b 埋土	●	ナデ　ナデ（横位）	ハケ目→ナデ消し　指頭痕？	淡黄	にぶい黄橙	良好	3mm以下の灰赤・黒褐・褐灰・灰色粒	
383	92	一括	弥生 土器	甕	口縁部	SZ1b 埋土	●	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	2mm以下の黒灰・褐灰・白灰・褐・褐茶色粒	外面：煤
384	99	一括	弥生 土器	甕	口縁部	SZ1d 埋土	●	ナデ（横位）	ナデ（横位）	にぶい橙 黄橙	橙	良好	1mm以下の光沢黒褐・褐灰・灰白色粒	
385	101	一括	弥生 土器	壺	口縁部	SZ1 埋土	●	ナデ（横位）	ナデ	にぶい黄橙・にぶい黄褐	にぶい黄橙・にぶい黄褐	良好	3.5mm以下の灰白・にぶい黄橙・橙・光沢透明・光沢黒色粒	内面：貼付突帯（1条）
386	103	39	弥生 土器	甕	底部	SZ1 埋土	底径 4.4	ナデ　指押さえ	ミガキ（斜・横位）	にぶい橙	にぶい黄褐	良好	7mm以下の白・灰・にぶい赤褐、透明黒・透明粒	外面：煤
387	102	27	弥生 土器	甕	底部	SZ1 埋土	底径 6.2	不明（風化）	ナデ	浅黄・灰黄	浅黄橙	良好	5mm以下のにぶい赤褐・灰白・黒、光沢黒・透明粒	底外面：十字状線刻
401	12	4	弥生 土器	甕	口縁部	SA1Y 住居土器集中区	●	ナデ（横位）	丁寧なナデ（横位）	明赤褐	にぶい赤褐	良好	0.5～4mmの浅黄・赤褐・灰・光沢透明粒	口唇部（内外）：刻目 刻目突帯（1条）
402	10	1	弥生 土器	甕	口縁～胴部	SA1Y 住居土器集中区	●	ナデ	ナデ（横位） ナデ（不明瞭）	にぶい黄橙	にぶい黄橙・黒	良好	3mm以下の黒・灰・茶・乳白色粒、微細な光沢透明粒	口唇部：刻目 刻目突帯（1条）　外面：煤
403	11	5	弥生 土器	甕	口縁～胴部	SA1Y 住居土器集中区	●	ナデ（横位）	ナデ（横位）	明褐	明黄褐	良好	2mm以下の褐・灰・茶・乳白色粒、微細な光沢透明黒色粒	口唇部：刻目 刻目突帯（2条）
404	13	10	弥生 土器	甕	口縁～胴部	SA1Y 住居土器集中区	●	ナデ（横位） 指押さえ	ナデ（横位）	明黄褐	橙	良好	0.5～1mmの灰白・浅黄橙・光沢褐色粒	口唇部：凹み 貼付突帯（1条）
405	16	6	弥生 土器	甕	口縁部	SA1Y 住居土器集中区	●	ナデ（横位）	ナデ（横位）	橙	橙	良好	3mm以下の黒褐・灰・茶・乳白色粒、1mm以下の光沢透明黒色粒	口唇部：凹み
406	19	13	弥生 土器	壺	胴部	SA1Y 住居土器集中区	●	ハケ目（斜位）	ナデ（横位）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	2mm以下の黒・灰・褐色粒、微細な光沢黒色粒	外面：貼付突帯（3条）
407	20	2	弥生 土器	壺	胴部	SA1Y 住居土器集中区	●	ナデ	ナデ（横位）　櫛描波状文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好	0.5～2mmの灰白・浅黄・光沢褐色粒	摘み出し突帯（3条）
409	215	一括	弥生 土器	甕	口縁～胴部	D4 Ⅱ	口径 32.5	ナデ　指押さえ	ナデ（横位）	にぶい黄橙	橙	良好	3mm以下の灰褐色粒、2mm以下の灰白色粒	口縁上端部：凹み　穿孔あり貼付刻目突帯（2条）　内面：黒変
410	228	一括	弥生 土器	甕	口縁部	T5 Ⅱ	●	ナデ　指押さえ	ナデ（横位）　指押さえ	褐灰	にぶい赤褐	良好	1mmの乳白・橙色粒	口唇部：刻目　口縁上端部：凹み 口縁部：貼付刻目突帯（1条）
411	218	61	弥生 土器	甕	口縁部	D4 Ⅲ	●	ナデ　指押さえ	ナデ（横位）　ハケ目　指押さえ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	2mm以下の灰白・灰褐色粒	口縁上端部：凹み 外面：黒色化
412	219	一括	弥生 土器	甕	口縁部	C2 Ⅲ	●	ナデ　指押さえ	ナデ（横位）　ハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	1.5mm以下の灰白・褐色粒	口唇部：刻目 貼付刻目突帯（2条）
413	216	58 59	弥生 土器	甕	口縁～胴部	D4 Ⅲ	口径 33.2	丁寧なナデ 指押さえ　ハケ目 工具痕？	ナデ（横位） ハケ目（斜・縦位） 一部黒変	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	3mm以下の灰褐色粒、1mm以下の灰白色粒	口縁上端部：凹み 貼付刻目突帯（2条）
414	238	1	弥生 土器	甕	口縁部	土層観察ベルト2 －	●	ナデ	ナデ（斜位） ハケ目　指頭痕	橙	橙	良好	1mmの褐色粒	口縁部：貼付刻目突帯（1条）
415	235	7	弥生 土器	甕	口縁部	D3 Ⅱ	●	ナデ	ナデ　ハケ目	にぶい橙	にぶい橙	良好	2.5mm以下の灰黄色粒、1.5mm以下の赤褐色粒、1 以下の灰白粒	口唇部：刻目　口縁部上端部：凹み 口縁部：貼付刻目突帯（1条）
416	221	一括	弥生 土器	甕	口縁部	T10E －	●	ナデ　指頭痕	ナデ(横位)	橙	橙	良好	3mm以下の黒褐・灰褐・乳白色粒	口唇・口縁部：刻目突帯（1条）

表10　弥生土器観察表（3）

掲載No	実測No	遺物取上げNo	種別	器種	部位	出土位置・層	推定法量(cm)	手法・調整・文様等の特徴 内面	手法・調整・文様等の特徴 外面	色調 内面	色調 外面	焼成	胎土中に含まれる粒の特徴	備考
417	229	一括	弥生土器	甕	口縁部	B3 Ⅲ	●	ナデ（横位） 指押さえ	ナデ（横位）	にぶい黄橙	浅黄	良好	1mm以下の乳白色粒、2mmの橙色粒	貼付突帯（1条）
418	236	一括	弥生土器	甕	口縁部	C3 Ⅲ	●	ナデ（横位）	ナデ（横位）	橙	にぶい橙	良好	2mm以下の褐灰色粒	口縁部：貼付刻目突帯（1条） 外面：煤
419	223	11	弥生土器	甕	口縁部	土層観察ベルト2 —	●	ナデ	ナデ（横位） 指押さえ	にぶい黄橙	橙	良好	3mm以下の灰黄褐色粒、微細な光沢粒	口縁上端部：凹み 貼付刻目突帯（1条）
420	108	1	弥生土器	甕	口縁部	SC3 埋土	口径 35.8	ナデ（横位）	ナデ（風化気味）	橙	浅黄橙	良好	2mmの褐色粒、1mm以下の乳白色粒	口唇部（内外）：刻目 刻目突帯（2条）
421	239	一括	弥生土器	甕	口縁部	C2 Ⅱ・Ⅲ	●	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	3.5mm以下の灰白色粒、2mm以下の黒色粒、1mm以下の光沢黒色粒	口唇部：刻目 口縁部：貼付刻目突帯（1条） 外面：煤
422	222	36	弥生土器	甕	口縁部	C3 Ⅲ	●	ナデ ハケ目？ 指押さえ	ナデ（横位）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	2mm以下の灰白色粒、微細な光沢粒	口縁上端部：凹み 貼付刻目突帯（1条）
423	226	31	弥生土器	甕	口縁部	B3 Ⅱ	●	ナデ（横位）？	ナデ（横位） 工具によるナデ？	暗赤褐	暗赤褐	良好	3mm以下の淡黄色粒	口縁上部：凹み 口縁部：貼付刻目突帯（2条）
424	232	一括	弥生土器	甕	口縁部	C2・T3 Ⅲ	口径 25.4	ナデ ナデ（横位）→ナデ	ハケ目	にぶい黄橙	灰黄褐	良好	3～4mmの灰・褐色粒、1～3mmの黒・淡黄・乳白色粒、微細な光沢透明粒	口唇部：刻目 外面：煤
425	224	2	弥生土器	甕	口縁部	C1 Ⅱ	●	ナデの上→ハケ目	ナデ（横位） 工具痕	にぶい褐	にぶい褐	良好	2mm以下の浅黄色粒	貼付刻目突帯（2条） 外面：煤
426	237	86 101	弥生土器	甕	口縁～胴部	B2 Ⅱ	口径 19.4	ナデ（横位） 指頭痕	ナデ（横位） ハケ目	黒褐	にぶい黄橙	良好	3mm以下の乳白・灰褐・茶褐色粒	胴部：貼付刻目突帯
427	230	一括	弥生土器	甕	口縁部	T7 Ⅱ	●	ナデ 指押さえ	ナデ（横位） ハケ目（横位）	にぶい橙	にぶい橙	良好	1mm以下の乳白色粒	刻目突帯（1条）
428	231	一括	弥生土器	甕	口縁部	D3 Ⅱ	●	ナデ（横位） ナデ	ナデ（斜位） ハケ目（斜位）→ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	1～2mmのにぶい黄橙色粒、微細な光沢透明粒	口唇部：刻目 貼付刻目突帯（1条） 外面：煤
429	227	一括	弥生土器	甕	口縁部	T3 Ⅱ	●	ナデ	ナデ（横位） 工具によるナデ？	黄褐	黒褐	良好	3mm以下の灰色粒、1mm以下の光沢黒色粒	口唇部：刻目 L字状口縁 貼付刻目突帯（1条）
430	233	一括	弥生土器	甕	口縁部	C4 Ⅲ	●	ナデ ハケ目（横位）	工具によるナデ（横位） ハケ目（斜位）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	1～3mmの褐・淡黄・灰・乳白色粒	口唇部：刻目 L字状口縁
431	220	16	弥生土器	甕	口縁部	B2 Ⅱ	●	ナデ（横位）	指押さえ ナデ（横位）	にぶい褐	にぶい褐	良好	2mm以下の褐色粒、1mm以下の灰白粒	口唇部：刻目 L字口縁 貼付刻目突帯（1条）
432	225	一括	弥生土器	甕	口縁部	—	●	ナデ（横位） ナデ	ナデ（横位） ハケ目？	黄褐	黄褐	良好	3mm以下の灰色粒、2mm以下の灰白粒	口唇部：刻目 L字状口縁 貼付刻目突帯（1条）
433	254	一括	弥生土器	甕	口縁部	C2 Ⅲ	口径 22.2	ナデ（横位）？ 指押さえ	ナデ（横位）	明赤褐	にぶい黄褐	良好	3mm以下の褐・光沢黒色粒	口唇部：凹み L字状口縁
434	249	一括	弥生土器	甕	口縁部	C2 Ⅲ	●	ナデ 指頭痕？	ナデ（横位）	橙	橙	良好	2mm以下の茶褐・黒褐・赤褐・乳白色粒	口唇部：凹み L字状口縁
435	251	一括	弥生土器	甕	口縁部	C4 Ⅲ	●	ナデ（横位）	ナデ（横位）	明黄褐	明黄褐	良好	4mm以下のにぶい褐色粒、3mm以下の赤色粒、微細な光沢粒	口唇部：凹み L字状口縁
436	14・15	一括	弥生土器	甕	口縁～胴部	SA1a+T11 埋土	口径 28.8	ナデ	ナデ（斜・横位）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	3mm以下の褐灰・にぶい褐・浅黄橙色粒	L字状口縁 貼付突帯（3条）
437	247	一括	弥生土器	甕	口縁部	C2 Ⅱ・Ⅲ	口径 34.1	ナデ（横位） 指押さえ	ナデ（横位）	褐灰	浅黄橙	良好	1mm大の乳白色粒	口唇部内面：凹み L字状口縁
438	252	4	弥生土器	甕	口縁部	B3 Ⅱ	口径 27.3	ナデ（横位）	ナデ（横位）	明褐	明褐	良好	1mm以下の灰色・赤褐色粒	口唇部：凹み L字状口縁 口縁上端：黒色化？
439	248	一括	弥生土器	甕	口縁部	T7 Ⅱ	口径 22.5	ハケ目	横方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	1mm以下の茶褐・灰褐・黒褐色粒、微細な光沢粒	口唇部：凹み
440	244	2	弥生土器	甕	口縁部	B3 Ⅱ	口径 20.4	ナデ（横位）	ナデ（横位）	橙	黄橙	良好	3mm以下のにぶい橙色・光沢粒	口唇部：凹み L字状口縁 貼付突帯（3条） 外面：煤
441	234	一括	弥生土器	甕	口縁部	C2 Ⅲ	口径 22.7	ナデ（横位） ハケ目（斜位）	ナデ（横位） 工具痕 剥離	にぶい橙	にぶい橙	良好	2mm以下の灰白色粒、1.5mm以下の赤褐・黒褐色粒	口唇部：刻目 L字状口縁
442	217	2 3	弥生土器	甕	口縁部	D4 Ⅱ	口径 24.8	ミガキ？ 指頭痕	ナデ（横位） ハケ目（斜・縦位）	明赤褐・橙	明赤褐・橙	良好	3mm以下の灰褐・茶褐・黒褐色粒	口唇部：刻目 L字状口縁
443	241	一括	弥生土器	甕	口縁部	T5 Ⅱ	●	ハケ目 ナデ（横位）	ハケ目 ナデ（横位） 指頭痕	明褐	明褐	良好	3mm以下の灰褐・乳白・茶褐色粒、微細な光沢透明粒	L字状口縁
444	240	16	弥生土器	甕	口縁部	D4 Ⅱ	●	ナデ→ハケ目	ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	良好	3mm以下の灰白色粒、2mm以下の灰褐色粒	L字状口縁
445	250	一括	弥生土器	甕	口縁部	T5 Ⅱ	●	ナデ	ナデ（横位）	橙	橙	良好	2mm以下の灰褐・乳白・光沢金色粒	L字状口縁
446	214	11・12・13	弥生土器	甕	口縁～胴部	B1 Ⅱ	口径 45.0	ハケ目 指頭痕	ハケ目（斜・縦位）	橙	橙	良好	5mm以下のにぶい褐灰色粒、2mm以下の茶褐・乳白色粒	L字状口縁 貼付突帯（3条）
447	117・118	1・2	弥生土器	甕	口縁～胴部	SC4 埋土	口径 24.8	ナデ（横位）	ナデ ハケ目（縦位）	橙	橙・にぶい橙	良好	3mm以下の灰白色粒、1mm以下の光沢黒色粒	貼付突帯（1条） 外面：煤
448	245	42・43	弥生土器	甕	口縁部	B3 Ⅱ	口径 16.0	ナデ（横位）	ナデ（横位）	黄褐	黄褐	良好	1mm以下の灰白粒、微細な光沢粒	
449	279	4	弥生土器	甕	胴部～底部	C3 Ⅱ	底径 3.3	（風化により不明）	（風化により不明）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	6mm以下の灰白・光沢黒褐・透明粒	
450	270	20	弥生土器	甕	底部	B1 Ⅲ	底径 4.5	ナデ（風化）	ナデ	浅黄橙・にぶい黄橙	浅黄橙・灰黄褐	良好	4mm以下の灰白・灰黄褐・にぶい橙、光沢金・黒色粒	外面：煤
451	276	一括	弥生土器	甕	底部	T5 Ⅱ	底径 7.1	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	良好	1mmのにぶい橙・灰白・褐灰・金・黒・透明粒	
452	274	6	弥生土器	甕	底部	B1 Ⅱ	底径 8.6	ナデ	ハケ目（斜・縦位）	橙	にぶい褐	良好	4mmのにぶい赤褐・灰白・浅黄・黒褐・黄灰・光沢黒褐・透明粒	
453	273	一括	弥生土器	甕	胴部	T4 Ⅲ	底径 11.2	ナデ	ナデ（斜位）	にぶい橙	橙	良好	5mm以下のにぶい橙・褐灰・灰白・青灰・褐色粒	
454	281	一括	弥生土器	甕	底部	B1 Ⅱ・Ⅲ	底径 11.2	ナデ	ナデ（縦・横位）	褐	褐	良好	4mm以下の灰白・淡黄・黒褐・光沢黒褐・明褐灰色粒	底外部：筋状圧痕あり
455	21	16	弥生土器	甕	底部	SA1 埋土	底径 8.4	ナデ（風化気味）	ハケ目（縦位）	橙	にぶい黄橙	良好	2mm以下の灰白・赤褐・黄橙色粒	
456	272	113	弥生土器	甕	底部	B2 Ⅲ	底径 9.1	ナデ	指ナデ（横位）	灰白	にぶい黄橙	良好	3mm以下の灰白・黄灰・にぶい黄褐・黒褐・褐灰色粒	
457	269	7・9	弥生土器	甕	胴～底部	C2 Ⅱ	底径 4.6	ハケ目→ナデ消し	ハケ目→ナデ消し 指頭痕	オリーブ黒・にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	3mm以下の灰白・浅黄橙・にぶい橙・灰褐・にぶい褐色粒	内面：黒色化
458	267	48	弥生土器	甕	底部	D3 Ⅲ	●	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	良好	2mm以下の灰白・褐灰・浅黄橙色粒	底外面：穿孔あり（横位）
459	268	25	弥生土器	甕	底部	D3 Ⅱ	底径 3.6	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	良好	5mm以下の灰白・褐灰・灰黄褐・黒褐・金・黒・光沢透明粒	上げ底 外面：植物組織痕 内面：種子圧痕？

表11　弥生土器観察表（4）

掲載No	実測No	遺物取上げNo	種別	器種	部位	出土位置・層	最定法量(cm)	手法・調整・文様等の特徴		色調		焼成	胎土中に含まれる粒の特徴	備考
								内面	外面	内面	外面			
460	275	19	弥生 土器	甕	底部	B1　Ⅲ	底径 7.7	ハケ目→ナデ	ナデ	灰黄褐・にぶい褐	にぶい褐	良好	4mm以下の白色・明白・にぶい黄橙・灰黄褐・透明・透明黒色	上げ底
461	105	一括	弥生 土器	甕	底部	SC1 粗土	底径 6.0	ハケ目？	粗底工具？によるナデ ナデ（粗位）（黒化気味）	にぶい黄橙・にぶい褐	にぶい褐	良好	1～2mmの浅黄・褐・灰・乳白色粒	上げ底
462	255	一括	弥生 土器	壺	頸部	T2E　Ⅱ	●	ナデ　ハケ目？ 指押さえ	ナデ　ミガキ（一部）	橙	橙	良好	2mm以下の茶褐・灰褐・乳白色粒	
463	256	一括	弥生 土器	壺	頸部	C2　Ⅱ	●	ナデ	ナデ	橙	橙	良好	2mm以下の灰褐・茶褐色粒	
464	257	一括	弥生 土器	高坏	坏部	T2E　Ⅱ	●	ナデ（横位）？	ナデ（横位）？	浅黄	浅黄	良好	1～2mmの赤褐色粒	
465	84	一括	弥生 土器	不明	不明	T14W　－	●	不明	不明	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	1mm以下の浅黄橙・にぶい黄橙・灰白色・光沢透明粒	種子圧痕あり

表12　土師器観察表

473	260	一括	土師器	皿	底部	C1　盛土	底径 6.0	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	良好	1mm以下の砂粒	
474	259	一括	土師器	皿	底部	C2　Ⅱ	底径 7.4	回転ナデ	回転ナデ	にぶい褐	橙	良好	1～2mmの砂粒	
475	261	一括	土師器	皿	底部	B2　Ⅲ	底径 8.4	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	橙	良好	1mmの砂粒	
476	262	一括	土師器	皿	底部	B2　Ⅱ	底径 7.3	回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	良好	1mm以下の砂粒	

表13　石器観察表（1）

掲載No	実測No	遺物取上げNo	器種	石材	色調	出土位置	層	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	X座標	Y座標	Z座標	備考
110	40	21	打製石鏃	黒曜石(姫島産)	灰白色	ＳＡ1	覆土	2.0	0.9	3.5	0.4	−87538.5616	46064.0191	154.2157	二等辺三角形　凹基式
111	58	12	石核	黒曜石(針尾産)？	黒色	ＳＡ1	覆土	2.5	1.5	1.4	6.1	実測図記入	実測図記入	154.23	
112	33	14	剥片	ホルンフェルス	黒褐色／サビ	ＳＡ1	覆土	9.6	5.7	1.6	61.5	実測図記入	実測図記入	154.279	
113	32	7	剥片	ホルンフェルス	黒褐色	ＳＡ1	覆土	10.5	6.1	2.8	160.0	実測図記入	実測図記入	154.469	
116	1	1	砥石	砂岩	明褐色	ＳＣ2	覆土	7.3	7.5	1.5	113.9	−87536.1173	46063.859	154.254	片面：擦痕あり
127	22	4	剥片	ホルンフェルス	黒褐色	ＳＣ4	覆土	8.6	5.5	3.8	175.5	−87541.0369	46064.9221	154.1095	
128	60	9	石錘	砂岩	灰白色	ＳＣ4	覆土	4.8	3.9	1.2	31.3	−87543.0654	46065.0099	153.8879	短軸方向の打ち欠き
140	42	8	打製石鏃	黒曜石(針尾産)？	暗灰色	ＳＣ11	覆土	2.6	1.3	0.3	0.6	−87541.9993	46061.858	153.7127	二等辺三角形　凹基式
141	54	一括	剥片	黒曜石(姫島産)	灰白色	ＳＣ7	覆土	3.6	3.6	1.3	11.2	●	●	●	
142	62	一括	石錘	ホルンフェルス	黒灰色	ＳＣ11	覆土	3.9	3.0	0.7	11.5	●	●	●	長軸方向の打ち欠き
143	61	一括	石錘	ホルンフェルス	うすい茶色	ＳＣ11	覆土	3.9	3.4	1.0	16.5	●	●	●	長軸方向の打ち欠き
144	67	一括	石錘	ホルンフェルス	黒灰色	ＳＣ9	覆土	4.4	3.9	1.1	28.1	●	●	●	短軸方向の打ち欠き（片側のみ）
145	45	一括	打製石斧	ホルンフェルス	黒褐色	ＳＣ10	覆土	6.4	3.9	2.8	61.6	●	●	●	バチ形　一部欠損
146	68	一括	石錘	砂岩	にぶい黄色	ＳＣ11	覆土	6.6	5.0	1.5	80.2	●	●	●	短軸方向の打ち欠き
147	16	2	磨石	尾鈴山酸性岩類	浅黄色	ＳＣ9	覆土	9.3	9.7	4.5	664.5	−87548.9974	46066.9518	153.299	表裏面：磨痕あり
148	7	9	台石	尾鈴山酸性岩類	浅黄色	ＳＣ11	覆土	31.6	31.5	10.4	19800.0	−87542.3841	46062.0678	153.8372	片面：擦痕あり
149	55	1	石核	ホルンフェルス	にぶい黄橙色	ＳＣ5	覆土	8.3	7.7	2.7	200.2	●	●	●	データ欠
226	102	一括	打製石鏃	チャート	鈍色	C2	Ⅲ	1.8	1.4	0.4	0.9	●	●	●	二等辺三角形　平基式
227	99	104	打製石鏃	チャート	黒灰色	B2	Ⅲ	1.5	1.3	0.3	0.4	−87535.4365	46061.993	154.7152	二等辺三角形　凹基式
228	101	25	打製石鏃	チャート	黒灰色	B1	Ⅲ	1.5	1.3	0.2	0.3	−87535.2262	46063.746	154.5668	正三角形　凹基式
229	100	33	打製石鏃	ガラス質安山岩	黒褐色	B3	Ⅱ	1.4	1.3	0.3	0.3	−87543.1809	46064.1109	154.3357	正三角形　凹基式
230	89	4	石匙	ガラス質安山岩	黒色	C1	Ⅱ	3.2	4.2	0.8	6.0	−87530.6182	46065.0044	154.6579	横型
231	88	一括	石匙	石英	白色	B3	Ⅲ	4.7	3.7	1.5	15.6	●	●	●	横型
232	107	2	粗製剥片石器	ホルンフェルス	黒褐色	土層断面ベルト	Ⅱ～Ⅲ	6.1	9.2	1.7	91.4	−87540.6772	46066.2258	154.2086	刃部調整あり　円礫剥片
233	115	63	剥片	ホルンフェルス	黒褐色	C2	Ⅱ	6.8	3.5	1.1	22.9	−87539.8355	46068.198	154.4013	刃部調整あり
234	117	62	剥片	ホルンフェルス	黒灰色	D4	Ⅲ	6.8	5.5	1.5	36.9	−87546.1047	46074.8405	153.4133	
235	132	一括	石核	ホルンフェルス	青灰色	Ｔｒ3	−	7.3	7.2	2.8	155.9	●	●	●	
236	133	64	石核	ホルンフェルス	黒灰色	B3	Ⅲ	7.5	7.0	3.3	180.6	−87542.0547	46061.9513	154.1478	
237	134	70	石核	ホルンフェルス	黒褐色	B2	Ⅱ	13.9	8.2	5.3	670.2	−87538.018	46062.9557	154.558	
238	77	17	打製石斧	ホルンフェルス	黒褐色	B2	Ⅱ	7.4	4.3	2.1	90.5	−87538.6819	46064.0013	154.6767	一部破損
239	84	一括	打製石斧	ホルンフェルス	褐色	Ｔｒ10S	−	7.0	4.5	2.0	83.3	●	●	●	バチ形　磨耗大
240	85	一括	打製石斧	ホルンフェルス	黒褐色	Ｔｒ5	Ⅱ～Ⅲ	6.2	3.8	2.3	72.9	●	●	●	バチ形
241	78	11	打製石斧	ホルンフェルス	黒褐色／サビ	D4	Ⅱ	10.1	4.7	3.2	182.8	−87547.7197	46073.2574	153.5708	バチ形　一部欠損
242	71	42	打製石斧	ホルンフェルス	黒褐色	C3	Ⅲ	12.5	5.1	2.6	160.1	−87541.0465	46065.4262	154.2898	バチ形
243	70	一括	打製石斧	ホルンフェルス	黒褐色	Ｔｒ8	Ⅱ～Ⅲ	10.6	4.6	2.1	133.1	●	●	●	バチ形
244	80	80	打製石斧	ホルンフェルス	黒灰色	D4	Ⅲ	11.4	4.8	2.8	188.8	−87545.3308	46071.4847	153.7604	バチ形
245	82	71	打製石斧	ホルンフェルス	褐色	B3	Ⅲ	10.8	8.1	3.8	360.3	−87540.3822	46062.7188	154.2354	バチ形
246	81	5	打製石斧	ホルンフェルス	黒褐色／サビ	B2	Ⅱ	9.8	6.1	3.0	199.3	−87538.7422	46060.1062	154.7363	バチ形
247	75	6	打製石斧	ホルンフェルス	赤褐色	B2	Ⅱ	10.1	7.2	2.4	115.2	−87538.9678	46060.4423	154.8847	有肩形
248	76	30	打製石斧	ホルンフェルス	黒褐色	B3	Ⅱ	7.6	6.2	3.2	204.6	−87544.0546	46064.7753	154.1081	有肩形
249	73	一括	打製石斧	ホルンフェルス	黒褐色	Ｔｒ6	Ⅱ～Ⅲ	10.9	5.8	3.5	284.7	●	●	●	短冊形
250	72	一括	打製石斧	ホルンフェルス	褐色	C1	Ⅱ～Ⅲ	10.4	5.8	2.7	216.4	●	●	●	短冊形
251	83	21	打製石斧	ホルンフェルス	褐色	C4	Ⅱ	8.2	7.5	3.3	239.8	−87545.7367	46063.718	153.857	短冊形
252	87	67	部分磨製石斧	ホルンフェルス	浅黄色	B2	Ⅱ	6.4	6.0	2.5	92.5	−87536.2388	46061.9503	154.7677	
253	87	67	部分磨製石斧	ホルンフェルス	浅黄色	B2	Ⅱ	6.4	6.0	2.5	92.5	−87536.2388	46061.9503	154.7677	
254	123	42	磨石・敲石	尾鈴山酸性岩類	灰黄色	B2	Ⅱ	6.9	6.6	3.3	232.5	−87538.4361	46061.9615	154.8039	全周縁：敲打痕　ソロバン珠状
255	128	25	敲石	尾鈴山酸性岩類	にぶい黄橙色	C3	Ⅲ	6.7	6.7	3.2	213.2	−87540.7247	46068.2993	154.3083	全周縁：敲打痕　ソロバン珠状
256	121	一括	敲石	尾鈴山酸性岩類	灰黄色	Ｔｒ3	Ⅱ	6.6	6.4	3.6	225.8	●	●	●	全周縁：敲打痕　ソロバン珠状
257	122	32	敲石	砂岩	灰白色	D4	Ⅱ	7.1	6.9	2.7	203.5	−87547.4562	46070.9593	153.7288	全周縁：敲打痕
258	129	32	敲石	尾鈴山酸性岩類	浅黄色	C4	Ⅲ	8.6	8.0	4.0	422.3	−87549.1337	46069.5672	153.3655	全周縁：敲打痕　ソロバン珠状
259	118	一括	敲石	尾鈴山酸性岩類	灰黄色	Ｔｒ6	Ⅱ～Ⅲ	13.0	10.3	4.8	845.2	●	●	●	全周縁に敲打痕
260	127	33	敲石	尾鈴山酸性岩類	にぶい黄橙色	C4	Ⅲ	7.6	6.7	3.2	265.3	−87549.5505	46068.3481	153.4972	全周縁：敲打痕　ソロバン珠状
261	120	39	敲石	尾鈴山酸性岩類	にぶい黄色	C3	Ⅲ	10.1	7.6	3.9	491.3	−87540.5872	46065.0909	154.4883	長軸端：敲打痕
262	119	6	敲石	尾鈴山酸性岩類	灰黄色	C1	Ⅱ	8.4	7.5	3.4	357.8	−87532.4995	46066.5653	154.5076	長軸端：敲打痕
263	124	55	敲石	砂岩	にぶい黄色	D3	Ⅲ	15.2	7.4	3.9	640.5	−87541.6712	46072.9462	153.9902	
264	130	一括	凹石	砂岩	褐色	Ｔｒ3	Ⅱ	6.2	5.9	2.8	140.0	●	●	●	表裏面：凹み
265	126	4	磨石	尾鈴山酸性岩類	灰白色	C4	Ⅱ	7.4	6.8	3.0	231.6	−87546.7149	46069.9809	153.8064	表面中央部：敲打痕
266	125	52	磨石・敲石	尾鈴山酸性岩類	灰黄色	D4	Ⅲ	10.0	7.6	4.4	493.7	−87546.5673	46072.6511	153.5609	

表14　石器観察表（2）

掲載No	実測No	遺物取上げNo	器種	石材	色調	出土位置	層	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	X座標	Y座標	Z座標	備考
267	98	36	石錘	頁岩	赤褐色	B3	Ⅱ	4.5	4.4	1.0	28.1	−87543.464	46064.3483	154.2248	短軸方向の打ち欠き
268	96	一括	石錘	ホルンフェルス	黒灰色	C1	Ⅱ～Ⅲ	6.4	3.9	1.1	3.7	●	●	●	短軸方向の打ち欠き
269	97	35	石錘	砂岩	にぶい黄橙色	C3	Ⅲ	7.1	5.5	1.6	76.8	−87544.2009	46067.6697	154.0704	短軸方向の打ち欠き　一部破損
270	94	74	石錘	砂岩	黄褐色	C2	Ⅱ	4.0	3.4	6.7	13.3	−87537.4994	46065.5962	154.5666	長軸方向の打ち欠き
271	95	一括	石錘	ホルンフェルス	黒褐色	Tr4	Ⅲ	5.0	5.0	0.8	29.7	●	●	●	長軸方向の打ち欠き
272	93	65	石錘	尾鈴山酸性岩類	灰黄色	B3	Ⅲ	6.0	5.4	1.7	59.0	−87543.3895	46063.4951	154.0474	長軸方向の打ち欠き
273	90	1	石錘	砂岩	灰色	A2	Ⅱ	8.1	8.1	2.4	254.7	−87538.2741	46059.5912	154.8355	長軸方向の打ち欠き
274	91	16	石錘	砂岩	にぶい黄色	C4	Ⅱ	9.7	3.9	1.8	98.6	−87546.0203	46068.4747	154.0539	長軸方向の打ち欠き
275	92	74	石錘	砂岩	灰黄色	D4	Ⅲ	6.7	4.1	1.1	42.1	−87548.0829	46070.9932	153.4485	長軸方向の打ち欠き
276	135	19	ペット石	チャート	黒灰色	C3	Ⅱ	3.0	2.1	0.9	8.4	−87542.6853	46068.5342	154.2107	
277	106	72	石器未製品	チャート	黒灰色	D4	Ⅲ	2.3	1.4	0.7	2.4	−87548.0345	46071.0475	153.3891	
278	105	75	石器未製品	黒曜石(姫島産)	灰白色	C2	Ⅱ	2.0	1.8	0.7	1.8	−87536.75	46066.0311	154.6862	石鏃？
279	36	一括	用途不明石器	ホルンフェルス	黒灰色	SH13	−	7.1	3.5	1.0	25.2	●	●	●	
280	74	7	用途不明石器	ホルンフェルス	黒褐色	B2	Ⅱ	10.2	5.1	1.4	77.1	−87537.1052	46061.4238	154.9963	刃部調整あり
343	37	一括	打製石鏃	ホルンフェルス	浅黄色	SA2a	覆土	2.5	1.7	0.6	1.9	●	●	●	二等辺三角形　凹基式
344	39	38	打製石鏃	ガラス質安山岩	黒褐色	SA2b	覆土	1.9	1.6	0.3	0.7	−87532.2468	46067.5496	154.3788	二等辺三角形　凹基式
345	38	36	打製石鏃	ガラス質安山岩	黒褐色	SA2b	覆土	1.7	1.4	0.4	0.5	−87535.6929	46068.7394	154.1033	二等辺三角形　凹基式
346	43	24	磨製石鏃	緑色凝灰岩	青緑色	SA2c	覆土	4.3	1.7	0.3	2.8	−87535.022	46068.1187	153.8356	一部破損
347	34	1	用途不明石器	チャート	黒褐色	SA2dベッド	覆土	2.0	1.6	0.7	2.0	−87535.1933	46064.3315	154.4869	
348	31	13	剥片	ホルンフェルス	黒褐色	SA2a	覆土	7.2	4.5	1.0	23.7	−87534.5591	46065.1453	154.3549	
349	25	5①	剥片	黒曜石(姫島産)	灰白色	SA2dベッド	覆土	3.6	2.0	0.7	3.0	−87536.827	46065.4262	154.4917	
350	50	5	剥片	ホルンフェルス	黒灰色	SA2a	覆土	5.6	6.5	2.4	88.3	−87532.8207	46065.7337	154.3916	刃部加工あり？　裏面：自然面
351	56	9	石核	ホルンフェルス	黒褐色／サビ	SA2c	覆土	9.0	7.1	5.5	437.1	−87536.7016	46066.6006	154.1826	
352	57	67	敲石	チャート	青灰色	SA2b	覆土	9.0	5.3	5.5	322.6	●	●	●	長端部：敲打痕　データ欠
353	13	8	敲石	砂岩	にぶい黄色	SA2d	覆土	10.2	7.9	3.7	322.9	−87536.5326	46065.992	154.3632	長端部：敲打痕
354	66	10	石錘	砂岩	淡黄色	SA2a	覆土	6.1	4.2	1.1	45.8	−87533.5798	46066.4414	154.2133	長軸方向の打ち欠き
355	65	26	石錘	ホルンフェルス	褐色	SA2a	覆土	5.2	3.7	0.7	19.7	−87532.2818	46067.0741	154.4349	長軸方向の打ち欠き
356	63	4	石錘	砂岩	にぶい黄色	SA2d	覆土	4.3	4.0	1.1	26.5	−87535.6765	46064.5174	154.3915	長軸方向の打ち欠き　一部破損
357	64	11	石錘	ホルンフェルス	黒灰色	SA2a	覆土	4.8	3.3	0.9	22.5	−87534.16	46066.3736	154.3541	短軸方向の打ち欠き
358	131	28	打製石斧	ホルンフェルス	黒灰色	SA2a	覆土	7.2	5.1	1.5	87.1	−87532.3566	46064.7477	154.5319	短冊形　一部欠損
359	46	13	打製石斧	ホルンフェルス	黄褐色	SA2c	覆土	9.4	5.6	2.7		−87536.4568	46067.6367	154.0576	バチ形　一部欠損
360	52	2	部分磨製石斧	ホルンフェルス	黄褐色	SA2d	覆土	7.7	5.3	2.9	122.3	−87535.4491	46064.6052	154.3425	刃部は滑らかな研磨　擦痕はなし
361	10	17	石皿	砂岩	にぶい黄色	SA2c	覆土	18.0	12.4	7.7	1801.7	−87536.2873	46068.7676	154.0505	表裏に磨痕あり
362	9	23	凹石	砂岩	褐色	SA2c	覆土	12.6	8.1	5.2	715.5	−87534.9188	46068.1266	153.8626	表裏に敲打痕による凹みあり
363	3	1	砥石	尾鈴山酸性岩類	にぶい黄橙色	SA2d	覆土	17.8	8.4	3.7	758.0	−87535.5714	46064.9221	154.2968	片面：擦痕
364	137	44	台石	尾鈴山酸性岩類	にぶい黄橙色	SA2b	覆土	27.0	31.1	5.1	6600.0	−87533.7462	46068.1093	154.1874	SA2の床直上出土
365	8	12	台石	尾鈴山酸性岩類	にぶい黄橙色	SA2c	覆土	17.0	14.3	6.5	2201.6	−87537.4215	46066.2863	154.2526	
388	41	30	用途不明石器	ガラス質安山岩	黒褐色	SZ1	覆土	2.2	1.3	0.4	0.6	−87545.6303	46068.017	153.8302	二等辺三角形　凹基式　一部欠損
389	44	55	石器未製品	チャート	黒褐色	SZ1	覆土	2.0	1.5	0.7	1.5	−87543.0025	46067.8595	153.6379	
390	53	48	石匙	チャート	黒灰色	SZ1	覆土	2.4	5.8	0.9	8.5	−87543.1426	46068.0056	153.6957	横型
391	19	19	剥片	ホルンフェルス	黒褐色	SZ1	覆土	6.4	5.1	1.5	46.4	−87545.123	46068.5596	154.0289	刃部加工？あり
392	18	14	剥片	ホルンフェルス	黒褐色	SZ1	覆土	5.7	8.2	2.2	89.9	−87541.7045	46070.2607	153.6579	刃部加工？あり
393	12	15	敲石	尾鈴山酸性岩類	にぶい黄橙色	SZ1	覆土	8.6	9.4	4.4	525.3	−87542.2797	46069.0479	153.9308	全周縁：敲打痕あり
394	14	32	磨石	尾鈴山酸性岩類	灰白色	SZ1	覆土	6.4	7.2	2.4	177.2	−87542.6025	46070.7928	153.7973	表裏面：磨痕あり
395	15	43	磨石	砂岩	灰白色	SZ1	覆土	10.6	14.4	5.6	1349.6	−87543.547	46070.6472	153.5695	片面：磨痕あり
396	59	38	石錘	砂岩	灰黄色	SZ2	覆土	6.9	5.5	1.9	93.8	−87541.3412	46069.8584	153.8909	長軸方向の打ち欠き
397	6	54	台石	尾鈴山酸性岩類	浅黄色	SZ1	覆土	21.1	19.7	8.6	4131.4	−87545.0744	46067.9285	153.8894	
398	4	56	台石	尾鈴山酸性岩類	灰白色	SZ1	覆土	31.8	29.0	9.2	11300.0	−87542.24	46070.0006	153.7179	表面：磨痕？あり　SZ1床面直上出土
399	5	4	台石	尾鈴山酸性岩類	にぶい黄橙色	SZ1	覆土	23.3	13.2	6.9	3451.4	−87543.5138	46070.3393	153.8719	表裏に多くの擦り痕？あり
400	2	40	砥石	砂岩	灰黄色	SZ1	覆土	22.3	10.2	8.2	2941.7	−87544.0103	46070.104	153.5596	表裏面に磨痕あり
408	28	12	剥片	尾鈴山酸性岩類	浅黄色	SA1Y	−	10.7	5.0	2.0	114.7	−87538.8331	46066.4692	154.3732	
466	103	一括	磨製石鏃	緑色凝灰岩	灰色	Tr3	Ⅱ～Ⅲ	3.5	2.2	0.2	1.7	●	●	●	
467	104	一括	磨製石鏃未製品	緑色凝灰岩	青灰色	B1	Ⅱ	3.1	2.8	0.6	5.4	●	●	●	
468	110	38	砥石	天草陶石？	灰白色	C3	Ⅲ	12.9	2.3	1.2	65.3	−87544.2849	46068.2186	153.9744	大陸系磨製石斧から転用
469	113	46	剥片	ホルンフェルス	青灰色	D4	Ⅲ	8.4	2.3	1.2	18.5	−87548.2172	46070.9725	153.4749	旧石器ｊ時代帰属
470	116	43	剥片	ホルンフェルス	褐色	C3	Ⅲ	5.0	2.7	1.3	13.8	−87541.1956	46065.4809	154.3044	旧石器ｊ時代帰属
471	111	一括	剥片	珪質頁岩	黒褐色	Tr6	Ⅱ～Ⅲ	5.6	2.0	1.2	10.0	●	●	●	旧石器ｊ時代帰属
472	114	20	剥片	流紋岩	灰色	D4	Ⅱ	7.8	2.3	1.2	17.9	−87545.5241	46071.5821	153.8667	旧石器ｊ時代帰属

第Ⅴ章　赤石遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

平成20年７月に竪穴住居SA２の床直上埋土の一部（乾燥重量14.8kg）でフローテーション作業を行い、獲得した浮遊物の中から炭化種実等を選別検出した。このSA２の炭化種実を始め、SA１・SZ１・SC１及び遺物包含層から出土した炭化種実や炭化材、遺構埋土を検体とした種実同定・放射性炭素年代測定・樹種同定・植物珪酸体分析・花粉分析を（株）古環境研究所に、当時の環境や各遺構の詳細な時期、性格的位置づけ等を行う目的で委託して実施した。以下にその分析結果報告を掲載する。　（谷口）

第１節　放射性炭素年代測定

１　はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約５万年前までの年代測定が可能である。

２　試料と方法

試料No	地点・層準	種類	前処理	測定法
No.１	ＳＡ１　竪穴住居	炭化材	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
No.２	ＳＡ２　竪穴住居	炭化材	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
No.３	ＳＣ１　土坑	炭化材	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
No.４	ＳＺ１　不明遺構	炭化種実	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ

ＡＭＳ：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

３　測定結果

試料No	測定No（PED－）	$\delta^{13}C$（‰）	^{14}C年代（年ＢＰ）	暦年代（較正年代）	
				１σ（68.2%確率）	２σ（95.4%確率）
No.１	11215	−28.48±0.26	750±25	ＡＤ1255－1285（68.2%）	ＡＤ1220－1285（95.4%）
No.２	11216	−27.90±0.26	2165±25	ＢＣ 350－ 300（39.9%） ＢＣ 210－ 170（28.3%）	ＢＣ 360－ 270（49.1%） ＢＣ 260－ 150（44.2%） ＢＣ 140－ 110（ 2.1%）
No.３	11217	−27.01±0.27	755±20	ＡＤ1250－1280（68.2%）	ＡＤ1225－1285（95.4%）
No.４	11218	−25.07±0.27	2220±25	ＢＣ 370－ 340（ 8.3%） ＢＣ 310－ 200（59.9%）	ＢＣ 390－ 340（19.1%） ＢＣ 330－ 200（76.3%）

i）$\delta^{13}C$（デルタ）測定値

試料の測定^{14}C／^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C／^{12}C）。この値は標準物質（ＰＤＢ）

の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ13C値を−25（‰）に標準化することで同位体分別効果を補正する。

ii）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C／^{12}C比から、現在（AD1950年基点）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。BP はBefore Physics（Present）を示す。

iii）暦年代（Calendar Age）

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中^{14}C濃度の変動および^{14}Cの半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づけることができる。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な^{14}C測定値およびサンゴのU／Th（ウラン／トリウム）年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線データは IntCal 04、較正プログラムは OxCal 3.1である。

暦年代（較正年代）は、^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率法により１σ（68.2%確率）と２σ（95.4%確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。（）内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4　所見

加速器質量分析法（ＡＭＳ）による放射性炭素年代測定の結果、№１の炭化材では750±25年ＢＰ（２σの暦年代でAD1220～1285年）、№２の炭化材では2165±25年BP（BC360～270, 260～150, 140～110年）、№３の炭化材では755±20年BP（AD1225～1285年）、№４の炭化種実では2220±25年ＢＰ（BC390～340, 330～200年）の年代値が得られた。

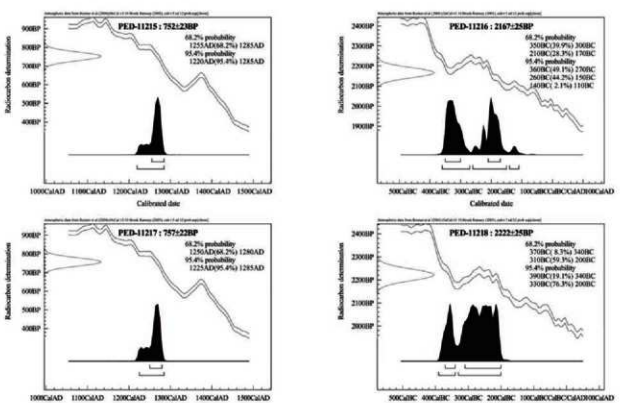


図63　暦年較正結果

第2節　樹種同定

1　はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2　試料

試料は、**ＳＡ１**竪穴住居、**ＳＡ２**竪穴住居、**ＳＣ１**土坑の埋土から採取された炭化材３点である。

3　方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4　結果

調査区内からの複数の炭化種実の出現と併せ、表15に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表15　樹種同定結果

遺構	層位	種類	結　果（和名／学名）
ＳＡ１	埋土	炭化材	コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*
ＳＡ２	埋土	炭化材	イスノキ　*Distylium racemosum Sieb. et Zucc.*
ＳＣ１	埋土	炭化材	コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*

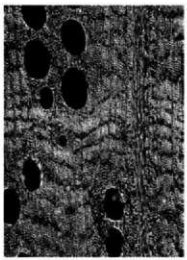
コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*　ブナ科（写真５）

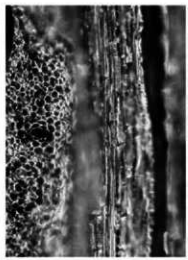
横断面：中型から大型の道管が１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1．5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

イスノキ　*Distylium racemosum Sieb. et Zucc.*　マンサク科（写真５）

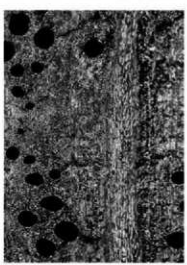
横断面：小型でやや角張った道管がほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に並んで見られ、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく15前後のものが多い。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。

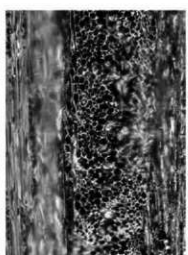




横断面 ：0.4mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

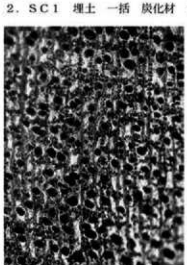
1．SA1　埋土　一括　炭化材　コナラ属アカガシ亜属

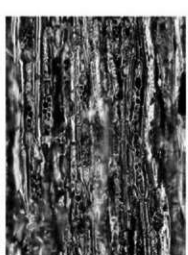




横断面 ：0.4mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

2．SC1　埋土　一括　炭化材　コナラ属アカガシ亜属





横断面 ：0.4mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

3．SA2　埋土　一括　炭化材　イスノキ

写真5　炭化材

以上の形質よりイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1mに達する。耐朽性および保存性の高い材で、建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭などに用いられる。

5　考察

樹種同定の結果、**ＳＡ１**竪穴住居と**ＳＣ１**土坑の炭化材はコナラ属アカガシ亜属、**ＳＡ２**竪穴住居の炭化材はイスノキと同定された。コナラ属アカガシ亜属は、一般にカシと総称され、イチイガシ、アラカシなど多くの種がある。イスノキは暖地の山中に自生する常緑広葉樹である。いずれも照葉樹林の主要な要素であり、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

第3節　炭化種実同定

1　はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

2　試料

試料は、**ＳＡ１**竪穴住居と**ＳＡ２**竪穴住居の埋土および各グリッドのⅡ層とⅢ層から採取・選別された炭化物である。試料の詳細を表16に示す。

3　方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定した。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4　結果

ｉ）分類群

分析の結果、樹木1、草本1の計2分類群が同定された。表15に結果を示し、主要な分類群について写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

イチイガシ　*Quercus gilva* Blume　子葉（半形・破片）　ブナ科

炭化して黒色で楕円形を呈する。表面はなめらかで、縦方向に一条の凹線が入る。

〔草本〕

ニシキソウ亜属　*Euphorbia* Subgen. *Chamaesyce*　種子　トウダイグサ科

種子は茶褐色で卵状4鈍稜体を呈する。基部はやや尖り、背面と左右の3稜は隆条状で稜間の面はそれぞれ数条の横ひだがある。炭化していない。

表16　種実同定結果

No	遺構・グリッド	層位	取上げNo	分類群 学名	分類群 和名	部位	個数	備考
1	C4	Ⅲ	31	*Quercus gilva* Blume	イチイガシ	子葉（破片）	6	
2	C4	Ⅲ	36	*Quercus gilva* Blume	イチイガシ	子葉（半形）	1	
3	D2	Ⅲ	一括	*Quercus gilva* Blume	イチイガシ	子葉（破片）	3	
4	D3	Ⅱ	一括	*Quercus gilva* Blume	イチイガシ	子葉（破片）	2	
5	SA1	埋土	9	*Quercus gilva* Blume	イチイガシ	子葉（破片）	1	
6	SA2	埋土	一括	*Euphorbia* Subgen. *Chamaesyce*	ニシキソウ亜属	種子	3	炭化物42、炭化材6 昆虫片9

ii）種実群集の特徴

SA1竪穴住居の埋土および各グリッドのⅡ層とⅢ層から採取された種実13点は、いずれも炭化したイチイガシの子葉（半形・破片）と同定された。

SA2竪穴住居から採取された種実3点は、いずれもニシキソウ亜属と同定された。これらは未炭化である。また、種実ではない炭化物42点、炭化材6点、昆虫片9点が認められた。

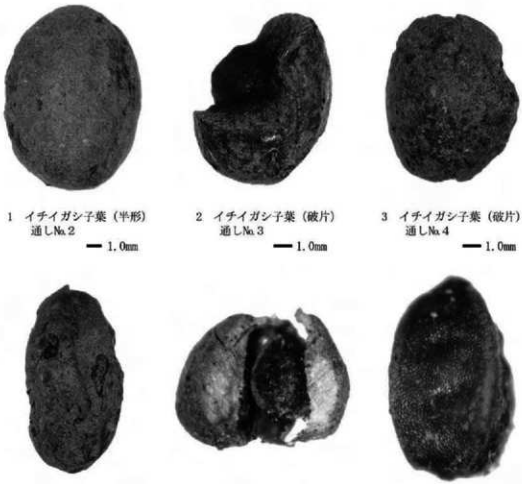
5　考察

種実同定の結果、イチイガシおよびニシキソウ亜属が同定された。イチイガシは、西南日本の照葉樹林を構成する主要高木であり、カシ類の中でアク抜きなしに食べられる唯一の種類である。ニシキソウ亜属は、路傍や田畑に地面を被うように繁茂する雑草であり、有用植物ではない。

第4節　植物珪酸体分析

1　はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。



1 イチイガシ子葉（半形） 通しNo.2 — 1.0mm
2 イチイガシ子葉（破片） 通しNo.3 — 1.0mm
3 イチイガシ子葉（破片） 通しNo.4 — 1.0mm
4 イチイガシ子葉（破片） 通しNo.5 — 1.0mm
5 ニシキソウ亜属種子 通しNo.6 — 0.5mm
6 ニシキソウ亜属種子 通しNo.6 — 0.1mm

写真6　種実

2　試料

分析試料は、弥生時代中期とされるＳＡ２竪穴住居の埋土から採取された１点である。

3　分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

①試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

②試料約１ｇに対し直径約40μｍのガラスビーズを約0.02ｇ添加（0.1ｍｇの精度で秤量）

③電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

④超音波水中照射（300Ｗ・42ＫＨｚ・10分間）による分散

⑤沈底法による20μｍ以下の微粒子除去

⑥封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作製

⑦検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ

個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10－５ｇ）をかけて、単位面積で層厚１㎝あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山, 2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4　分析結果

ｉ）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、その他

ⅱ）植物珪酸体の検出状況

分析の結果、ネザサ節型やミヤコザサ節型が比較的多く検出され、ススキ属型、ウシクサ族Ａ、メダケ節型なども認められた。また、樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）なども検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある（杉山, 1999）。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い（近藤・佐瀬, 1986）。おもな分類群の推定生産量によると、ネザサ節型およびミヤコザサ節型が優勢となっている。

5　植物珪酸体分析から推定される植生と環境

弥生時代中期とされるＳＡ２竪穴住居の埋土の堆積当時は、メダケ属（おもにネザサ節）やササ属（おもにミヤコザサ節）などの竹笹類をはじめ、ススキ属やチガヤ属なども生育する比較的開かれた環境であったと考えられ、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。ササ属については、照葉樹林の林床に生育していた可能性も考えられる。

表17　植物珪酸体分析結果　検出密度（単位：×100　個／g）

分類群	学名	地点・試料 SA2 埋土
イネ科	Gramineae	
ススキ属型	*Miscanthus* type	7
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	36
タケ亜科	Bambusoideae	
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocal	22
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	153
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	7
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	255
未分類等	Others	73
その他のイネ科	Others	
表皮毛起源	Husk hair origin	15
棒状珪酸体	Rod-shaped	87
未分類等	Others	269
樹木起源	Arboreal	
ブナ科（シイ属）	*Castanopsis*	15
クスノキ科	Lauraceae	29
マンサク科（イスノキ属）	*Distylium*	58
その他	Others	22
植物珪酸体総数	Total	1049

おもな分類群の推定生産量（単位：kg／m²・cm）		
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.09
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocal	0.25
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.73
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	0.05
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.76

タケ亜科の比率（%）		
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocal	14
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	41
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	3
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	42

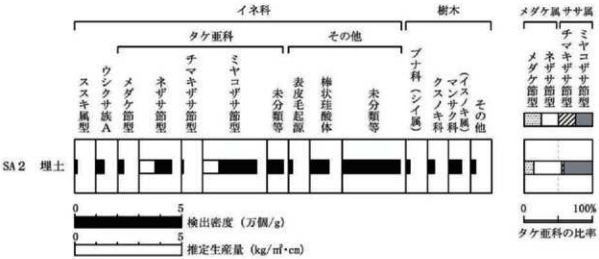


図64　植物珪酸体分析結果

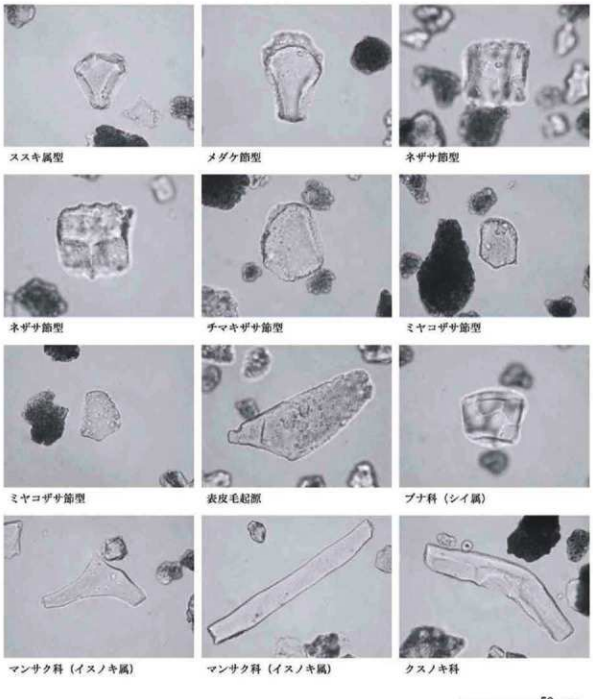


写真7　植物珪酸体

第5節　花粉分析

1　はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2　試料

分析試料は、弥生時代中期とされるＳＡ２竪穴住居の埋土から採取された１点である。これは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

3　方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

①試料から１㎤を秤量する。

②0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎する。

③水洗処理の後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去する。

④25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

⑤水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。

⑥再び氷酢酸を加えて水洗処理を行う。

⑦沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製する。

⑧検鏡を生物顕微鏡によって300～1000倍で行う。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行う。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示す。

4　結果

ｉ）分類群

出現した分類群は、樹木花粉２、草本花粉１、シダ植物胞子２形態の計５個である。分析結果を表１に示し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属

〔草本花粉〕

イネ科

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

ii）花粉群集の特徴

分析の結果、樹木花粉のマツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属、草本花粉のイネ科、およびシダ植物胞子が検出されたが、いずれも少量である。

5　花粉分析から推定される植生と環境

弥生時代中期とされるＳＡ２竪穴住居の埋土では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、周辺にマツ類やナラ類などの樹木、およびイネ科などの草本類が分布していた可能性が考えられる。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが想定される。

表18　花粉分析結果

分類群		SA2
学名	和名	埋土
Arboreal pollen	樹木花粉	
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	1
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	
Gramineae	イネ科	1
Fern spore	シダ植物胞子	
Monolate type spore	単条溝胞子	3
Trilate type spore	三条溝胞子	11
Arboreal pollen	樹木花粉	4
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	1
Total pollen	花粉総数	5
Pollen frequencies of 1 cm³	試料1 cm³中の花粉密度	2.4 ×10
Unknown pollen	未同定花粉	2
Fern spore	シダ植物胞子	14
Helminth eggs	寄生虫卵	(−)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(−)
Charcoal fragments	微細炭化物	

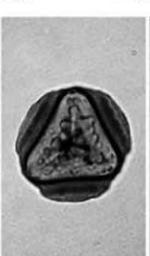
1　マツ属複維管束亜属

2　コナラ属コナラ亜属

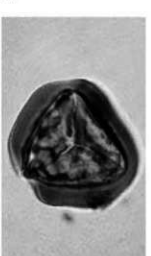
3　イネ科

4　シダ植物単条溝胞子

5　シダ植物単条溝胞子



6　シダ植物三条溝胞子



7　シダ植物三条溝胞子

10 μm

写真8　花粉・胞子

引 用 ・ 参 考 文 献

Bronk Ramsey C.（1995）Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy，The OxCal Program，Radiocarbon，37(2)，p.425－430.

Bronk Ramsey C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal，Radiocarbon，43（2A），355－363.

Paula J Reimer et al.，（2004）IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration，26-0 ka BP．Radiocarbon 46，p.1029－1058.

笠原安夫（1985）日本雑草図説．養賢堂，494p.

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業．雄山閣　出版，p.131－139.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248－262.

近藤鎗三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31－63.

鳥倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

鳥地　謙・佐伯　浩・原田　浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．文永堂出版，290p.

鳥地　謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，296p.

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69－84.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究，38(2)，p.109－123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189－213.

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82－110.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代，p.3－20.

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276－283.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15－29.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史．植生史研究特別１号．植生史研究会，242p.

吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナルNo355，ニューサイエンス社，p.2－14.

渡辺誠（1975）縄文時代の植物食．雄山閣，187p.

図　　版

図版一　住吉B遺跡　調査地遠景

遺跡東側上空から住吉B遺跡および上面木山方面を望む（2005（平成16）年10月撮影）

遺跡上空から東側日向灘方面を望む

図版一　住吉B遺跡　南壁地層断面および縄文時代早期の遺構（一）

南壁地層断面（北東から）

縄文時代早期遺構面全景（南から）

図版三　住吉B遺跡　縄文時代早期の遺構（二）

南西部礫集中部（北西から）

ＳＣ２検出状況（南東から）

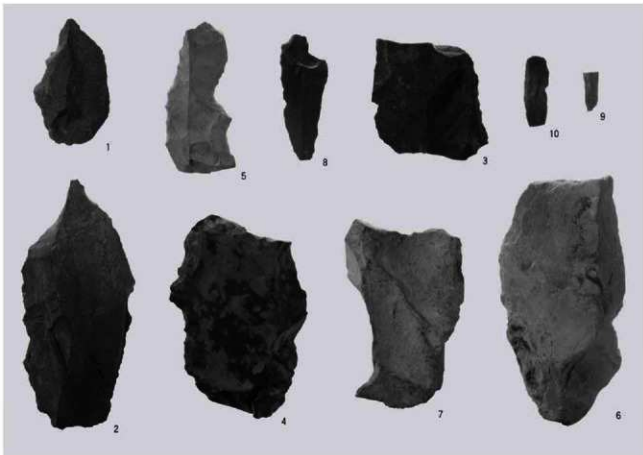
ＳＣ２縄文土器出土状況
（南西から）

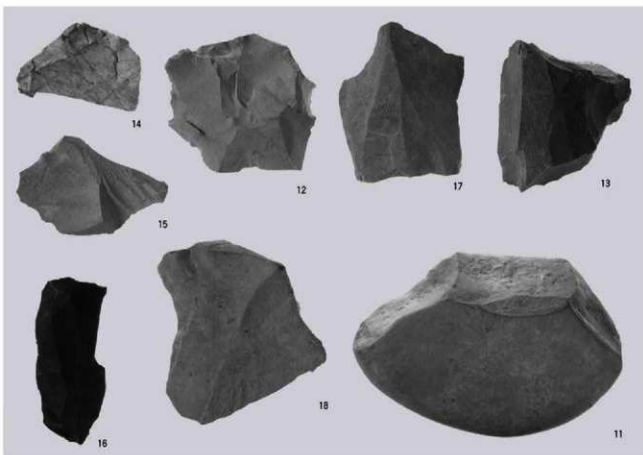
図版四　住吉B遺跡　縄文時代早期の遺構（三）

ＳＩ１検出状況（北東から）

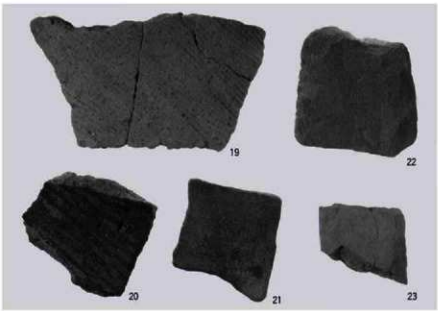
ＳＩ１検出状況（南から）

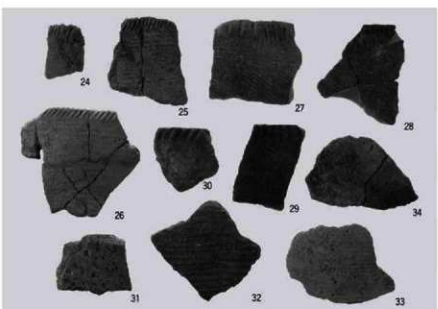
図版五　住吉B遺跡　旧石器時代の遺物

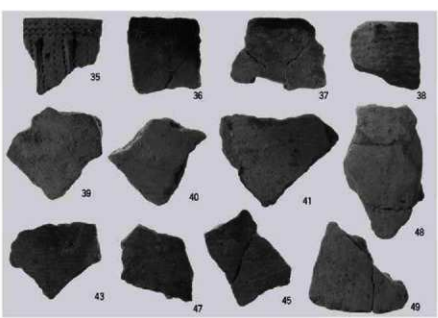




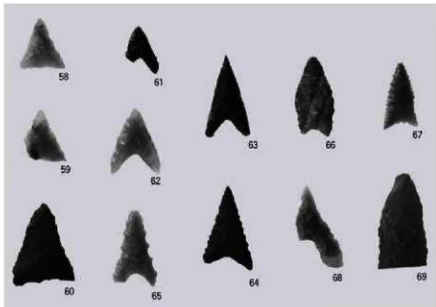
図版六　住吉B遺跡　SC2・SI1出土および縄文時代早期の遺物（一）

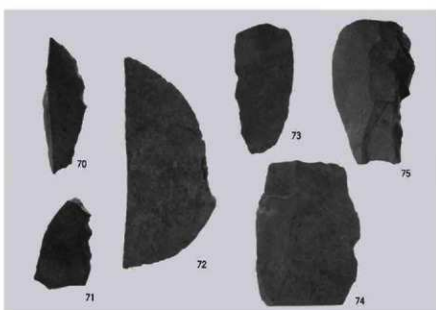


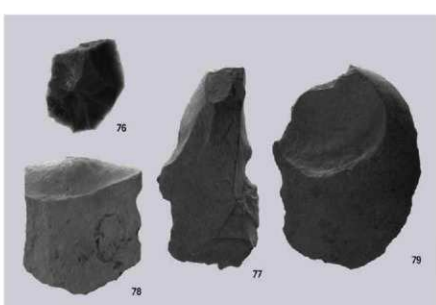




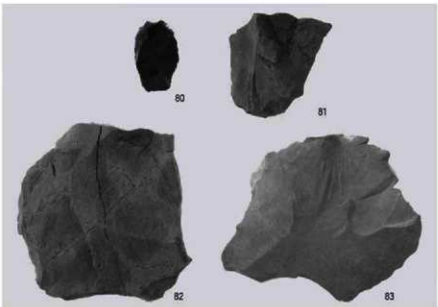
図版七　住吉B遺跡　縄文時代早期の遺物（二）

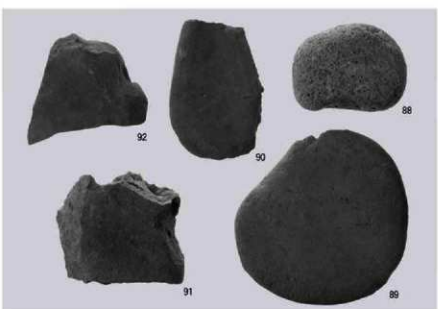


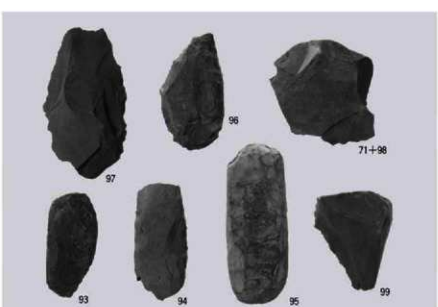




図版八　住吉B遺跡　縄文時代早期の遺物（三）







図版九　赤石遺跡　調査区

調査地遠景
（遺跡北西上空から）

調査区全景
（上が北東）

調査区西壁土層断面
（東から）

図版十　赤石遺跡　遺物包含層および縄文時代の遺構（一）

Ⅲ層（Ｂ２区）出土遺物
No426（北から）

ＳＡ１遺物出土状況
（西から）

ＳＡ１出土遺物
No106（北から）

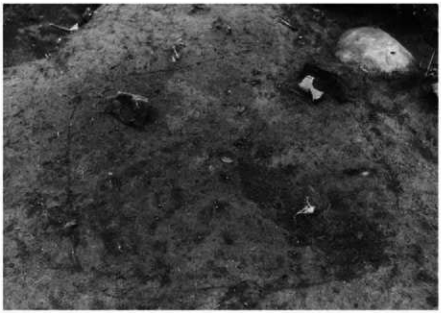
図版十一　赤石遺跡　縄文時代の遺構（二）

ＳＣ１検出状況
（北西から）

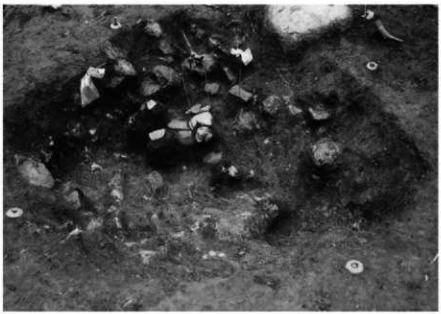
ＳＣ１土層観察ベルト
断面（北から）

ＳＣ２土層観察ベルト
断面（北東から）

図版十二　赤石遺跡　縄文時代の遺構（三）



ＳＣ３検出状況
（北東から）



ＳＣ３遺物出土状況
（北東から）

ＳＣ４検出状況
（東から）

ＳＣ10埋土土層断面
（北東から）

ＳＣ11遺物出土状況
（北から）

ＳＣ11埋土土層断面
（北東から）

図版十四　赤石遺跡　弥生時代の遺構（一）

ＳＡ２遺物出土状況
（北西から）

ＳＡ２床面検出状況
（南東から）

ＳＡ２完掘状況
（北西から）